

---

# 正義の味方と武士娘

赤い外套

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

正義の味方と武士娘

### 【Zコード】

N7404L

### 【作者名】

赤い外套

### 【あらすじ】

遠坂凜のおかげで自分の為に生きてみたいと思った衛富士郎。死に際に凜は士郎にもう一度チャンスを与えて、平行世界へと送る。

- ・ 新たな世界で士郎は、かけがえのない仲間達と出会つのであった・

## ～プロローグ 正義の味方の旅立ち～

パチ パチ パチ

「」は、とある戦争の跡地

焼き果てた荒野に広がるのは死体の山と元は民家だったである「炭の山」

そんな悲しい世界の中心に少女と青年、二つの人影がある

「ぐすつ・・・」めんなさい・・・ありがとう・・・「めんなさい」

「大丈夫さ・・・心配ない」

泣きながら感謝と謝罪を述べる少女に  
重傷を負っている青年は少女に心配をかけない為  
少女の頭を撫でながら、とてもやさしい声で言った

「さあ、一緒に人のいる所まで行こう」

青年はどこからともなくコートを取り出し一枚を少女に着せ  
もう一枚を、自らの傷を少女に隠すように羽織る

「ぐすつ・・・うん」

しばらく歩くと小さな村に着く

青年は身寄りのなくなつた少女をその村に預け、すぐに村を発つた

「ありがとー、お兄ちゃん」

そんな青年を見送る少女に、笑顔で手を振りながら

「ぐつ・・・・はあはあ」

村から出て数時間、重傷だつた青年はついに倒れる

「そろそろ限界か・・・」

青年の名は衛宮士郎

フリー・ランスの魔術使いとして世界を回り

隠匿すべき魔術を人々を救う為に使いすぎて、封印指定を受ける  
彼は協会の執行者に追われながらも戦地を転々と渡り、人々を救い  
続けた

「最後に、凛の顔が見たかったな・・・投影、<sup>トレイス</sup><sub>オン</sub>開始」

士郎の手に現れたのは捻じれた剣

これこそ衛宮士郎が得意とする投影<sup>グラディション・エニア</sup>と呼ばれる魔術  
術者の創造理念によつて真作を再現する特殊な魔術で  
魔力によってオリジナルの鏡像を物質化する

しかし、士郎の場合投影はとある魔術から零れ落ちたもので  
宝具と呼ばれる神秘までも再現する事ができ

原形を留められないほど破損するか

士郎が壊れると思わない限りいつまでも存在し続ける

士郎は封印指定されている自らの魔術<sup>ブローカン・ファンタズム</sup>が人の手に渡らぬ為  
内包された魔力を爆発させる壊れた幻想によつて  
自らの体を消滅させようとしていた

「待ちなさい」

その時、声をかけられそちらを向くと  
会いたいと思った人物が立っていた

「凛・・・か？」

「久しぶりね士郎」

それは紛れもなく元恋人である遠坂凛だった  
聖杯戦争後も士郎の理想を手助けしてくれた大切なパートナー  
封印指定にされた時に迷惑をかけない為、士郎自ら離れたのだ

「ああ、久しぶり」

「ずいぶん無茶したみたいね。その格好まるでアーチャーみたいじ  
やない」

士郎の今の姿は白い髪に浅黒い肌、かつての彼女の相棒と瓜二つで  
ある

「俺とあいつは違うよ。世界と契約なんて馬鹿げた事はしないし、  
この結末に後悔もしてない」

「・・・」

凛の表情は何かを見極めようとしているような真剣な顔

「それにさ、自分の命を犠牲にはしてないつもりだ。残されるもの

の悲しみとか、色々考えるよつになつたから・・・」  
「これは凛のおかげだな」

凛との生活で士郎は変わつた  
昔のように、すぐに自分の命を捨てるような行動はしなくなつた  
ただ、今回は運が悪かつた  
戦地から難民を救うだけの予定だつたのだが  
敵の中に魔術師が混ざつていたのだ  
その魔術師は、戦争中の混乱を利用して士郎を狙つていたのだ  
その為に、予想外の怪我を負い今に至る

「そう。で、今のアソタは後悔してないからこのまま死んでもいい  
つてわけ?」

「そうだな。後悔はしていないけど・・・」

「けど?」

「凛と過ごした日々は楽しかつたし、少し未練はあるかな・・・も  
う少し自分の為にも生きればよかつたなつて」

士郎のその言葉を聞いたとたん、凛は笑顔になる

「そつか。私はアソタを変えられたんだ」

「凛?」

そんな凛の様子に士郎は首をかしげる

「じゃあ、もう一回チャンスをあげる。この世界にアソタの居場所

はないけど、ビビが別の世界で楽しく暮らしなやー」

凛は自らの赤いペンダントを土郎の首にかけ呪文を唱え、傷を塞ぐ  
そして手に持っていた宝石剣が輝きだす

「そのペンダントはあげるわ。その代わり、私は貴方の持つてた方  
を貰うから」

いつの間に取ったのか、懐に入つたいたはずのペンダントは凛の手  
に握られていた

今俺が首にかけているのは、英靈エミヤが生涯持ち続け凛に返した  
ペンダント  
そして、凛が持つてているのは俺の命を救つ為に、凛が使用したペン  
ダント

「また、凛ー俺を他の世界に逃がしたなんて知れたら・・・・・！」

言葉の途中でまるで「それ以上言わせない」とこいつよひ、凛はキ  
スをして口を塞いできた

「自分の肉体を消そりとしたヤツがよく言つわよ。・・・安心なさ  
い、ちゃんと対策はあるから」

そつこつた凛の目には僅かだが涙が浮かんでいた

「新しい世界では、私の事はいいから恋人でも見つけて幸せに暮ら  
しなさい」

宝石剣はさりに輝きだし、空間に歪みができる

「凛！！」

「ありがとう。私の大好きな士郎」

光に包まれる中、最後に見たのはどこか少女の面影を残す  
とても美しい凛の笑顔だった

新たな世界に旅立つ正義の味方

彼はそこでかけがえのない仲間達と出会つ

## 「プロローグ 正義の味方の旅立ち」（後書き）

Fateと真剣で私に恋しなさいのクロスオーバーです。  
これはUBW後の士郎です。凛のおかげで結構まともになつていま  
す。

なので、原作通りの破綻した衛宮士郎が好きな方はひきかえしてく  
ださい。

基本的にはもう一つの執筆作品である「正義の味方とやさしい少女」  
の方中心で書いてるので、こちらは更新が遅いかもしれません。

それではまた次回！！

## 風間ファミリー

強烈な台風が関東に上陸した今日、直江大和の下へキヤップ」と風間翔一から招集がかかつた

理由は、先日知った『センチュリー・プラン』別名『コウカセイラン竜舌蘭』を台風から守る為だ

「花がちゃんと咲けるよう保護するぞー！」

キヤップはそつまつが、近年稀に見る大型台風

小学生の俺達では簡単に吹き飛ばされて、場合によっては死ぬ可能性もあるだろ？

「なあ、竜舌蘭は普通に栽培されてるらしいぜ？今回ダメでも、また今度どっかで見ればよくね？」

「ダメだ！あの花は、あの花だけなんだ！代わりなんてねえーー空き地で咲いてるあの花をみんなで見たいんだ」

「あたしもー！」

キヤップの意見に、我らが風間ファミリーのマスコット的存在である一子、通称ワン子も賛同する

俺だって諦めたいわけじゃない。でも・・・

「危険すぎるって言つてんだ。だから、姉さん、よろしく頼みます

「ああ、任せろ。私が必ずみんなを守る」

俺の言葉に力強く頷いてくれたのは、ここ川神市で有名な武道寺

『川神院』の一人娘、川神百代

俺達の一つ先輩で、一言で言えば『強い』

どんな事が起きても姉さんがいれば何とかなる気がする

ちなみに残りのメンバーは、力自慢の島津ガクトにコンピューター等の機械関係に強い師岡卓也、通称モロ

力の弱いモロやワニ子は姉さんと繩で繋ぎ、俺達は全員で竜舌蘭を目指す

たまに飛んでくる木材等は全て姉さんが弾いてくれる

「・・・あ」

「ーー、椎名、椎名か！」

空き地へ着くとすでに椎名京がいた

椎名は学校で虜められていて、最近俺達を眺めている事が多い

「こんな時になに出歩いてやがる！？」

「み、みんな・・・」の花咲ぐの楽しみだって、言つてたから・・・

「

どうやら、竜舌蘭を守ろうとしてくれていたらしい  
このまま一人で帰しても危ないので一緒に作業をする事にした  
花弁が吹き飛ばされない様、ビニールで覆つていく  
が、その時！

ブチツ！

ビュオツ！

近くの工事現場の木材を縛つてあつた紐が千切れ、木材が大量に飛んできた

「みんな！私の後ろに固まれー！」（めずいな。いくら私でも）の量は・・・

大量の木材が百代達を襲う瞬間

全ての木材は突然振つてきた剣の群れによつて地面に縫い付けられ  
た・・・

フ  
ツ

突如訪れる浮遊感

目を開けると[写つたのは・・・木？

「なんですかー！？」

叫んでる間にも木は近づいてくる・・・近づいてるのは、落ちている俺自身だが

士郎は体に強化を施し衝撃に耐える

バキ バキ バキ バキ ドスン！

「いてて」

落下の衝撃で凛に塞いで貰つたばかりの傷口が開いてしまった  
とりあえず、傷意外に体に異常がないか確かめる

「トレース 同調、オン 開始」

身体年齢、11歳、身長体重それに伴い低下

身体能力、年齢相応の身体能力

魔術回路、27本正常稼動

魔力量、変化なし

固有結界、アンリミテッド・フレイド・ワークス “無限の剣製”発動自体は可能

しかし、11歳の年齢では肉体に負荷がかかり過ぎる

アヴァロン  
全て遠き理想郷、正常に稼動中

凛とのライン、切斷

ちなみにアヴィアロンは聖杯戦争後、凛が俺の体を調べた時に発見  
現在は俺の魔力でも若干ながら起動させる事ができる

肉体年齢11歳？」

信じられないほど手足を動かし確認する  
服がだぼだぼ・・・縮んでる

叫んだ世いで傷口に痛みが走り我に返る

いや、また、落ち着け衛宮士郎

一  
・  
・  
・  
「

落ち着いた所で考えてみる

何故体が縮んだ? どつかの組織に薬でも飲ませられたか?  
いや、それはない。気づいた時は木の上だつたのだから  
だとすると考えられるのは・・・平行世界への移動による反動か?  
でも、たしか凜の手伝いで、何度か遠坂の大師父であるゼルレッチ  
の爺さんに会つたけど  
いつも爺さんだつたよな?

色々と疑問に思つ事はあるのだが

卷之三

その反面、何故があつさりと納得している自分がいる  
ああ、また凜の「うつかり」か、と

「さて、とりあえず人を探してここがどこなのか確認しなきゃいけ  
ないんだけど」

ビュオオオオオオオ

今まで木の陰にいたからあまり気にならかっただが  
もの凄い風である  
これでは人が出歩いているかも怪しい

「どうするかな・・・ん？」

「・・・！」

風の中で聞き取りにくいが人の声がする  
これは子供の声か？こんな風の中危ないな

ガサ ガサ

そう思つて注意しようと空き地へた瞬間

ブチッ！

ビュオツ！

近くの工事現場の木材を縛つてあつた紐が千切れ、木材が大量に子

供達めがけて飛んでいく

- 三九一 -

俺はすぐに駆け出し魔術回路に魔力を通す

## 「投影、 開始！」

又力力力力力力力力力力力力力力！！！！

全ての木材は30もの斧群によって地面に縦し付けられた

ー  
な、  
なん  
た！  
？

一  
か  
ち  
ょ  
え  
!!  
剣  
か  
い  
は  
い  
降  
て  
き  
た  
!!

お前達、こんな所でなにヤ一てるんだ!!」

劍に驚く子供達に怒鳴る

「今のお前がいたのが？」

スケーな、  
おい！」

先頭に立っていた女の子とバンダナをした男の子が興味津々といった感じで聞いてくる

まずいな、強化して走つたりしたから傷口が完璧に開いた

痛みで意識が薄れる

「?.お~どうし・・・これは..」

様子がおかしい士郎に百代が気つく

ドサッ

「これはまずいな・・・私はこいつを家へ連れて行く。ガクトはワ  
ン子とモロ口を送つてやれ!大和とキャップは2人で椎名を送つて  
やれ!大丈夫だな?」

「任せろ!行くぞモロ、ワソ子」

「フツ、俺の知力があれば問題ないよ姉さん」( ちょっとニヒル  
な感じ)

「俺と大和なら余裕だぜ!」

「よし、ではみんな氣をつけろよ!」

バツ

最後にそう言つと百代は士郎を抱いで風の中をもの凄い速度で走つ  
ていった

「・・・ん？」

目が覚めて目に写つたのは見知らぬ天井  
俺どうしたんだっけ？

「あ、起きたな！」

ふと見ると女の子が横に座っていた  
女の子を見て昨日の事を思い出す

「君は昨日の・・・」

「じじい一起きたぞー」

私が話す前に少女は誰かを呼びに言つてしまつた  
自分の姿を確認すると服が着替えさせられている

「大丈夫かの？」

しばらくしてやつてきたのは、白くて長い髪を生やした老人  
士郎は一目見て思う

(この人、かなり強いな)

「そう、身構えんでもよいぞ」

士郎の体に力が入ったのを悟つたのか  
笑顔で老人は言う

「若いのにやるの、お主。わしの強さを感じるとせば」

老人の様子を見て安心した土郎は体の力を抜いた

「まずは血口紹介といこうか。わしの名は川神鉄心。一い、川神院の長で川神学園の学長もやっておる」

「衛門土郎です」

「どうまで話したらいいものか迷った末、名前だけを告げる

「土郎君でいいかの？」

「構いません。それと、わざわざ手当をして頂きありがとうございました」

「気にする事はない。それで、その傷の事は聞かせてくれるのかの？」

「……はい」

助けてもらつて何も話さないわけにもいかない

ましてや、こんな子供が大怪我をしていて身よりもないとなれば  
大騒ぎにされかねない

土郎はあたり障りのないよう嘘を交えて説明した

自分は父と世界を回っていたのだが父が他界

その為に日本へ戻ってきたのだが、台風により飛ばされ  
その時世界を回っていた時につけた傷が開いてしまったと

「ふーむなるほどのひ」

鉄心さんは髪をこじりながら唸る

「嘘じやな

「は？」

「モモから聞いてあるが、お主が大量の剣を出して子供達を守った  
と」

モモ？ 口ぶりからしてさつきの女の子だらうか？  
しかし参つたな投影の事がばれていたのか

「・・・」

「氣を物質化するような、何か特殊な術であろう」

「・・・」

「ひまかそつかと考えていた士郎は驚いた

魔力という言葉こそ出なかつたが、老人の言つ事はほぼ正解である

「武術に長く関わつてあるとな、それこそ信じられんような技や術  
を使う者もある。わしもオーラで毘沙門天とか出せるしの」

どこかお茶田に重つ爺さん  
つていうか毘沙門天つて

「悪こよつにはせせど。行く当ても無い様じやし、君に力を貸してや  
れ。だからどうじや？ 全て話してみんか？」

「……わかりました」

凛との約束である自分の為に生きるこな、味方が必要だろつ  
幸いこの老人は信用できそうだ

士郎は意を決して全て話す事にした

魔術の事や本来の自分の姿の事、平行世界から来た事も話した

「ほつほつ、そつやす」このひ。じゃが、安心せい。絶対とは言え  
んが、長く生きてる間に魔術といつ言葉は絵本でくらうしか聞いた  
事はない」

それなりに、ひとまずは「心だらけ  
しづらしくして落ち着いたら、一応世界を回って確認してみるかな

「ふつふつふつ、わ～い～た～わ～」

「なつ…？」

「「」」」お世話を済しておつたな…！」

スーシと障子が開くと先程の女の子が立っていた  
にじりもなんだ、せんぜん気づかなかつたぞ

「お前面白うつなヤツだな、みんなに紹介してやる。つこつこ…」

「え？」

女の手は俺の腕を掴むと差し出す

「やあんと、夕方には帰つてくるんだが〜」

じこさんは慣れてるのか平凡な声で囁いた

「おーいみんなー」

連れて来られたのは昨日の宿き地

そこには昨日見た子供達が集まっていた

「あー元気になつたんだ。よかつたね〜

ギュウ

髪の毛を左サイドで短く結んだ女の子が抱きついてきた

なんといつか・・・癒されるような可愛さがあるな〜  
はつー俺は口コロソではないぞ〜〜

「おーワンドが懐つてゐる。懶こやつぢやなれつだな

「せうだね」

みんなそれで納得してしまつてこる

いいのか！？

「昨日の剣出すやつカッコイイな！俺に教えてくれーー！」

「いや、あれは・・・」

バンダナをした元気な少年がそう言つてくるが教える事ができるわけない  
どうしたものか？

「まずは、自己紹介だろキャップ？」

頭の良さそうな男の子が提案すると、みんな自己紹介してくれた

みんなのリーダーでキャップと呼ばれている風間翔一  
頭がよくていつもみんなに策を出す軍師 直江大和  
俺を運んでくれた、川神院の一人娘 川神百代 みんなからはモモ  
先輩と呼ばれているらしい

マスコットキャラクター的存在の岡本一子 あだ名はワン子らしい  
力自慢の自称ナイスガイ 島津ガクト

ゲームやパソコンに強い師岡卓也 あだ名はモロ

昨日は、今日咲くであろう竜舌蘭を守る為に台風の中集まつたらしい

「ん？もう一人いなかつたか？」

「あーあいつは・・・おーあんな所にいる。大和呼んで来い！」

草陰の向こうに隠れるように女の子がいた

「何で俺が？」

「椎名はお前を怖がつてゐる節がある。これはリーダー命令だ」

「わかつたよ」

渋々ながらも大和は椎名を呼びに行つた

方和が村名を連れて戻りてきかねがりて百作が

「みんな驚くなよ。こいつは・・・異世界の魔法使いなんだ！」

と、俺の秘密をばらしてしまつた

「な、なんだつて――――――.」

声をそろえて驚く6人

百代のおかげで彼らに俺の事が全てばれてしまつたが子供ゆえなのか、まるでヒーローでも見るかのような目で見られた

「そつだ、お前も真に写つてけよー。一緒に花守つたんだからさ」

「いいのか？」

「おー! 今日からお前も風間ファミリーだー!」

風間ファミリー・・・なんかマフィアみたいだ

その後サコできたガケトの母親がガメテを準備する

「お?今日は新顔が2人いるね。はい、チーズ!」

カシヤ！

これが、衛富士郎が風間ファミリーに入った瞬間である

## 風間ファミリー（後書き）

次回は一気に年が進み高校編になります。

それではまた次回！！

黒い肌に白い髪、よれよれのコートに大きなトランク  
そんな変わった風貌の男が立っていた

「ふう・・・やっぱりこの世界に魔術はない様だな」

男の名は衛富士郎。この世界に来た当初は肌の色は普通で、赤い髪  
だった

しかし、時が経つにつれて髪は白く染まり、肌も黒くなつていった  
理由は多分、時間だ経つにつれ元の自分に戻ってきた、平行世界へ  
の移動の副作用？が消えてきたからだろう

身長も、今年の歳は17歳くらいだが、自分が高校生だった頃に比べ  
高くなつている

士郎が今いるのは倫敦

元の世界で時計塔があつた場所だ

倫敦を諸点に、様々な国を巡つたが魔術の痕跡は見られなかつた  
その代わりに目に付いたのは、俺の世界ではありえないほど強い武  
闘家達

多分この世界は武術が発展している世界なのだろう

アフガン辺りを旅していた時には、素手でも無茶苦茶強いのに  
手から光線を出す軍人のオッサンや二刀小太刀と忍術を駆使して戦  
う女性軍人

ドイツを旅した時にはトンファーを手に1小隊を殲滅した女性軍人  
もいた

日本国内を回つた時だって、額に傷のある女の子や執事服を着た眼  
もいた

## 帯の女性

風紀委員の腕章をつけた女学生等、見た目からは想像もできないような強者が大勢いた

そういうえば前に川神院にいたオジサンが今は日本の総理大臣だった気がする

風間ファミリーに入り、竜舌蘭の前で写真を撮つたあの日から約6年もかかつてしまつたが

よつやく日本で暮らす事ができるだらう

その顔をじいさん（士郎は川神鉄心の事をそう呼ぶ）に伝えると

川神学院への編入手続きをしてくれることだ

じいさんは学費などは持つてくれると言つたが

さすがにそこまで世話になるわけにはいかないので

旅費を稼ぐ為にやつた仕事の貯金を使う事にした

士郎は万能で裏表含め様々な仕事をした為、結構お金を持っているのだ（どれくらいかといつと、家一軒買つてもしづらくな生活できるくらい）

「日本か・・・最期に帰つたのはキャップ達が中学を卒業した時だから一年ぶりくらいか？」

ファミリーのみんなに会えることを楽しみに日本へ向かうのであった

ざわ ざわ

問題児揃いの2・Fクラスは朝から騒がしい

「よつモロ。昨日のアニメ見た? 今期の滋賀アートは当たりだよな」

「おはよつスグル。見た見た、僕的にはあのベースの子が・・・」

趣味の話をする者

「もぐもぐ。あ~美味しい

「クマちゃん。何食べてるの?」

「駅前のパン屋さんの限定蒸しパン。はい、ワンちゃんにも一個あげるね」

「わーい。ありがとー」

食べ物を食べるもの

「昨日街で見かけたねーちゃんの胸が、かなりエロくってみ~。思わずトイレに駆け込んでしまったぜ」

「マジかよーヨンパチ、てめえ何故俺様を呼ばない!」

女の話をする者

「でさー。2・Sの冬馬クンがー・・・」

「ちよマジー？チカリンやばくな？それ

「よかつたですねー千花ちゃん」

男の話をする者

「ンンン・・・よっしゃー・・伝説の剣ゲッ・・トヽ・・・・・・・・・

「・・・・・

寝ている者

ペラ

「大和この本面白いよ。今度貸そつか？愛してん」

ペラ

「じゃあ読み終わったら貸してくれ。お友達で

本を読む者

大和達のクラス2-FではHRが始まるまでは思って思いの事をして過ごす

「みんなー鬼小島が来たぞー」

「やっぱ、急いで席に着け！」

「寝てるやつ起こせー！」

## バタバタ

しかし、担任の先生が来るとその態度は一変  
皆急いで席に戻る

ガラツ

「委員長号令を」

「起立、礼」

「諸君、おはよっ」

「「おはようござります」」

教室に入ってきたキリッとした女性が我が2-Fクラスの担任

小島 梅先生

担当教科は歴史で『道部の顧問

生徒指導に厳しい先生で、彼女の前で問題を起こすと

「教育的指導」という名の愛の鞭（本物の鞭）が飛んでくる  
28歳独身、恋人無し

「いきなりだが、今日はこのクラスに新しい仲間が増える」

「「ええー?」」

いきなりの事にクラスはざわめく

確かに転校生が来るとは聞いていたが

それは今週の金曜日のはずだ

「女ですか？美人ですか？胸ありますか？」

「男ですか？イケメンですか？お金持ですか？」

女好きのガクトと、イケメン好きの小笠原さんがすぐに食いつく  
ていうか、あんたら昨日も転校生の話聞いた時それ言つただろ

「静まれ！！」

「ピシッ！！

梅先生がムチを振るうと教室が静かになる

「質問がある者は、挙手して行つよつこ」

「はい。梅先生」

聞きたい事があつたので俺は手を上げる

「直江大和、発言を許可する」

「転校生は金曜日ではないのですか？」

「ああ、転校生がくるのは金曜日だ」

「へ？では今日は？」

梅先生の答えに思わず変な声を出してしまつ

「今日来るのは転校生ではなく編入生だ」

編入とは、その学校に在籍していなかつた人が途中から入学して、そのまま学ぶことである

「編入・・・ですか？」

「そうだ。しかもこのクラスの何人かは会った事があるだろう。おい、入ってきていいぞ」

ガラツ

梅先生がそう言うと、教室のドアが開いて人が入ってきた  
その人物とは・・・

「制服なんて着るの久しぶりだからちょっと恥ずかしいな」

士郎は今1人学園内を職員室に向かって歩いている

「おお！士郎ではないか！」

もう登校時間は過ぎてるので生徒はいないと思つていたのだが  
どうやら遅刻したやつがいたらしい  
それにこの暑苦しい声は・・・

「英雄か、久しぶりだな。でも遅刻はよくないぞ」

「フツ、私は多忙ゆえ仕方ないのだ」

彼の名は九鬼英雄

某国でテロが起きた時、たまたまそこに居合わせた俺が救助した  
それが縁で、たまに会うとこうして声をかけてくれる  
最初の頃は、なんか雰囲気がギルガメッシュに似てて好きになくな  
かつたんだが

話しているうちに、いいやつだと言う事がわかり友達になった  
わかりやすく言えば、民のことを考え、他人を認められるようなギ  
ルガメッシュ

「お久しぶりです 士郎くん」

英雄の横にいるメイドは忍足あずみ

九鬼家もメイド長で英雄の専属メイドである  
彼女とは英雄と出会う前にも会つた事がある  
一度目はアフガンの戦地

二度目はテロの現場で英雄の救助を手伝つてくれた  
英雄の前では猫を被つてゐるが、実際はもっと凶悪である

「今日は何用で川神学園に来たのだ？」

「ああ、世界を回るという目的が果たせたからな。今日からここに  
通う事になつたんだ」

「おおー。そうであったか。して、クラスは？」

「2・F らじこねび」

「何？」

俺の発言で英雄の頭の上に?が浮かぶ

「お前なら2・Sに入る事もできるだろ?。何故2・Fになぞ」

「俺はあまり競争とかしないでのんびり学園生活を過ごしたいからな。知り合いもいるし2・Fが丁度いい」

「ふむ。まあ、それも一つの道か・・・ではさりげー。私は授業を受けに行く!」

英雄は足早に教室へ向かう

急いでいても廊下は走らないのだから流石だ

「久しぶりじゃないか、衛宮士郎」

英雄がいなくなつた事により本性を現したメイド

「はあ、ほんと英雄のいる時とはぜんぜん違つよな。あずみ」

「あたりまえさ、アタイは英雄様のメイド。主人の前では純情で完璧なメイドであり続けるのぞ」

純情?いや、なんかバカっぽいけど?

とせ思ひても口にせぬ所がない

「あづみー！何をしている、早く来いーーー！」

そこに英雄のお呼びがかかる

「おつと英雄様がお呼びだ、じやあな士郎」

「ああ、また」

—  
•  
•  
•  
•

ホントあの2人が来るとまるで嵐が来たみたいだ

余計な時間を費したか何とか職員室へ着く

- 7 -

失礼します

「ん？君は今日編入予定の」

「はい、衛宮士郎です」

俺が職員室に入ると1人の先生がこちらに向かってやつてきた

「そうか。私が君が入るクラス2-Fの担任の小島梅だよろしくな」

「はい。よろしくお願ひします」

このキリッとした女性教諭が俺の担任らしい

「よつ、士郎。久しぶりだな」

「お～士郎。よく来たネー」

他にも顔見知りの2人が声をかけてくれた

「お久しぶりです宇佐美さん、ルー師範代」

この2人は宇佐美巨人さんとルー・イーさん

宇佐美さんは、宇佐美行センターという代行業をしていて  
俺が日本に帰ってきた時にいつも仕事を紹介してくれていた  
2-Sの担任で人間学を教えているらしい

ルー師範代は、モモ先輩の両親を倒し

川神院の師範代となつた人で、かなり強い  
学園では担当クラスを持つていなく、体育の教師らしい

「今日からここ通うんだろ？仕事が欲しくなつたら言いな。お前器  
用だから、いい仕事紹介するぜ」

「ありがとうございます」

「宇佐美先生、そろそろホームルームですので」

宇佐美さん・・・宇佐美先生と話したが

梅先生が止めに入る

「あ、小島先生。そうですよね、ははは、時間は守らなくちゃ」

「わかつてもうえれば結構です。で、いくぞ衛門」

「はい」

梅先生に連れられ廊下を歩く

しばらくすると2-Fの前に着いた

「しばらへしたら呼ぶから待つていろ」

「はい」

梅先生は教室に入り、1人廊下に残される

(みんな、驚くだろうな)

士郎は川神学園に通う事を誰にも言っていない  
じいさんにもみんなに洩らさないように言つてある  
みんなの驚いた顔が楽しみだ

待つ事数分

「入つてきていいぞ」

梅先生の声がかかり教室に入る

ガラッ

「はじめまして。今日からこのクラスに入る衛宮士郎です。みんな  
よろしく！」

「わお、カツコイイー」

「ヤベツー超イケメンソジやね？」

「チックショーゲンかよー」

騒ぐクラスをよそに、ファミリーのメンバーは既驚きの表情で固まる

「久しぶりだな。  
みんな」

卷之三

俺の声で正気に戻ったみんなは大声で叫ぶ

わし士郎た

ギュット

クラスの目も気にせずワン子が抱きついてくる  
相変わらずだなワン子は

「するいぞうワン子つ！俺も抱きつく！！」

ギュツ

するとキャップまで抱きついてきた  
つて、なんであつ……！

「いつ帰ってきたの？」

「今日の朝帰つてきて、そのまま学園に来た。これからは島津寮に  
住む」

ワン子とキャップを引っ付けたまま  
目の前の席にいたモロに答える  
すると、大和が近づいてきて小声で話しかけてきた

「もう世界は回らなくていいのか？」

「目的は果たしたからな」

「じゃあ、魔術は……」

「ああ、魔術はこの世界には存在していなかつた」

そう言つと大和は「まつ」と息を吐き

「よかつたな。それと、おかえり」

と言つた

「ああ、ただいま」

「いひ、お前達。今はまだHR中だぞ、個人的な話は後にしろ……！」

「「はーこ」

騒ぎすぎて梅先生に怒られてしまつた  
ワン子とキャップも渋々俺から離れる

「まずは各自、自己紹介だ。時間がないから手短にな

とこうわけで、クラスみんなの自己紹介が始まった

まずは、おなじみ風間ファミリーをはじめ（まあ、こいつらの事は  
知っているんだが）

小笠原千花

川神院に通じる仲見世通りに軒を構える和菓子屋の娘で  
いかにも女子高生と言う感じの子で、美人で男子達に人気がある（  
見た目的な意味で）

一部の男子にスイーツと呼ばれている

甘粕 真与

背が小さいが同じ高校2年生

2・Fの委員長で、小笠原さんと仲がいい

羽黒 黒子

小笠原さんとは違った意味で女子高生らしいガングロの女の子？  
父親がプロレスラーらしくプロレス技が使えるらしい

福本 育郎

写真屋の息子で、いつもカメラを持ち歩いているエロカメラマン  
四十八手をすべて言えたことから、ガクトに『ヨンバチ』という渾  
名をつけられ

本人も気に入っているらしく、みんな（男子限定）からそう呼ばれている

熊飼 満

体が大きく、いつも何かを食べている  
グルメで自分で料理をする事もあるらしい  
そのほのぼのとした性格と見た目からクラスでも愛され、「クマちゃん」の愛称で呼ばれている

大串 スグル

一言で言えばオタク  
ネットやゲームに詳しく、モロと仲がいい

源 忠勝

彼は宇佐美先生の息子（養子）なので  
宇佐美先生のところで働いた時に何度か会った事がある  
趣味が悉く被るので、最初はお互いケンカすることが多かつたが  
今では良き友人である

渾名は「ゲンさん」（源だから）

その他生徒

他にも生徒はいたがあまり印象に残らなかつた

その他生徒「おい――――!」「

「よし、自己紹介は終わつたな。衛宮の席は・・・川神、直江お前達の間に入れてやれ。後ろの者は一つずつずれるように」

知り合いが近い方が馴染みやすいだろうという梅先生の好意で

ワン子の後ろ、大和の前の席になつた

「悪いな、忠勝」

「気にはすんな」

列の最後尾の忠勝に声をかけると  
そつけない返事が帰つてきた

「む、そろそろ一限目が始まつてしまつた。皆、衛宮に質問などが  
あるだろ？が、授業は真面目に受けようよ。以上」

そう言つと梅先生は教室を出て入れ替わりに他の先生が入つてきた  
授業が終わり休み時間になる度、士郎は質問攻めに会つ  
こつして士郎の学園生活がスタートするのであった・・・

## 川神学園（後書き）

士郎はいろんな人と会っていますね。

ちなみに、島津寮は原作では男子部屋は満室の為、この話では一部屋多い4部屋になっています。

それではまた次回！！

## 歓迎パーティー

キーンゴーンカーンゴーン

チャイムの音が今日の授業終了を告げる

「つかれたー」

俺は授業終了と同時に机に突っ伏した  
疲れたといつても授業が大変だったわけじゃない  
これでも高校は一度卒業してるから、どちらかといえば楽な方だ（  
まあ、日本史の内容がほぼ平安時代のみというのは納得いかなかつたが）

では、何故疲れているのかといふと  
休み時間になるたびに、質問攻めにあつていたからだ  
おかげで昼ごはんも落ち着いて食べられなかつた

「大変だったな、士郎」

「お疲れ様」

声をかけてきたのは大和と京だった

「そう思つとななら助けてくれよ、軍師」

「まあいいじゃないか。それよりも帰つたが、島津寮なんだろ？」

「ああ、じいさんの紹介でな」

言いながら立ち上がり、学校を出る

大和達と多馬の河原沿いを島津寮へ向けて歩く

「そういえば、他のみんなは？」

他のメンバーが見あたらないので聞いてみると  
たしか、大和と京が声をかけてきた時にはもついたよな？

「みんなでお前の歓迎パーティーやるつって話になつてさ、一旦家に帰つてから寮に集合する事になつたんだ。ちなみに、キャップは材料調達。ワン子には姉さんを呼ぶように言つてある」

「なんか悪いな」

「気にしない気にしない。仲間が帰つてきたんだからとーぜん」

大和の代わりに京が答えてくれた  
にしても、京も随分と元気になつたな  
メンバーに入つた頃は・・・なんというか、じめじめした感じだったのに

「うおおおおおおおおおおー！材料集めてきたぜえー！」

そこへ、両手いつぱいに袋を抱えたキャップが走つてきた  
・・・よくその量の荷物で走れるな

「凄い量だな、どうしたんだそんなんにいつぱい」

「いや、なんか士郎が帰つてきたって言つたら、商店街の人たちが持つてけつて」

「え？ なんでだ？」

商店街の人たちとは仲が悪いわけではないが  
日本に帰ってきた時、たまに会うぐらいだ  
そんな歓迎される理由が思い浮かばないんだが

「そりやなあ？」

「ねえ？」

「？」

大和と京は2人で納得したような顔をしている

それもそのはず

士郎が日本へ帰ってきて商店街に買い物に行くと  
たいてい、お年寄りの荷物を持ってあげたり、迷子の親を捜してあげたり  
時にはレジなどの機器を修理までしていたのだ  
そのおかげで、本人は気づいていないが商店街の人からとてもよく  
思われている

「まあ、何でもいいじゃん。早く帰つて準備しようぜ?」

「まあ、いいか」

キヤップに促され、再び歩き始める

「そういえば。ワン子もお前が来るの知らなかつたつてことは、

姉さんも知らないのか？」

大和の言つ姉さんはモモ先輩（百代）の事だ  
大和はモモ先輩の舍弟のため、彼女を姉と呼び  
モモ先輩は大和を弟と呼ぶ事が多い

「あー、たぶん知らないと思うわ。じいさんにはみんなを驚かせた  
いから黙つておくよう頼んだし」

「氣をつけるよ？姉さんお前と戦いたがってだから」

「ああ、そんなこと言つてたね」

「なんですかー！？」

いや、確かにこの世界にはない魔術チカラを使えるから  
戦つてみたいと言わたることはあるけど

「ほら、前にお前、姉さんのこと倒しちゃつただろ？だからリベン  
ジしたいんだと」

「いや、それかなり昔の事だし、魔力で身体能力強化してたからな  
あ・・・」

昔、小学生の頃一度だけモモ先輩と戦った事がある  
モモ先輩が卒業式だったのと、何か欲しいものはないか？と聞いたら  
「勝負しろ！」と言われたのだ  
モモ先輩が強いのは知っていたが、まあ子供だし大丈夫だろうと軽  
く見たのが間違いだつた

結果的に、魔力で体を強化してモモ先輩を押さえ込み俺の勝利とな

つたが

魔術を使わなければ勝てなかつただろう  
あれからモモ先輩はかなり強くなつたみたいで、外国にいた時もた  
まに噂を聞いた

正直、今は勝てる気がしない

「まあ、姉さんも本氣じやないとは思つが……いや、本氣つぽ  
そつだから真剣<sup>マジ</sup>で氣をつける」

「あの人なら確かに。わかつた氣をつけ……！」

ドンッ！！

その瞬間感じたもの凄い鬪氣

俺は大和達を突き飛ばし、体に強化をかける

ヒュッ

「トレイス投影<sup>オン</sup>、開始！」

ガイイン

現れた人影から放たれる高速の拳  
素手では止めきれないと判断し、干将・莫耶で受け止めるが

ザアアアアアア

受け止めきれずに、数メートル後ろまで押されてしまう

「まったく、いきなり攻撃とは随分な挨拶だな……」

俺は土煙で姿の見えない相手に声をかける  
姿は見えずとも、こんなことする人物は一人しかいない

「・・・モモ先輩」

「はつはつはー、よく私の拳を止めたな。さすが士郎」

やつぱりモモ先輩かよ

「まつてーお姉さまー」

後方からはワソ子もやってきている・・・タイヤを引きながら  
こんな時ぐらいたイヤはずせよ

「いててて、京、キャップ大丈夫か?」

「大和、胸が苦しい。さすって~」

「ふいー食材は無事だぜ」

大和は砂を払いながら起き上がり  
京はいつも通り変態だ

キャップも自分より食材を気にしてる  
・・・大丈夫そうだな

「いきなり何すんだよ、モモ先輩」

「ん?スキンシップだよ。久々に帰ってきた仲間へのな」

そんなスキンシップは「遠慮願いたい  
つーか死にます

「それより、一勝負どうだ？ なあ士郎」

まだそんなこと言いやがりますか、こんちきしじょうめ  
日本に帰ってきたばかりなのに勝負を挑むのはやめてほしい  
いや、帰ってきたばかりじゃなくてもやだけど

「俺は風間ファミリーの仲間と戦う気はないよ。まあ、何か特別な  
事情があるなら別だけど」

「えー。やだやだ戦う。美少女がお願いしてるんだから聞けよー」

まるで駄々をこねる子供のよう  
じたばたと足を動かしながら騒ぐ先輩

「美少女はそんなことしません。あーもう、大和、何とかしてくれ」

俺では手がつけられないので、我らが軍師に任せる

「ほら姉さん、そんな事してる場合じゃないだろ？ 今日は歓迎パー  
ティーやるんだから早く寮に行こいづ。しかも今日の料理は士郎が  
作ってくれるそうだ」

「何つー？」

大和の言葉を聞いたモモ先輩は  
駄々をこねるのをやめ跳ね起きる

「それを早く言えよ弟。さっさと行くぞ！」

モモ先輩はスタッフと先に行ってしまった

「悪い、お前の歓迎パーティーなのに料理させる事になっちゃった」

「構わないわ。もともと料理は好きだし、それでモモ先輩の機嫌が直るならな」

俺達は再び歩き出す

モモ先輩が先に行ってしまったので、ワン子も一緒に

「士郎の料理楽しみ〜。士郎の料理は美味しいし、栄養のバランスもばっちりだから大好きよ」

「ありがとな、ワン子」

なでなで

「おお〜・・・んん〜」

頭をなでてやると、目を細めながら擦り寄ってきた  
本当に犬みたいだ

アヒーフヒーフしているうちに島津寮へ到着する

「「ただいまー」」

「お帰り士郎ちゃん、久しぶりだねえ。荷物は部屋に運んであるか  
うら

迎えてくれたのは、島津寮の寮母さんとガクトの母親の麗子さん

「ありがとうございます、麗子さん。相変わらずお美しいですね」

もちろん社交辞令だ

だが、そんな事は口が裂けても言わない

「うんうん、土郎ちゃんはいい子だね。みんなもう来てるから早く  
行っておやつ」

麗子さんに促され台所へ向かうと

パン

「「お帰り士郎……」」

クラッカーと共に、歓迎された  
中にいたガクト、モロ、モモ先輩だけでなく  
いつの間にか後ろにいた大和達までクラッカーを持つている  
だが一番驚いたのは、その中に忠勝がいたことだ

「ま、たまには祝つてやるわ。だがカン違いすんじゃねえぞ? 後で  
文句言わてもウゼーから祝つてやるだけだからな」

全く素直じゃない

大和曰く「ああ、ゲンさんはツンデレだから」らしい

「ありがとうみんな。お礼といつてはなんだが、俺も腕によりをか  
けて料理を作りう」

「 「 わーーーーーーーー

俺はキャップから食材を預かると、Hプロンをしてキッチンに立つ

「俺も手伝つ

そういうながら、Hプロンをして俺の横に並ぶ忠勝

「おー悪いな

「ま、料理は嫌いじゃねえし、主賓に全部任せるとこもいかねえ  
からな」

やつぱり忠勝はいいやつだな  
わて、何を作ろつか？

「あ、士郎。じーちゃんがこれ持つてけって

ワン子が渡してきたのは、いかにも高級そうな肉  
ふむ。キャップが商店街で貰つてきた魚や野菜も大量にあるらしいだしこ

「鍋にするか

「じゃ、野菜を水で洗つて切つて・・・あと軽くなんか作るか

「やうだな

僅かな会話で意思疎通を済ませ、テキパキと料理を勧めていく  
士郎が洗つた野菜を忠勝が切り、その間に士郎は鍋を2つ準備

そこへすかさず忠勝が野菜を入れ、野菜が茹でられた頃に一つの鍋に士郎が肉を入れ

もう一つの鍋に忠勝が魚を入れる

お互い相手の考えている事が分かるかの如く、流れるような速さで料理ができる

料理に関して士郎と忠勝のペアに勝てるものは、そつはいないだろ

「よし」

「できあがりだ」

「お～～うま～～！いただきま ドゴッ！　あいたあつ！？」

鍋をテーブルに置いた瞬間、はしを伸ばしたガクトをモモ先輩が殴る

「おじガクト、今日の主役は士郎なんだからちょっと待て。ほらキヤップ音頭をとれ」

「お～、まかせろーみんなコップを持って

ジユースの入ったコップを持つて立ち上がるキャップ

「えー、みんなー！今日はめでたく我らが風間ファミリーの仲間が帰ってきた！それを祝しまして・・・あ～なんだ・・・もう何でもいいや、お帰り士郎！乾杯！～！」

「「乾杯！～」

みんなでコップをカチンと鳴らしあう

音頭は、なんともキャップらしい適當な感じだつたが

だからこゝで、仲間達の所へ帰ってきたという感じがする

その後、モモ先輩が川神水をだし、それを飲んだワン子が寝てしまつたり

酔つてゐるのか、わざとなのかは知らないが、京が大和に変態じみた行為をするなど大変だった

「むにゃ～・・・～～」

「あーあー、気持ち良さそうに寝ねやつて」

モモ先輩に背負われ眠るワン子を見て言ひ  
本当に幸せそうである

「夜も遅いし、俺がワン子抱いで川神院まで送りうつか?」

「いやいこゝで、お前まだ部屋片付けてないんだろ?」

そういうえ、学園から帰つてそのまま宴会みたいになつちやつたから  
まだ荷物開けてもないや

「じゃ、また明日な」

「じゃあな～」

「じゃあね、また明日」

「おひ、また明日」

キヤップは寝てしまい、大和は酔つた?京の相手をしているので  
俺がモモ先輩達を玄関まで見送つた

台所へ戻ると、忠勝一人で後片づけをしていた

「悪いなお前1人に任せちまつて」

急いで片付けを手伝つ

「気にはすんな。」そのままじや明日の朝、俺が困るからやつただけだ」

「そうか」

「ああ、そうだ」

それ以上は何も言わない

前に、それでも礼を言い続けたら逆にケンカになつたことがある  
だから、それ以来俺は多くは言わないことにしている

「おい、土郎。もうここはいいから自分の部屋片付けに行け」

「いや、でもまだ残つてるし」

「テメーが夜中にうるさくしたら、俺が寝られねえんだよ」

む、確かに夜うるさくした方が迷惑か

「じゃあ、任せる」

「おつかれ」

悪いとは思いつつ、部屋へ戻り荷物を解き始める  
といつても、ふとんと服以外たいした荷物はない

あるいは元の世界で着ていた赤い外套と、黒いボディアーマー  
それから、こちらの世界に来てから集めた刀剣が数本だ  
片付け始める事30分、全て片付け終わってしまった

ピリリリッ

「ん？」

その時、携帯が鳴る

俺に電話してくるなんて誰だろう？

携帯のディスプレイに名前を確認する

あの女性が電話してくるなんて珍しいな

「はい」

「夜分遅くにすまない。私だ」

電話に出たのは中年男性の声

あれ？ これあの女性からだよな？

ディスプレイを確認すると、やはりあの女性の番号で間違いない

「あのー、これってマル・・・」

「ああ、すまない。彼女の電話を借りて掛けたんだ。私は君の番号  
を知らなかつたものでね」

「・・・」

俺の事を知つていて、マルギットの携帯を借りられる地位の人物？

・・・ま、まさか！？

「えへと、もしかしなくても中将殿……ですよね？」

「ああそつか、名乗るのが遅れたな。私はフランク・フリードリヒだ」

ええええええええ！？なんですか！？

なんでドイツ軍の中将が俺に電話掛けてくるのか！？  
と、とりあえず落ち着いて相手の用件を聞かないと

「あ、あの、今日は何のよつない用件で？」

「そんなにかしこまらなくとも構わんよ。今回は私の娘の件でね」

「娘さん……ですか？」

何か軍の方で問題があつたのかと思つたが、どうやら違つて  
そういうえば、中将殿には俺と同い年の娘さんがいるつて言つてたな  
会つた事はないが写真を見せてもらつた事がある  
たしか名前は、クリスティアーネ・フリードリヒだったか？

「近日、娘を連れて日本に行く事になつてね。一年ほど滞在する予  
定なので、その間娘を川神学園に入学させる事になつてる」

「はあ」

「へー川神学園に来るのか  
でも、だからどうしたというのだ」「へー

「やうしたら君も川神学園に入学したと、学園長から連絡がきてね。

娘の事を頼みたいと思つて電話したのだよ

「話はわかりましたけど、具体的に俺はどうすれば？」

「うむ、簡単に言えば娘の友達になつてやつてくれないか、といふ事だ。なれない日本で娘も色々と大変だう。だから、助けてやつてほしい」

なるほど、娘が心配だから知り合いの俺に頼もうとにしても、わざわざ俺に電話するなんて大げさ過ぎだనの人

「わかりました。できる限り娘さんの力になれるよ」頑張ります

「ああーやつてくれるか。やはり君は頼りになる。では任せたよ」

ピッ

ツーツーツー

ふう、入学して早々大変そうだな」つや

コンコンッ

その時部屋がノックされる

「俺だけど入つていいかー？」

「ああ、どうぞ」

訪ねてきたのは大和だった

「こんな夜遅くに何の用だろ？」「

「どうした？」

「ちょっと、儲け話をね」

大和の話によると、金曜日に来る転校生が男か女かで賭けようと考  
えていたらしい  
で、同じ時期に編入してきた俺が、じいさんや他の先生方から何か  
聞いていないか聞きにきたそうだ

「じいさん達教職員からは、何も聞いていないな」

「その言い方だと他の誰かからは聞いたのか？（一ヤコ）」

大和は不敵な笑みを見せる  
さすが軍師、俺の言葉には引っかかるないか

「（）名答。転校してくる子の親から聞いた。転校生は女だ」

「ふむふむ、女か。つて何で転校生の親からお前に電話が来るんだ  
よ？」「

もつともな疑問だ

だが、中将の事をそう簡単に話すわけにもいくまい

「まあ、ちょっと転校生の親御さんの部下と知り合いでな

マルギッテと俺は知り合いだし

マルギッテは中将殿の部下だから、嘘はついてないぞ

「ふ～ん。まあいいや、サンキュー土郎。売り上げはお前に回すよ」

「おう」

昔の土郎なら賭け事なんてしなかつただらひ。いや、むしろ止めていたかもしれない

だが、風間ファミリーのみんなでいろんな事をしているつたり人を貶めたり、不幸にしたりするような事じゃなければ大抵の事は、一緒に楽しもうと考えるようになつたのだ

「ふあ～あ、そろそろ寝るか」

時計を見るといつも回っていたので寝ることにした  
明日も楽しみだ

時は少し巻き戻り、風間ファミリー + 忠勝が土郎の歓迎パーティーをしている時

「わー・・・なんか楽しそうな声がしますよ松風」

「そだなー、盛り上がつてんなー」

松風といつ名の黒い駿馬の携帯ストラップに話しかける少女 黒由  
紀江

2人？は寂しく部屋で語り合つて？（腹話術なので実際は独り言である）いた

「あんれー、何でまゆつちは、せつかくの風間BOYの誘い断つち  
まつたわけ？」

「だだだだだって、いきなりのお誘いで混乱してましたし、大切  
なお友達の歓迎会に私なんかが参加していいものかと思つてしま  
まして」

そう、本当はキャップが一度誘いに来たのだ（その時、士郎は料理  
を作つていた）

だが、突然の事にテンパつた由紀江は断つてしまつた

「そんながら、まゆつちは友達<sup>ダチ</sup>ができるないんだぜ～」

「はうつー？」

自分で言つて自分で傷つき、涙を流す由紀江

「ま、オラが一緒にいてやつからよー、今日も2人で反省会じよつ  
ぜ」

「うう・・・はい。明日こそは・・・明日こそは友達を！…」

こうして2人？の夜は更けていく

頑張れまゆっち！君の未来は輝いている！・・・・・はず

## 歓迎パーティー（後書き）

まゆっち、後数話で風間ファミリーに入れるからそれまで頑張れー！！  
つてなわけで、次回はクリスが登場すると思います。

それではまた次回！！

## 剣聖の娘は恥ずかしがりや

パンパンパンパン！

カチッ

「朝か」

時刻は4時、田覚ましを止め布団から出る  
布団を畳んでからジャージに着替え  
まだ、誰も起きていない島津寮の廊下を静かに通り  
士郎はワンニングへ向かつ

「はつ、はつ、はつ」

「お~い、士郎~！」

「一。」

多馬川の川沿いを走つていると俺を呼ぶ声  
振り向くと、タイヤをつけたワン子が走つてきた

「おはよー、ワン子」

「おはよー。」

タイヤを引いて走つてゐるといつこの  
今日も、ワン子は元気いっぱいだ

「早いな、ワン子」

「アタシ、新聞配達のバイトやつてるからね。でも、そいつ三十九郎も早くない？」

「まあ、朝この時間に鍛錬するのは日課だからな。あんまり気にしたことないな」

「お~同志よ、同志がいたわ~」

田をキラキラと輝かせ、見つめられた

「むづ配達は終わったのか?」

「うん!だから、今日までのまま七浜まで行つて来ようかと思つて。あー士郎も行く?」

いや、遠いだろ

期待に満ちた田で見るワン子には申し訳ないが

そんな事をしては、学校に行くのがギリギリになってしまう

「いや、遠慮するよ。ていうか遠いだろ、学校遅刻したらどうするんだ」

「大丈夫よ。前にアタシ隣の県まで走ったけど、学校間に合つたし」

普通ありえないから、それ

「他の鍛錬もあるし、俺はいいよ。ワン子も程々にしつけよ

「うん！じゃーねー！」

ワン子は手を振りながら、ダツダツダツと物凄い勢いで走つていった

俺は島津寮へ戻ると、軽く筋トレをした後、短めの木刀2本を持って庭に出る

腕はだらりと下げ、目の前に架空の敵をイメージする

俺は敵の刃を右の木刀でいなし、そのまま回転するように左の木刀を的の脇腹に叩き込む

それを剣で防いだ敵からの反撃の一撃を、一步半下がる事により紙一重でかわし

無防備になつた頭へ、右の木刀を叩き込む

「わー、綺麗ですねー松風」

「まるで、ダンスを踊つてるみたいだなー、まゆっちー」

頭への一撃を、体を強引に捻つて避けた敵は・・・ん？今なんか聞こえた様な？

「？」

「はうあー？」

声がした方に顔を向け、俺と視線が合つと  
馬のストラップを持った女の子が、ビクッ と体を硬直させた

ここにいるって事は、この寮に住んでるんだよな？

それにして、何者だこの子。気配が全く感じられないぞ

「えーと、おはようっ。昨日からここ住む事になつた、衛宮士郎です」

「は、はいーま、ま、ま、まま薫由紀江と申しますー。あの、すいませんー。こつそり覗くよつな事をしてしまつてーで、ですかですね！鍛錬の邪魔をしては悪いなーとか思つたり。後、舞を舞つてるかの様で綺麗だなーとか思つたり・・・つて、私は何を言つてるのでしょー?ー?」

あー、早口すぎていまいちよくわからんが  
俺の邪魔をしないようにじよつとした、いい娘だつて事だけは、なんとなくわかつたぞ  
たぶん、その為にわざわざ気配を消してきたんだろう。今はひちゃん  
と氣配を感じるし

「そんなに慌てなくとも。それと、同じ寮に住んでる“家族”みた  
いなもんなんだから、そんなに氣を使わなくてもいいぞ」

「・・・“家族”」

「おひへ、家族だ」

落ち着かせる為に、薫さんの頭に手を乗せて笑顔で言つ

「はうひー?ーし、失礼しますー!ー」

すると、薫さんは、もうダッシュで居間へと行つてしまつた  
・・・俺、何か変な事したかな?

シャワーを浴びて汗を流し、居間へ行くと  
みんな、もう起きていた（キャップを除く）

「おまめいりやこます、麗子さん」

「はー。おはよー、士郎ちゃん。もうい飯できるから座つてな」

麗子さんに挨拶を済ませ、席に着く  
この寮は、平日は麗子さんがご飯を作ってくれて  
休日は、外皿炊をする仕組みだ

「みんな、おはよー」

「おまめいり、士郎」

「おはよー」

「おはよー」

「お、おまめいりやこますー。」

「おは

みんなにも挨拶

ちなみに、順番は大和、京、忠勝、黛さんであ  
つていうか、黛さんはいつも挨拶したよな？

「ふあー既に起いぜ。もつと優しく起いくつくれよな、クッキー

そこく、既やうなキャップと  
キャップを引かずの口ボがやつてへる

「何言つてゐるんだよ、僕はマイスターの事を思つてやつてゐるんだぞ！そんなこと言つなら・・・」

### ガチャン キュイーン プシュー

機械音と共に、卵型から人が多へと変形するロボ

「この私が全力で矯正してやる。そこへ直れえつ！」

彼の名はクッキー

七浜に住む天才が作り上げた、自立型ロボット対抗して九鬼財閥が作り上げた人工頭脳を備えたロボ英雄が一子にプレゼントしたものらしいが一子が「いらない」と大和に誕生日プレゼントとして送りつけ以後はクッキーのことが気に入ったキャップをマイスターとし、主にキャップの部屋にいる

用途に合わせて3段階に変形することが出来るらしいが俺は、卵型の第1形態と、人型の第2形態しか見たことがない

「落ち着けよクッキー。もう、『飯もできるしわ』

「む？士郎か、おはよう。昨日の歓迎会は出席できなくてすまなかつた。充電中でなければ、私も参加したんだが・・・」

「氣にするなよ。その気持ちだけで十分だつて」

「すまない。・・・代わりといつてはなんだが、私の力が必要な時はいつもでも言つてくれ。全力で力になろう」

「ああ、サンキュー」

その後、飯を食べ、寮を出る

最初は寮のメンバー + ガクトだつたが、途中でモロが合流  
川神院の2人以外全員集合である

「にしても、何か変な感じだよなー」

「・・・ண�ண・・・ணண」

川沿いを歩いていると、ガクトが呟いた  
キヤップは寝ながら歩いてる

「何がだよ、ガクト」

「まう、今まで土郎はたまにしかいなかつたのに、同じ制服着て、  
一緒に登校してるだろ?」

「あー、それは僕もわかる気がする。何か新鮮だよね、土郎の制服  
姿って」

ガクトに同意するモロ

そうだな。確かに、今までみんなと会つ時は、動きやすい服ばかり  
だつたからな

わー わー

そんな話をしていると、河川敷辺が騒がしい声が聞こえてきた

「あれ、モモ先輩じゃないか?」

「あ、ほんとだ」

眼の良い俺と京は、騒ぎの中心の人物であるモモ先輩とそれに群がる不良達、少しばなれた所で見物している学生達を視認する

「あー、またか。姉さんに挑むなんて、不良達も馬鹿だな」

見る見るうちに不良達は空へ舞う

俺達がモモ先輩の所に着く頃には、不良の山が完成していた

「おー、お前ら、揃つてる、なつ」

ドン

俺たちに気づくと、モモ先輩は不良の山を蹴り飛ばしこちらへ向かつて手を振つてきた

「ははは、朝から制服姿の士郎を見るとは、何か変な感じだな」

モモ先輩は、からかうような笑みで言つてくる

それ、ガクトにも言われだし。まあ口には出さないけど

「姉さん、それガクトも言つてた

「ガクトと同レベル

つて、何で言うかな？頭脳派2人

「な・ん・だ・と?この土郎!」

大和と京につつこまれ、こちらに向かつて走つてくるモモ先輩  
何で俺つ！？

「ちょっ！？何で俺の方来るんだよ！？」

魔術で足を強化しダッシュ

「全部お前が、制服着てるのが悪いんだ！」

強化して走る俺の足に、ついて来るモモ先輩  
追いつかれるたら、何をされるかわからない  
イメージするモノは、常に最速の自分だ！

「ゼーハー、ゼーハー」

今俺は、昨日の放課後とは違う理由で机に突っ伏している  
昨日は質問攻めによる精神的な疲れだったが  
今日は、全速力で登校という肉体的な疲れである

「大丈夫？えみやん？」

「大丈夫ですか？衛宮ちゃん？」

心配して声をかけてくれたのは、小笠原さんと委員長だ  
ちなみに、「えみやん」とは昨日小笠原さんにつけられた渾名で  
ちゃん付けなのは、委員長曰く「私は、みんなのお姉さんですから」  
らしい（見た目は、どちらかといえば妹なんだが）

「おはよう」

「あ、ナオっち。おはよー」

そこへ、遅れて大和達がやつてきた

「俺、姉さんから逃げ切った人、はじめてみたよ」

「同じく」

「私もよ」

「俺様も」

「僕も」

「ここの俺でも、逃げ切れなかつたもんなー」

大和、京、途中で合流したと思われるワン子、ガクト、モロ、キヤ  
ツブが

俺の周りを囲むように集まってきた

そりやそりや、俺はただ一度の敗走もなく、だからな

今のは戦略的撤退であつて敗走ではない

まあ、ただの一度の勝利もなし、なんだけどな

「くつ、大和と京が余計な事言わなければ・・・」  
「うなるのわかってただろ?」

「いや、だつてあのままだと、俺が姉さんにからまれてたし」

「私は、大和の為」

「このやう。自分の保身の為に俺を使ったな  
京は・・・いつもの事か

「恨むぞ大和、京も」

「悪かつたよ。一つ借りにしとく」

「ククッ、ではお詫びに、私のお弁当をあげよ」

京は、七味やらタバスコやら唐辛子やら  
辛いものを大量に使つた弁当を差し出してきた

「わかつた、それで手を打つよ。京の方は結構です。そんな、赤一  
色のお弁当いりません」

その後、梅先生が来たので教室は静かになり、授業が始まる  
なんら変哲もない、数学、現国、世界史の授業  
平安時代に偏つた日本史の授業終え、昼休みになる  
すると、キャップが袋を抱えて、教室の前へと移動した

「みんな聞いてくれ。明日、転校生が来るのは知ってるな?それで、

「どうせなら転校生が男か女か賭けないか？賭け札作ってきたんだ」

お弁当を食べようとしていた生徒や、友達と喋っていた生徒  
食堂へ行こうとした生徒まで立ち止まり、キャップに注目する  
といふか、賭け札作ってたせいで、朝から寝てたのかキャップは

「うひーひー、賭け事はいけません！お金のありがたみというものを  
・・・」

2・Fの良心である委員長が止めに入るが・・・

「どうしてな委員長？」

「わわわあーー？」

ガクトに担がれて連れて行かれてしまった  
キャップの周りに、みんなが集まる

「お、いいねえ。風間が胴元になるつてか

「おうよー手数料なんざどうねえ。男か女1つに賭けるつてことだ

手数料なしなり、結構食いつくだろうな

「値段と配当はどうなつてるんだよー？」

「札は一枚千円。配当は二倍。公平だろ？」

確かに、それならば勝率は確実に一分の一  
軽い気持ちで賭ける人も増えるだろ？

「アタシ、男子に3枚」

「アタイは男子に5枚」

このクラスの殆どが、キャップがたくさんバイトをしてる事を知っている  
なので、大勝ちしても必ず支払われるだろうと、安心して買っていく

「ちなみに、上限は1万までだぞー」

女子達の間では、転校生は男という噂が流れているらしい  
スグルも、一回100円で転校生の予想をして  
クラスの男女比から見て、転校生は男だといつて  
そして、事情を知っている大和は動かない  
ま、編入生の俺は別として  
キヤツプと仲のいい軍師大和が動いたとなれば、みんなが警戒する  
かもしけないからな  
・・・にしても、転校生が男だという噂が不自然に流れすぎている  
気がするな

(大和、何か仕込んだだろ?)

気になつたので、大和に聞いてみると

(自然に転校生は男だと広まるように、手を回しておいた)

流石は軍師大和  
完璧な計画である

「姫さんを、止める事ができませんでした。お姉さんは悲しいです

みんなを止められた事に責任を感じ、委員長が落ち込んでしまっている

「まー、バクチくらいはね。大田に見てやつて」

「でも、直江ちゃんと衛門ちゃんは参加しなかったですね。えらいえらいです」

褒められてしまった

ちょっと、罪悪感

「ガクトは、何で女に賭けたの？」

「やつちのが夢があるだろ？むしろ女でいて欲しい」

なんという本能

まさか、欲望で当たりくじを引くとは

キーン ローン カーン ローン

「じゃ、締め切りは放課後までだからな」

昼休みが終わり、5時間目の授業（内容は大して覚えてない）と川神学園特有の宇佐美さんが担当する「人間学」の授業を終え、放課後となる

まあ、その時に、金を渡してまで宇佐美さんから転校生の情報を買<sup>ヨンバチ</sup>う生徒<sup>ヨンバチ</sup>がいた事には驚いた

さすが、2-F

帰り道、俺と大和、キャップ、京は家路についていた

「やっぱ、男に賭けたやつ多いな」

「大和の流言作戦がバツチリはまつたな。本当は昨日士郎から聞いて、転校生は女だつて事が確定してっからな」

キャップは愉快そうに囁つ

「そんな情報握つてんなら、儲けるチャンスさ」

「何をやつたの？」

京が不思議そうに聞いてくる  
内容がわからなくとも、大和達が何か仕組んでるのを察知して  
自分は負けに参加しないのだから、抜け目ないよな

「朝のうちに、転校生は男つて噂を流したのさ。それに、クラスの男女比率からいっても、男に賭けるやつが多いだろうしね」

「ハズれるやつが多けれや、胴元が儲かる」

「流石軍師つて感じだな」

「まあ、それも士郎からの情報のおかげだけだ。それに、俺自身は怪しまれないよう賭けには参加していない」

知略面で言えば、大和は凛より上かもな。あいつは「うつかり」があるし

軍師直江VS諸葛凜 ウィナー軍師直江って感じかな  
やはり、日本の知将と中国の知将は日本の勝ちで幕を閉じるのであ  
つた

なんてな。まあ、凜は中国人じゃないし

実際の直江兼続と諸葛亮が競い合つたらどうなるかわからんけど

「京。こんな男だぜ、大和は。それでもいいのか？」

キヤップは大和を指差して言つが・・・

「セコ」かっこいい（ほつ）」

こんな感じである

セコかつこいってなんだよ？

恋は恋<sup>恋</sup>つて言つけど、本当なんだな

「土郎、恋じやなくて私のは愛だよ」

「ああ、悪い・・・つて、人の心を読むなよー？」

「ククツ、愛を知る乙女は何でもできるのだ」

その後、儲けを見越して、4人で仲見世通りになんか食べに行くことになった

仲見世通りに着くと、モモ先輩が女の子達とデートをしていたんだが  
俺達を見つけると、女の子と別れしゃらしゃらしてきた

「よー。なんだぞ？ かでお茶か？ 私も入れるー」

「つーか、姉さんお金ないんじゃないの？」

「そこはー大和が奢つてくれるんだろう？ ほーら、腕を組んでやる、  
恋人気分だろー舍弟」

大和にぴつたりとくつつくモモ先輩

「あ、ちょっと嬉しそう。私もくつつく」

ジエラシーを感じた京も、負けじとくつつく  
大和は両手に花どころか、両手に大輪だ  
つらやましくなんてないぞ、畜生！

「ほーら弟ー」

「大和ー」

・・・すいません。正直つらやましいです

「あ、なんだかずるいぞ？ 良く分からぬけど俺もーー」

いや、それはおかしいだろキャップ

大和にくつつくとするキャップを・・・

「割り込み禁止だ。そーらつ（片手投げ）」

モモ先輩が放り投げ、キャップは遠くへ飛ばされた

「うわああああああ！――！」

俺は落下地点に先回りして、キャップをキャッチ・・・ギャグじゃないぞ？

「つたく無茶するぜ、モモ先輩は。いいもーんだ。俺は土郎に抱きつかう」

「やめへべれつ」

抱きついてあるキヤップを、強引に引き剥がす

「…・二つも・・・・士郎が帰つてくると・・・抱あひこめてゐるよな？」

すると、モモ先輩と京がBOYSでLOVEな話をしてるじゃないか

•  
•  
•  
•  
•  
•  
•  
•

そんなこんなで、今日も騒がしい放課後なのであつた

その夜、島津寮

食事も風呂も終わり、部屋でべつひこでこると  
誰かが部屋をノックしてきた

「？、どひ？」

「あ、あのつ……！」

部屋を訪ねてきたのは、2階の黒さんだった  
にしても鋭い目つき、気合入ってるなー

「どひした？」

「これ、実家から送られてきた、つまらない物なんですね」

ズズイと風呂敷が差し出された

「あーつまらないものなんていつては失礼ですよね…そうじやなく  
て…あの…そのつ！」

「落ちつけまゆつちーまゆつちなりけるークマだつて倒せるー物  
理的に1000円イケル！」

馬のストラップが喋つて…いや、腹話術だよな?  
確か今朝もやってたけど、趣味なのかな?

「とりあえず落ち着け。推測するに、黒さんはその風呂敷を差し入  
れしに来てくれたってことでOK?」

「あ、は、はい！そりです！」

「すげーや、えみやん。ナイスフォローだよ。オラもまゆっちも感謝だよ」

また馬が喋った、というか「えみやん」ってまあ、差し入れはありがたいし、いい子なんだらうなちょつと変わってるけど・・・ん？

その時、黛さんの持っていた刀袋が眼に入り咄嗟に解析をしてしまった

（・・・銘はない。けど、使い込まれてるいい刀だな。それから・・・）

脳裏に浮かんだのは、神速とも呼べる斬撃の光景あれ程の剣の腕で姓が黛・・・  
旅をしている時に聞いたことがある  
日本最強の剣士、剣聖と呼ばれてる人の名前がたしか黛だったな

「黛さんって、もしかして黛十一段の娘さん？」

「くつ？父をご存知なんですか？」

いきなりの事に、びっくりする黛さん  
やつぱりそうか

「いや、噂を聞いたことがあるだけで会った事は

「わうなんですか・・・」

遠い眼をして、なんだかさびしそうな表情をしている  
なんか不味かつたかな？

話題を変えなきや・・・

「あー・・・そうだ！今朝俺が鍛錬してたの見てたよな？もし良かつたら相手して欲しいんだけど」

「ふええ！？わ、私がですかっ！？」

「ああ、頼むよ。やっぱり、1人だと限界があるからな。相手してくれると嬉しい」

相手がいた方が、実践的な練習になるだらう  
それに、黛さんは刀見た感じ、俺より剣技が上だしな

「あ、あうあう」

黛さんは混乱してしまつているようだ

「嫌なら別に無理しなくていいけど・・・」

「いえ！嫌だなんてそんなつー是非にー」

「うおっ！ものす！」に田つきだな

まあ、何はともあれ相手をしてくれるのは感謝だ

「じゃあ、明日の6時くらいに庭でいいかな？」

「は、はいっ！それでは、おやすみなさいー」

「ああ、おやすみ」

「ひつて、島津寮2日目。夜は更けていく  
明日は黛さんとの鍛錬に、中将殿の娘が転校してくる

「楽しみだな」

その頃、島津寮2階の1室

由紀江と松風は、静かに盛り上がっていた

「やりましたよ松風！差し入れだけでなく、明日の鍛錬の約束まで  
してしまいました！」

「スゲーよまゆっち。待ち合わせなんてもう友達通り越して、『一  
トじやねえかよ…』

「ひめやくしない様、あくまで小声で盛り上がる

「で、デートなんて恐れ多い！でも、これで少し自信がもてました  
！ありがとうございます、衛宮先輩！」

祈るようなポーズで涙を流す由紀江  
そんな由紀江を、温かな眼で松風は見守る（まあ、実際は松風は置  
いてあるだけだが）

「よっしゃー！この調子で次は、風間B.O.Yたちのグループに突撃  
だー」

「えいっ、えいっ、おーーー」「

剣聖の娘は恥ずかしがりや（後書き）

あれ？今回クリスが出てくる予定だったのになー・・・まあいいか。  
おめでとうまゆっち！原作ではもう少し先のはずが、士郎のおかげ  
で1人目の友達ゲット！  
次回こそは、クリスが出ます！本当です！

それではまた次回！！

## まゆりじと鍛錬（前書き）

更新が遅れています。『正義の味方』の方でも  
書きましたが、最近忙しいもので。  
落ち着くまで、しばらくはこのくらいのペースになると感じます。

「じゃあ、また後でね～士郎～」

「おひへ、遅刻するなよワン子」

田課のジヨギング中に会ったワン子に別れを告げ、島津寮へと戻る。部屋で軽く筋トレをした後、短めの木刀2本と普通の木刀を一本持つて庭へ出ると、既に彼女が待っていた。

「おはよう。黛さん」

「お、おはようございます、衛宮先輩！」

俺に気づくと、慌てて頭を下げる黛さん。  
そんなにかしこまる事ないんだけどな。

・・・それでも、「衛宮先輩」か。

そう呼ばれるのは、どれくらいぶりだろう。

「先輩」という懐かしい響きにて、士郎は自分を慕ってくれていた後輩である桜の事を思い出した。

「ど、どうしたんでしょうか？ 松風、私何か粗相を・・・」

「大丈夫だって、まゆつち。まゆつちはなんも悪くねえ。自信を持てよー」

つと、口を開かしんでこむつひし、元気ひし、黒さんがまた馬のストラップと話し始めてしまっている。

いかんいかん。せっかく鍛錬に付き合つてくれてゐるのに、ほつたらかしにしてしまった。

「いめんじめん。武器なんだけど、木刀でいいかな?一応昨日見た黒さんの刀と同じくらいの長さの物にしたんだけど」

「あ、はい大丈夫です……つて!わ、わざわざすこません!本来ならば、後輩である私が準備しなければならぬものを!…?」

黒さんは、俺から受け取った木刀を掲げ、ペコペコと頭を下げる。  
・・・いや、木刀を拝み上げられても困るんだが。

「いや、黒さん。そんな気にしないで」「いりああああー」「うおう  
.!?」「

その時、馬のストラップが体当たりをしてきた。  
いや、正確には黒さんに投げ飛ばされてきた。

「おうおう、えみやんよー?さつきから聞いてりや、黒さん黒さん  
て。ちよつと他人行儀なんじゃねーかなーとかオラ思つたりするよ?  
?まゆつちには、まゆつちつープリティーな渾名があんだからー。  
もつとフレンドリーにならうぜ?」

また腹話術か。一体なんなんだろ?。

「・・・あの。黒さん「まゆつちだつてんだるーー!」、まゆつち

「コレでは話が進まないので、とつあえずまゆつて浮ぶ事にする。

「は、はい。なんでしょう？」

「ひひひひひと、上田遣いで」ひひを見るまゆひが。ひよつと可愛い。今の彼女と馬のストラップが同一人物だとは思えない。

「えーと。昨日も氣になつたんだけど、コレ何かな？」

馬のストラップを持ちながら言つ。

「それは、父上からいただいた馬のストラップ、松風です」

「へー松風っていうのか。

松風といえば、日本の武将「前田慶次」の愛馬だったな。  
・・・じゃなくて。

「こつも腹話術してるよな？ 趣味なのか？」

「いえ。松風には付喪神が憑いているんです」

付喪神？

付喪神といえば、長い年月を経て古くなつたりした道具や生き物、自然の物に、神や靈魂などが宿つたモノの総称だったよな？  
でも、世界を回つたけど。そういう靈的なモノも見つからなかつたはずなんだが・・・

「松風、何か喋つてみてくれ」

「おつーオラ何でも喋るよー。出つ歯の向まばつて喋るよー

スツ

松風が喋りだすと同時に、まゆつちの口を手で押される。

「…？」

すると松風は、

「~~~~~！」

何か喋るとして入るみたいだが、呻き声しか聞こえない。やつぱり松風は付喪神ではなく、まゆつちの腹話術のようだ。まゆつちの口から手をどける。

「やつぱり腹話術だよな？」

「いえ。付喪神です」

「「・・・」

何が何でも付喪神で通すらしい。

まあ、時間もあまりないし。深くは考えないよ」といつぶつぶ。

「まあいいや。じゃあ、始めよつか」

「はい。衛宮先輩」

む、衛宮先輩か。そう呼ばれるのは別に嫌じゃないが、俺がまゆつちと呼んでいるのに少し堅くないだろつか？

「その前に、まゆつち俺の」と衛宮先輩つて呼ぶの禁止な

「ふええつー? な、何故でじょひー? やはり何か粗相をー?」

見るからに流してだすまゆつか。

・・・別に、ちよつと面白いなんて思つてないだ。

「いや、まゆつちが悪いとかじやなくてさ。俺がまゆつちつて呼んでるのに、衛宮先輩つてのはまゆつと堅いかな?と思つてや。もひとつ普通に士郎とかでいいだ

「えつ? でもそんな・・・いいんじょつか?」

「前にも言つたろ? 俺たちは同じ寮に住む“家族”みたいなもんだつて。だからまゆつと肩の力を抜いていい

俺がそつぱつと、まゆつちばらへ考へ込んで、

「で、ではー士郎さん・・・と、お呼びしてもいいじょつかつ!」

「!

もの凄い気合を入れて言つまゆつか。

士郎さんか。まあ、年上の俺を呼び捨てにはできなかつたんだろう。それに、まゆつちの敬語は先輩だからつていうより、家柄的に普段から使つてゐるものなんだと思つ。

「おつーよし、それじゃあ始めよつか

俺はだらつと腕を下げ、思考を切り替える。

「はいー。」

対するまゆっちは、剣を正面に構える。  
途端、まゆっちは雰囲気がガラリと変わった。  
まるで針のように鋭く洗礼された鬪氣。  
その清らかな空気は、セイバーを思い出させる。

「こきます。・・・はあつーー！」

「ーーー」

一速で放たれたのは、ほぼ同時の2本の斬撃。  
俺は2本の木刀でそれを受け流し、右の木刀で切り返す。  
まゆっちは、体を半歩下げる事により俺の木刀をかわしつつ、近づいた俺にカウンター気味の突きを放ってくる。

「くつーー」

前のめりになつている体を強引に戻して足に力をいれ、後ろに飛びながら左の木刀で突きを受け止め、一度まゆっちと距離をとる。

「今のを止められるとは・・・驚きました」

今の決められると思つたまゆっちは、素直に感嘆を洩らす。  
士郎も驚いていた。強いとは思つたがまさかこれほどとは。  
昨日まゆっちの刀から経験を見ていなければ、今の一撃でやられていたかもしれない。

(鍛錬だと思つて少し油断してたな。俺もまだまだ未熟だ)

「俺も本氣でいかなきゃな

士郎の雰囲気が変わる。

思考を戦闘時のモノに切り替える。

そして、先程のまゆつちの一撃で、眠っていた元の世界での戦闘の感覚が徐々に蘇ってきた。

「では、こちらもスピードを上げさせていただきます。はつ！」

士郎の変化を感じ取ったのか、新たにまゆつちから放たれた斬撃は最初よりも早く、多い3本。

斬撃はそれぞれ、首と左右の脇腹を狙つ。

先程と同様、俺は首と右脇腹を狙う2本の斬撃を木刀で受け止めるが、一本足りない。

俺はあえてそのまま前へ進み、まゆつちが握る木刀の柄に部分が脇腹に当たる。

柄の部分では上手く決まらず、ダメージを最小限に抑える事ができた。

「ふつ！」

近づいた状態から、まゆつちの後ろに回り込み無防備な背中を狙つたのだが・・・

「何つ！？」

まゆつちが消えた。

いや、消えたのではない。

正確には、体を低くしながら一瞬にして移動したのだ。

視界の端に、僅かだが彼女の髪が見える。

「はあっ！」

先程とは逆に、無防備になつた士郎の背中を、まゆつちの一撃が襲う。

ガキンッ

「なっ！？」

今度はまゆつちが驚いた。

あろう事か士郎は、後ろ手に木刀を交差させまゆつちの一撃を防いだのだ。

そのまま、体を捻るような動きで士郎に木刀を弾かれ、一時2人とも静止する。

「・・・」

「・・・」

士郎は相変わらず腕をだらりと下げている。

このままでは埒が明かないので、まゆつちは先程よりもさらに速く木刀を振るつ。

ガキン ガキン ガキン

おかしい。

士郎に攻撃を仕掛けているまゆつちは、違和感を抱いていた。まゆつちは斬撃を防がれることに、斬撃の速度を上げている。

しかも、全て士郎の隙を突くように攻撃しているのだ。  
にもかかわらず、士郎はその悉くを防いでいる。  
まるで、そこに来るのが判つてゐるかのよつこ・・・

( まわか! ? )

攻撃を止め、まゆつちが距離をとる。

「 士郎さん。貴方・・・わざと隙を作つておますね? 」

「 ーーー、・・・驚いたな。気づかれないよつこ、自然にできた隙に  
見せかけてたんだけど 」

やつぱり。士郎さんは血ら隙を作り出すことによつて、相手の攻撃  
を誘導していたんだ。  
まゆつちば、驚く以上に恐怖を感じた。

本来ならば、なるべく出れないよつこする隙をあえて出す戦い方。  
確かに有効ではあるが、一步間違えれば大怪我、最悪死ぬ可能性だ  
つてある行為だ。

そんなことを平然と、しかも完璧に防ぎきる士郎が、まゆつちは信  
じられなかつた。

「 朝つぱらから向やつてんだ? テメヒ らは 」

その時、第三者の声によつて戦いがやられられた。

「 忠勝、びつしたんだ? まだ飯の時間じゃないだろ? 」

縁側に置いておいた時計を見ると、まだ6時45分。

朝<sup>一</sup>はんはいつも7時20分くらいからだから、起きてこる<sup>二</sup>と血

体はおかしくないが、

鍛錬を途中で止めるより事はしなこせざだ。

「ああ。悪いことは思つたんだけじゃよ、わざからテメの部屋で携帯が鳴つてたから、持つてきてやつたぜ。おひよつ」

そう言つて携帯を放り投げる忠勝。

受け取つた携帯のディスプレイにはマルギッテの文字。うわ～、何かもの凄く嫌な予感。

「じゃ、俺はもう行くぜ。テメHら汗かいてんだから、飯の前に風呂でシャワーでも浴びてこい」

「悪いな、携帯わざわざ持つてきてもうひつて

「勘違こするんじやねえ。お前の部屋で携帯が鳴つてると、隣の俺がつるせくて迷惑だから持つてきてやつただけだ」

忠勝は、居間へ向かひ。

どうでもこいけど、言葉の最初に「勘違こするんじやねえ」って着けるのは忠勝の癖なのか？

わよみわよみ

びひつたらこいかわからず、キヨロキヨロしてこむまゆつた。

「ああ、「めんな。とつあえず今日ほのへりこど、続あはまた明日こじて」

「は、はー。あつがとづいたれこましたーでは、私はお風呂い・・・

そつぱつて、まゆっちは女湯へ向かう。

俺も風呂に入つて、はやくこの汗を流したいが・・・

ペリコリ

ほら、かかつてきた。

着信 マルギッテ

かかつてきてしまつたものはしょうがない。

せめて、でるのがマルギッテ本人であることを祈るわ。

「もしもし?」

「マルギッテです。久しぶりですね、エリザベス」

よかつた、今日は中将殿じゃないようだ。

「久しぶりだな、マルギッテ。で、どうしたんだ?」

「今日は頼みがあつて電話しました。学園の方には中将殿が連絡を入れておくれうなので、今から指示する場所に来なさい」

軍人だからなのか、マルギッテは相変わらず命令口調だな。

「なんですか?」

「それを今から説明します。静に聞きなさい」

マルギッテの話を聞くと、現在滞在中のホテルから中将殿の娘であるクリスティアーネを学園まで連れてきて欲しいとの事だ。

中将殿は先に学園の方に行くらしく、マルギッテも軍の任務がある為、信用できる俺に頼みたいらしい。

「なんで娘さんは中将殿と一緒にに行かないんだ?」

「お嬢様は、ご自分の愛用しているモノに乗つて登校したいと言っています」

愛用しているモノ?

バイクにでも乗つてくるのだろうか?

「あ~まあ、了解。とりあえずホテルに行けばいいんだな?」

「ええ。貴方が来るまでは私もホテルで待機しています」

「わかった。準備したら向かう」

やれやれ。思つた通り、大変なことになりそうだ。

その後、士郎は風呂で汗を流し、麗子さんと大和に事情を説明してホテルへ向かう。

朝食は仕方なく、ホテルに向かう途中のコンビニでおにぎりを買って食べた。

ちくしょ~、みそ汁が食べたいぞ。

ホテルに着くと、外でマルギッテが待つていた。

「待たせたな」

「いえ。無理を言ったのはこちらの方です、感謝します。疲れただ  
らつゝ。これで糖分を取りなさい」

出されたのはチョッパチャップス。

マルギットは、以外に可愛いといがあるな。

「で、娘さんは？」

餌を舐めながら聞く。

「クリスお嬢様なら、今、愛馬を連れてくる最中です。少し待ちな  
さい」

「へー愛馬か

・・・ん?

愛馬? 愛車じゃなくて? 馬?

「はあっ

ヒヒヒーン

まじめ事なき馬の泣き声。

「来たよ! です」

「へ?」

マルギットの指差す方向を見ると、金髪の女の子が白馬に乗つてや  
つてくる。

白馬といえば金髪の王子様だろ？  
つて、ツシ「ハリビ」が違うか。

「なあ、マルギッテ。何故彼女は馬に？」

「クリスお嬢様は、日本文化に大変感心を持つておられる。日本は  
今でも交通手段に馬を使っているのだろう？」

いつの時代だよそれ。

あー・・・つまりあれか？よくいふ、日本を勘違いしちゃってる外  
人さんか？

「我が名はクリスティアーネ・フリードリヒ。問うべ、お前がエミ  
ヤシロウか？」

馬の上から高々といつ金髪の少女。

それはとても絵になる光景で、とても美しかった。

そう、それはセイバーとの出会いを思わせるような・・・って、  
んなわけねーだろ！

セイバーと出会いはむつといふ、神秘的な感じだった。

もし違う形で出会つていれば、多少神秘的な感じはしたかもしだ  
い。

だが、高級ホテルがすぐ横に建つていて、ホテルの敷地から出れば  
を普通に車が走っている。

そんな中、馬に乗った金髪が現れれば、雰囲気などぶち壊しだ。む  
しろギャグに見える。

まあ、多少の違和感はあれど、それでも絵になつていいのだから、

それは彼女が綺麗だからなのだろう。

「はじめまして。俺が衛宮士郎だよ」

こうして、衛宮士郎はクリスティアーネ・フリードリヒと出会った。

## まゆひかと鍛錬（後書き）

まゆひかとの鍛錬が思つたより長くなり、今回はクリスが登場した所で終わってしまいました。しかも、クリスより先にマルさん出でるし。

次回も多少戦闘があると思います。

それではまた次回！！

## リューベックからの転入生（前書き）

最近、正義の味方とやさしい少女の方ばかりで、こちらの方が更新できていませんでした。てなわけで、2ヶ月ぶりの投稿です！  
楽しんでいただけると幸いです。  
それではどうぞ。

## リューベックからの転入生

「我が名はクリスティアーネ・フリードリヒ。問うて、お前がエミヤシロウか？」

「はじめまして。俺が衛宮士郎だよ」

馬に乗る金髪の少女に、俺は答える。

「貴方の事は、父様とマルさんから聞いている。正義の心を持つたサムライだと」

・・・中将殿もマルギッテも、俺の事をどんな風に紹介したんだ？確かに、何度か力を貸した事はあつたけど。

サムライって・・・

「それにしても、エミヤ殿は和服ではないんだな。日本人の友人に借りたDVDでは、皆和服を着ていたのだが」

和服？

そりや着てる人もいるだろうけど、大体は洋服だよな？この娘は俺以外の人を見ていないので？皆洋服だぞ。

「ちなみに、そのDVDって何？」

「ああ。大和丸夢日記だ」

少女は満面の笑顔で言つ。

つて、時代劇かよ！？

そりや、皆和服を着てるに決まっている。

「あ～今日本はな、和服より洋服の方が多いんだ。もちろん、和服の人もいるけどな」

2-Sの不死川とかな。

「むむむ、そうか。残念だな・・・」

あからさまにがっかりする少女。  
そこまでか？

「・・・（チカラ）」

時計を確認すると、もう8時だ。

そもそも行かないと、ホームルームに間に合わない。

「じゃあ。そもそも行こうか？」

「ああ、わかった。マルさん、行きます」

「はい。いってらっしゃいませ、クリスお嬢様」

手を振るマルギットを後に、土郎とクリスティアーネは走り出した。  
もちろん俺は自分の足、クリスティアーネは馬だが。

「エミヤ殿、少しいいだろうか？」

走り始めて数分、クリスティアーネが話しかけてきた。

「なんだ？ それと、士郎でいいぞ」

「了解した。では、自分のこともクリスと」

「ん、了解。で、何？」

正直、走りながら喋るのは体力の消耗が激しいが、無視するわけにもいかない。

「いや、時間の方は大丈夫なのだろうか？。よければ、シロウも浜千鳥に乗せてもいいが？」

浜千鳥・・・流れ的に、馬の名前なんだらつ。本当にクリスは日本が好きなんだな。

「ん~そうだな・・・(チラ)」

もう一度、時計確認。

8時15分・・・

「確かに、このペースじゃまずいかな？」

「では、早く後ろに・・・」

クリスは馬のスピードを緩めようとすると、

「いや、いいよ

俺はそれを止める。

そして、

「<sup>トレース</sup>  
強化、<sup>オン</sup>  
開始」

クリスに聞こえないよう小声で咳き、脚を魔力で強化する。その瞬間、俺の走る速度は上がり、クリスも慌ててついてくる。

「す、いいなー！シロウは、こんなに早く走れるとは、随分鍛錬したんだろ？？」

「・・・まあ、な」

キラキラと、関心の眼差しで見るクリスの視線が痛い。  
確かに、鍛錬は欠かさずやっているが、魔力で強化してるとは言えない。

そんな事を話しながらも、しばらくすると、川神学園の門が見えてきた。

「あれが川神学園・・・自分の通う事になる寺子屋だな」

「・・・ああ」

寺子屋・・・

まあ、間違いじゃないからいいか。

俺たちは、そのまま門をくぐった。

ざわ ざわ ざわ ざわ

その頃2・Fでは、現れたオジサン・・・もとて、フランク・フリードリヒがわめきが起つていた。

「勘違いしないよう」。元の方は、「転入生の保護者だ」

梅先生の一言で、安心する。

楽しみにしていた転入生が、こんなオジサンではたまつものではない。

「あー、そりなんだ、びっくりしたな。もぐもぐ」

「うひー。熊谷一郎中だぞー。ピザを食つなー。」

走る梅先生の鞭。

クマちゃんに制裁が下される。

「贋は百引き。これも、日本の伝統ですな」

梅先生の行為を見て、フランクはそんなことを口じた。

「あの、元息女は?」

「元女心を。時間には正確な娘です。間もなく駆けて参るでしょう」

フランクが指を指した先、窓に視線が集中する。

「グラウンドを見てみると？」

パカラツ　パカラツ　パカラツ

校庭から響く馬の蹄の音。

「…………げつ！？」

「どうした大和、何が見えるんだ？」

大和が変な声を上げたので、ガクト興味深げに聞く。

「女の子が乗り込んで来た。しかも、士郎と一緒に」

「なんじゃそりや！？」

驚いたガクトはすぐに窓際へと移動する。

梅先生も、窓の外を見る許可を出したので、たちまち窓際は生徒でいっぱいになる。

「うん、確かに乗り込んできたね……馬で」

モロも、呆れた感じで言っている。

「クリスティアーネ・フリードリヒ・ドイツ リューベックより推  
参！ 今日よりこの寺子屋で世話になる」

校庭の中心に着くなり、大声で名乗りを上げるクリス。

そんなクリスを、2・Fの窓は窓から眺めていた。

そこには、大和達もいる。

「こじが、今田から自分の学び舎か・・・自分の他に、馬登校はないのだろうか？」

クリスがキヨロキヨロト周りを眺めていると、ドタドタと何かが全力で走つてくるような音がする。

「まさか・・・」

これは非常にまずい。

やつとクリスが、自分が馬といつ事に違和感を持ち始めたというのに、

アイツらが来ては、また、いらぬ誤解をしてしまつ。

ビビビビビビビビビビビビビビ

「フハハハハハ！ 転入生が朝から馬で登校とは、やるな！」

「おはよハハハめこまつす 」

「おお！ それは・・・ジンリキシヤー！」

はじめて見る生人力車に、クリスは感動する。

「うむ。そして我はヒーロー、九鬼英雄である…」

「自分はクリス。馬上にて御免」

「我が名は九鬼英雄！いづれ世界を統べる者だ…この栄光の印、その目に焼き付けるがいい…！」

まるで戦隊モノのヒーローの様にポーズをとり、背中の龍の絵を見せる英雄。

「おおーーまるで、遠山」

そんな英雄の行動にも、クリスは喜んでしまつ。

あー・・・来ちゃったよ。

と、思つた瞬間首に冷たい感触。

「あらあら？土郎君、今私たちを見て「あー・・・来ちゃったよ」とか思いませんでした？」

いつの間にかあずみは、俺の首筋に小太刀の刃をあてていた。何でわかるんだよ？

「メイドの嗜みでっす 」

いや、だから人の心を読むなよ…？

「いりあーあずみ！我が親友に刃を向けるとは何事かあつ…」

「も、申し訳ありません英雄様！」

英雄の一喝で、あずみはその場に土下座する。たしかつた。

その後、英雄達が去つた後、クリスの浜千鳥を自転車置き場の方へ繋いでおき、教室へ向かつた。

カツ カツ カツ

黒板に、クリスの名前が書かれしていく。

ちなみに、俺は教室に着いたので、自分の席に戻つている。

「クリスティアーネだ、改めてよろしく！」

凛とした声と立ち振る舞いに、クラスの男達は見惚れていた。

「日本語にまつたく違和感がないな。たいしたものだ」

クリスの流麗な日本語に、梅先生は感心している。

「リューベックには、日本人の友達が大勢いました。彼女たちと接している間に覚えたのです」

間違つた日本文化も一緒にな。

「つむ、円滑なコミュニケーションが望めるな。よし、何か質問があれば挙手していけ」

「はいはい！」

即効でガクトが手を上げた。

「では島津。品位を持つてな」

「オッスオッス！えーと、くじすていあーね？」

わざとらしく、英語っぽい発音でクリスの名前を呼ぼうとするガクト。

なんかバカっぽいぞ？

「自分としては、クリスと呼ばれる事を希望する」

「じゃあ、クリス。彼氏はいたりすんのかな？」

「そんなものいないに決まっているだろうガツ……」

し～ん

・・・え？

ガクトの質問に、中将殿が物凄い剣幕で答えたせいで、みんなが軽く引いている。

さつきまで騒がしかつたクラスが、一瞬で静まり返つてしまつた。

「父様のおつしゃる通りだ」

「そ、そーすか」

予想外の出来事に、流石のガクトも涙目である。

にしても、中将殿がこれほどまでバカ親・・・もとい、親バカとは。

「クリスにちよっかいを出すものは、軍が殲滅する」

そんな事で、軍使うなよ！？

貴方は、仮にも中将でしょう！

「父様は、任務に私情を持ち込まない軍人だ」

いや。今めちゃくちゃ私情持ち込んでたからね？

「へへ」

日本に来れたのがよほど嬉しいのか、クリスは先ほどから上機嫌だ。  
鼻歌まで歌っている。

その後の質問でも、時代劇が好きな事や、京都に行つたこと、日本の武士道精神が好きだなど、早くもクラスに溶け込み始めていた。  
そして、一通り質問が終わると、中将殿は教室を出て行つた。  
と思つたら、戻ってきた。

「クリス。何かあれば、戦闘機でかけつけるからな」

そしてまた、教室を出る。  
忙しい人だな。

「もう質問はないか？それじゃあ・・・」

「はーい！質問。何か武道はやつてるのかしら？」

梅先生が質問を締め切ろうとした時、ワン子が手を上げた。

了承という事なのか、梅先生は何も言わない。

「フヨンシングを小ちこ頃よりずっと」

「YES!! 梅先生、提案！」

クリスがフヨンシングをやつてることを知ると、ワン子は握りこぶしを作り。まさかとは思うが・・・

「転入生を“歓迎”してあげたいと思いまーす」

はあ・・・やつぱりか。

本当にワン子は・・・なんとか、いい意味で決闘が好きだな。

「ふふっ、血氣盛んだな川神。だがそれは面白い。クリス、そこのポニーテールが、お前の腕前を見たいそつだ」

「――なるほど。新入の歓迎、か」

言葉の意図を察したクリスにも笑みが浮かぶ。

何故俺の周りには、いつも血の多い女の子が多いんだろう?

それから、ワン子が川神学園の“決闘”について説明する。

決闘の意思を伝え、自分のワッペンを置く。

相手がそのワッペンの上に、自分のワッペンを重ねると受理した事になる。

なお、決闘内容が肉体行使するものの場合、職員室での許可が必要となる。

「ほっほ。話は聞かせてもらつたせい。いいよ、ワシの特権で了承する。今すぐやんなさい」

いきなり現れた学園長が、許可を出した。  
つーか、タイミング良すぎだろ、じいさん。

決闘が決まったので、ワン子とクリスはそれぞれ、教室に飾つてある薙刀とレイピアのレプリカを手に外へ向かう。  
クラスのみんなも、決闘を見る為にグラウンドへと移動する。

「ねえ、士郎。転入生の実力、どう見る？」

移動している最中、学校では滅多に喋らない京が、めずらしく話しかけてきた。

「そりだな・・・実力はワン子よりも上だろ?」

「だよね。私でも素手だとキツイと思つ」

京はあらゆる状況に応じて（主に大和を護る為）弓術だけでなく、接近戦の鍛錬もしている。

その京が、キツイというのだから、クリスの腕はそつとなものだろう。

「ワン子大丈夫かな？」

「ん~最初から全力で行けば、勝ち目はあるけど・・・」

ワン子を見ると、妙に舞い上がっている。

あれでは、クリスに勝つのは難しいだろう。

「少し難しいな」

「うん」

話していたら、あつという間にグラウンドへ到着。

決闘の事が校内放送で流れた為、他のクラスや学年の生徒も集まっていた。

その中にはモモ先輩の姿もある。

「よーお前ら。ワン子と転入生が決闘だつて?」

「あ、姉さん。うちの転入生、上玉だよ」

「何!?」

大和の言葉で、モモ先輩はすぐさま輪の中心にいるクリスを見つめる。

「上玉キター——————っ、時に士郎。あの転入生、どれくらい強い?」

なんという身の変わりの早也。

つーか、何でみんな俺に聞くんだよ?

「いや、俺に聞かなくとも、モモ先輩ならどれくらいかわかるだろ?  
?」

「まあ、美少女の私なら大体はわかるが、洞察力ならお前の方が上だからな」

美少女は関係ないだろ？

にしても、モモ先輩の洞察力も俺と大差ないと思うんだけどな。

「そうだなー。風間ファミリーの中でも、結構上の方なんじやないか？京より若干上つて所だな」

「それくらいはわかる」

「じゃあ聞くなよ」

そつけなく言ひと、モモ先輩は グイッ と俺を引き寄せた。

「私は、お前とじりりが強いかが聞きたいんだが？」

モモ先輩は、うつすらと闘氣を込めていつてきた。  
・・・危ういな。

これは戦闘狂の人間が放つ気に似ている。  
そうなる前に何とかしないとな・・・

「さあ？それは実際にやつてみないとな」

「・・・はあ、まあいいか」

俺がとぼけると、モモ先輩は諦めたのか、すっかり観戦モードに入つた。

「これより川神学院伝統、決闘の儀を行つ」

じこさんが告げると、場に真剣な空気が流れ始める。

「2人とも、名乗りを上げるがよい」

2人が一步前へ出る。

「2年F組 川神一子！」

「今日より2年F組 クリストイアーネ・フリードリヒ

名乗りを上げると、2人は武器を構える。  
先ほどまでの空気が、更に鋭くなつた。

「ござれ尋常に・・・はじめいつ――――――」

「勝負！」

「いっけえええええ――！」

合図と同時に弾ける2人。

ワン子はレイピアの間合いに入らせない為、薙刀を鋭く振り回す。

「・・・・・」

ワン子の猛攻に、クリスは防戦一方になる・・・が、攻撃が単調すぎる。

「その腕、もらつた！」

ワン子は踏み込んで小手を出すが、

「ふつー！」

クリスに軽く避けられる。

「まだまだーー！」

ワン子はすかさず薙刀を振るつが、クリスはその金髪を優雅になびかせ、華麗にかわしていく。

一見すればワン子が優勢のように見えるが、クリスはだんだんとワン子の薙刀が見えてきている。

最初の頃より、避けるのに無駄な動きが少ない。

多分そろそろ仕掛けてくるだろ？

「そろそろくるな

「・・・ああ

俺とモモ先輩が、そう会話を交わした瞬間。  
クリスは踏み込んだ。

「やーつーー！」

「ーーー」

速く鋭い突きを、ワン子はギリギリのところで回避する。  
仕切り直しに、お互ひ間合いを取り直した。

「あの突きの速さ、尋常じゃない。次に間合いに入られたら終わり  
だよ、ワン子」

弓兵であり、目の良い京は、クリスの突きの速さを完全に見切っていた。

「次で仕留める」

「上等よー。」

ワン子は、聞合いに入られればまずいという事に気がつき、薙刀をクルクルと高速回転させ始めた。  
あれではどこから薙刀が来るかわからず、迂闊に踏み込めない。クリスは迂闊には動かず、隙をうかがっている。  
おそらく、お互い次の一撃で決める気だろう。  
そこで、ワン子の動きが微妙に変わる。

「違う。それじゃダメだ」

「おーい違つぞワン子。そうじゃないだろー」

「？」

その動きの変化に気づいた俺とモモ先輩は、2人で駄目出しをする。大和はその意味がわからず、？を浮かべた。

「川神流」

薙刀を大きく振り上げるワン子。

そのまま頭へ強烈な振り下ろしが行くと見せかけて、薙刀の刃は斜めに流れていき、

「山崩しー。」

クリスの脚へと振り下ろされた。

フェンシングは基本的に脚への攻撃がない。

だから、ワン子の考えは間違っているわけではない。  
だが、一つだけ誤算があった。

「ふつー！」

クリスは跳び上がり、薙刀の刃をかわす。

そして・・・

「しまった！ よけ・・・」

「セハイ！」

隙の出来たワン子の肩に、強烈な突きが炸裂した。

そう、これがワン子の誤算。

一般的にフェンシングに脚への攻撃はないが、フェンシングの種目には全身有効なものがある。

そして、クリスの専門はソレだったのだ。

吹き飛ばされたワン子は、肩を押さえ立ち上ることが出来ない。

「それまで！ 勝者 ク里斯！」

ワーワー ワーワー

見守っていたギャラリーからドッキリ歓声が沸き上がる。

まあ、負けたのは残念だったが、ワン子にはいい経験になつただろう。

ワン子は、フフフフとこちらへ歩いてきていた。

「足りない頭使いすぎなんだよ。もつと本能で闘え」

「うわ、ありや鎖骨イつたんじゃねーか？」

我が風間ファミリーは、なんともおき楽なものである。

「とか冷静に言つてゐる場合じやない。大丈夫か！？」

大和が慌てて駆け寄るが、まあ大丈夫だらう。  
クリスも、本氣だつたわけじやなをそつだしな。

「ふむ、骨は大丈夫そうじやの。暫く後は残るかもしけんが」

「それはよかつた」

じこわんの診断を聞き、クリスも安心したようだ。  
そして、当のワン子はどうと。

「ふ、ふふふふふ。面白いわねクリス、本氣でやるーじやない！」

ワン子が着けていたリストバンドを外す。  
すると ドスッ と音を立てて地面に落ちた。  
どんなベタな展開だよー？

「ああー、ラウンドと行きましょ・・・」

「あほつー既に勝負あつたわー（ぽかつ）」

ワン子はじこさんに戦われ説教される。

当然だねー。

相手の実力を判断できず、はじめから全力で行かなかつたワン子が悪い。

戦場じや、一瞬の油断が命取りだ。

「むークリス、これで勝つたと思わないことねー」

「む

険悪なムードになるかと思ひきや、

「ま、それは置いといて。やるわね・・・アタシ達は、あんたを歓迎するわー！」

「ーー」

ワン子は歓迎の意を示す。

それに伴い、ギャラリーからも大きな拍手が送られた。

「よろしくねー！」

「うわー、よろしく頼むー！」

お互に握手を交わすワン子とクリス。

青春つて感じだ。

「じゃあ、早速アントンのあだ名を考えるわねー！」

はい？

ワン子さん、何言つてるんですか？

「あだ名・・・クリスで充分だが？」

クリスも困惑している。

「ダチには必要でしょう？うーんとね、えーと。クリスだから、クリ！」

「ぐ、クリ！？」

ブ――――――！？

思わず噴出してしまった。

悪気はないんだろうが、どんなあだ名だよそれ。

「やべえ！立つた！」

何がだヨンパチ！？

「股間の反射神経速すぎだろ・・・まあ、俺様もなんだがな」

お前も何言つてんだガクト？

「お巡りさん、ここに変態が2人もいます。大和はまさか立たないよね？ククク」

「お巡りさん3人です。変態の数は3人でした」

お前らも何やつてんの？京に大和。

「クリスでいい」

「アタシは親しみを込めて、クリツて呼ぶわ」

「・・・確かワン子と呼ばれていたな。ならばお前は犬だ。自分はお前を犬と呼ぶ」

・・・ワン子もワン子だが、クリスも意外と子供だな。

「ぬぬぬ」

「むむむ」

にらみ合つ2人。

2人は似たもの同士つてことか？

「世界にいる可愛い子は、すべて私へのお供え物」

その時、一陣の風が吹きぬける。

意味不明な言葉と共に走る風・・・もとい、モモ先輩は、クリスの腕を掴み、

「来い。お姫様抱っこしてやろ！」

「な、何をする！」

抵抗するクリスの拳を受け流し、あっさりお姫様抱っこしてしまつ

た。

「なつ！？・・・」の強や。貴女が川神百代ですか？」

「ピアチーレー！そして、やるの姫子の姉でもある！」

何やつてんだモモ先輩？

それに、ピアチヨリレーでイタリア語だし。

「噂は聞いておりました。真剣勝負を繰り返す戦士であると」

「ああ。戦つてみるか？柔道の寝技でつ

暴走するモモ先輩の頭を、じいさんが後ろからはいた。

「アホかモモ。ほらほら、早う授業に戻れ戻れ！」

「じじい・・・気安く頭殴るなつ・・・てのはまあ置いといて実は提案があるんだ」

「なんじや?」

モモ先輩は、大きく息を吸い、みんなに聞こえるように言った。

「みんなー転人生のクリスと、編人生の士郎の決闘が見たくないか

「あーあの噂の編入生か」

「クリスの実力は今見たけど、衛宮の実力は見た事ないな・・・」

「ちょっと見てみたいよな」

「がやがやと、周りはすっかりその『氣』だ。

「ふむ。それはワシもちょっと『氣』になるのう」

「じこわんアンタもかよー?」

「で、ビルジヤ士郎?」

「いや、ビルだつて、クリスもさつきの戦いで疲れてるだらへー。」

「自分はまだ戦えます」

クリス、やる気満々だし（泣）。

「シロウ、父様やマルさんが評価している貴方と、自分も戦つてみたい。もしよければ、相手をしてくれないだろつか?」

クリスは頭を下げる。

む、そこまでされて断つたら、なんか俺が悪者みたいじゃないか。  
ちくしょう、モモ先輩め。  
最初からその気だつたな。  
・・・しかたない。

「・・・はあ、わかつた決闘を受けるよ

「ありがと、シロウ」

「「おお――――――」」

こうして、衛富士郎VSクリスティニアーネ・フリードリヒの決闘が行われる事になった。

## リューベックからの転入生（後書き）

今回は、最初と最後以外は殆ど原作通りですね。

次回は、土郎とクリスの決闘です。（まあ、更新は不定期ですが）

それではまた次回！！

## 士郎ＶＳクリス

川神学園校庭の人だかりの中心に、2つの人影。士郎とクリスである。

「はいはーい。士郎ＶＳクリス　トトカルチョ締め切るよー」

例の如く、キャップ達は金儲けをしている。

まつたく、何をしているのやう。  
戦っこっちの身にもなってほしい。

「これより、衛宮士郎対クリスティアーネ・フリードリヒの決闘を始める。2人とも、準備はいいかの？」

「自分は構わないが・・・シロウ。武器はどうするんだ? 何なら教室に取りに行くまで待つが?」

士郎が素手なのを見て、クリスが提案してくる。  
わざわざ武器を取りに行く時間をくれると、さすが騎士。

「そうだなあ・・・」

しかし困ったな。

一番使い慣れている武器は干将・莫耶だが、当然の事ながら教室には干将・莫耶のレプリカはない。  
かといって、今ここで投影するわけにもいかない。

「ん?」「

その時、先ほどワン子が使っていた薙刀が目に入る。  
まあ、これでいいか。

「俺はこれを使わせてもらうよ」

「? いいのか? それは犬の得意な武器だろ? もし適当な気持ち  
でやるのならば、それは自分に対する侮辱だぞ」

何を勘違いしたのか、クリスの機嫌が悪くなる。

「なんだ、マルギッテから聞いていないのか? 俺の戦い方は、あま  
り武器を選ばないんだ。確かに使い慣れた武器はあるけど、そのレ  
プリカは教室にはないからな。決してクリスを侮辱しているわけで  
はないんだ。勘違いさせてしまつたのなら謝る。ごめん」

俺は素直に頭を下げる。

確かに、騎士道精神を持つクリスには、失礼だったかもしれない。

「い、いや。自分の方こそすまない。早とちりだつたようだ」

俺が頭を下げた事に驚いたのか、クリスは慌てて言つてきた。

「・・・2人とも、始めてよいかの?」

ああ、すっかりじいさんのことを見れてたよ。  
じゃ、思考を切り替えるとするか。

「俺はいいぞ」

「自分もだ」

「それで、いざ嘲諷に……はじめいつ……。」

じいさんの開始の声が、学園中に響く。

しかし、士郎とクリスは構えたまま、微動だにしない。

「なんだ？全然動かないぞ？」

おいい。睨み合ってないで動けよー

「そこのそこの」

先ほどの激しい戦いとは裏腹に、まつたく動きのない2人に、観客から野次が飛び始めるが、

「お前ら、少し黙れ」

۱۰۷

モモ先輩が一言呴くと、野次を飛ばしていたも者達が静かになつた。そう。2人の戦いは、もう始まつていたのだ。

士郎はクリスがどんな行動をしてきても対処できるような、隙のない構え。

それを前に、クリスは迂闊に攻め込めずにしてる。

「・・・」

「・・・・・！ そこおつー！」

静止状態をクリスが破る。  
士郎に生まれた一瞬の隙を見逃さず、一撃を放つた。  
しかし、

「（ニヤツ）」

「…」

その隙は、クリスを飛び込ませる為の士郎の罠だったのだ。  
突き出されたレイピアは、薙刀の柄の部分で払われ。  
その反動を利用して、刃の部分がクリスの脇腹へと向かう。

「ぐつー！」

しかし、クリスは後ろに下がりながら体を捻り、ギリギリの所で刃  
を回避した。

ザツ

お互いの距離が元の位置に戻る。  
士郎に追撃の気配はない。  
あくまで後の先に徹するようだ。

「はあああーー！」

それから数回。

クリスの突きを士郎がいなし、士郎のカウンターをクリスが避ける  
といふ光景が繰り返される。

「参ったな。こうも避けられるとは、やるなクリス」

「いや。士郎の方こそ、攻防が一体となつた返し技、恐れ入つた。  
だが・・・これならどうだ！」

先ほどよりも速いクリスの突き。

いや、連続突き。

これでは、いなすのが精一杯で反撃が出来ない。

一撃

二撃

三撃

「一撃」とに鋭く、重くなつていいくクリスの突き。

その突きは、聖杯戦争でのランサーの猛攻を思い出させる。

エミヤならば、この突きの嵐を全ていなす事が出来るだろ？  
しかし、今の俺は、まだその域に達してはいない。

いなしきれず、薙刀でクリスの突きを受けなければならなくなる。

ガイイン！

「ぐつーー？」

薙刀には、僅かだがヒビが入る。

「！！ 隙ありつ！！」

一瞬できた士郎の隙。

それは、最初のように自ら作り出したものではなく、クリスの猛攻で出来てしまつた隙だ。

(まずい！強化<sup>トレイス</sup>、開始<sup>オン</sup>)

俺は薙刀に魔力を流し、硬度を増す。

「セヨイイ！！」

放たれた一閃。

レイピアの先と体の間に、間一髪で薙刀を割り込ませる。

が、

バキイ！！

「な！？」

先ほどのヒビが禍したのか、薙刀は中ほどから砕け、レイピアが士郎の腹部を襲う。

直撃を受けた士郎は吹き飛ばされた。

士郎はクリスの突きをいなし続けているが、そろそろいなすのも限界だらう。

「つたぐ、士郎のヤツ使い慣れない薙刀なんか使って。これじゃ何の為にクリスと戦わせたのかわからないじゃないか」

百代は、試合を見ながらつまらなそうに言つ。  
いや、試合 자체はそういうつもりはないものではない。  
ただ、士郎が実力を全て出してない事に、つまらなさを感じているのだ。

「ああ。姉さんやつぱり最初からその気だつたんだ」

流石は大和。  
百代が士郎とクリスを戦わせようとしていた事に、気づいていたようだ。

「前から思つてたんだけど。何で姉さんは、そんなに士郎の強さが知りたいの?」

「アイツは今まで生きてきて、私が勝利をイメージできない2人のうちの1人だからな」

姉さんは戦う士郎を見つめながら、楽しそうに言つ。

「ちなみに、もう一人はじじいだ」

「まあ、姉さんのおじいさんだしね」

姉さんはそう言つが、前にルー先生が言つていた。

短期決戦ならば学園長の勝ちだが、長期戦になると姉さんの勝ちになるらしい。

ざわ ざわ ざわ

その時、辺りがざわめき始める。  
どうやら、戦闘に変化があつたらしい。  
先ほどまで突きをいなしていた土郎が、いなしきれずに突きを受け止め始めていた。

「あーもーーー大和、土郎に何とかして武器を投影する機会をとえり。このままじゃ負けるぞあーーー」

「いや、でも真剣勝負だし……」

方法がないわけじゃないが、真剣勝負に割つて入るよつな真似はできればしたくない。

「なあ、頼むよ弟ーーー」

「ーーー」

甘い声で抱きついてくる姉さん。

そして、この背中に当たる柔らかな感触は……

「姉さん、胸が当たつてる」

冷静に言つてはみたものの、内心はドキドキである。

「嬉しいだろ？」「…」

「う…まあ」

意地の悪い笑みを浮かべながら背中に胸を押し付けてくる姉さん。そんな時、色々な意味で熱い視線を感じた。

「めら めら」

「…京さん？その音は何ですか？」

「私の中で燃え上がる嫉妬の炎を、音で表現してみました。めら めら めら めら」

まずい。

これは非常にまずい。

「めら」の数が増えてきてくる。

「ほら大和～早く私を放さないと、今晚寝られないぞ～（ニヤニヤ）」

くっ、そういうのとかつ！！

まさか、軍師であるこの俺が嵌められるとは。  
恐るべきモモバスト。

「わかつたよ姉さん。何とかするから手を放してくれ」

「よ～しょし、流石弟」

姉さんは俺から手を離し、離れていく。  
少し背中の感触が名残惜しいが、そのままでは今夜本氣で京に既成事實を作られかねない。

「じゃ、ちゅうと行つてくわ」

そう言つて、大和は校舎の中へと入つていった。

「ぐつ・・・」

吹き飛ばされた士郎は、ゆっくりと起き上がる。

今のはギリギリだつたな。

ヒビが入つていたとはいえ、まさか強化した薙刀が破壊されるとは。

とはいえた郎にダメージはない。

薙刀が破壊され、レイピアノ先端が当たる寸前のところへ、士郎は自身の服と体に強化をかけた。

そのおかげで、吹き飛ばされたものの、ダメージは抑えられたとが出来た。

「武器は破壊した。」のまま続けるといつのなら構わないが、自分は手を抜く気はない」

クリスは追撃はせず、仁王立ちのままレイピアの先端をこちらに向ける。

「そうだな。武器なしでどこまでやれるかはわからないが……このまま負けたんじゃ、ちょっととかっこ悪い」

士郎は拳に強化を掛けて構える。

正直、武器なしでは士郎に勝ち目はない。

とはいって、士郎も男の子なのだ。  
あまり乗り気ではなかつたが、こうも簡単に女の子にやられるわけにはいかない。

「ちょっとまた！」

その時、第三者の声によつて決闘が止められた。

「なんだ？ 決闘を邪魔するとは感心しないな」

「大和？」

決闘に割つて入つたのは、直江大和だつた。

「あー……やつぱりこつなるか」

クリスからの厳しい視線と、士郎からの「何やつてんだ？」という視線に、大和はバツが悪そうな顔をする。

「えーと、クリス？ 僕は士郎の友人の直江大和だ」

「シロウの友人か。友を助けようと割つて入つてくるその気持ちは立派だが、決闘を邪魔するのは感心しないな」

決闘を邪魔されたクリスは、見るからに怒つてゐる。先ほどまでこちらに向けていたレイピアを、大和に向けるくらいだ。

「勘違いしないでくれ。別に、決闘を邪魔しに来たわけじゃない。ただ、士郎に渡すモノがあつてな」

「渡すモノ？ それはなんだ、直江大和」

クリスの疑問に対し、大和は手に持つていた袋を見せる。

「なんだそれは？」

「士郎の使い慣れた武器のレプリカだ。これでお互い得意な武器同士、正々堂々決着がつけられるけど、渡してもいいか？」

「……いいだろう。自分としても、シロウとはお互い全力で戦いたい」

義を重んじるクリスは、正々堂々と言つ言葉を聞いて、力強く了承した。

いや、最初から正々堂々と戦つてたんだけどな？

「ほりよ、士郎。姉さんじやないけど、俺も士郎が真剣勝負をするところを見てみたいからな。がんばってくれ」

「そういえば、風間ファミリーの皆の前でまともに戦つたことはなかったな。

モモ先輩や大和の言葉は抜きにしても、久々に真剣に戦つて見るのもいいのかもしない。

もちろん、今までふざけていたわけではないが、どこか乗り気ではなかつた。

「了解。じゃあ頑張るか」

大和がギャラリーへと戻ったのを見計らつて袋を開ける。

「……」

なるほど、どうやって干将・莫耶の変わりなんて用意するのかと思つたが。  
まさか、何も入つていらない袋を渡してくるとはな。

士郎の武器が全て投影によるものだと知つている大和は、こう考えたのだ。

大和<sup>じぶん</sup>が武器を用意する事が出来ないのなら、士郎<sup>あいつ</sup>が武器を用意できる環境を整えてやればいいのだと。

「<sup>トース</sup>投影、<sup>オン</sup>開始」

俺は袋に手を入れると、小声で呟いた。

「「おお——！」」

士郎が袋の中から出した白と黒の剣を見て、ギャラリーへわめきが走る。

対を成す白と黒の夫婦剣は、それほどまでに魅力的だつたのだ。

士郎が投影したのは、陰陽剣 干将・莫耶（もちろん、骨子を改造

して刃は潰してある）。

武器を選ばないなんてクリスに言つたが・・・やはり、こいつの方  
が手に馴染む。

「さあ、続けようか。クリス」

「ああ。行くぞ！」

掛け声と共に放たれたのは、額、首、鳩尾を狙う三連突き。先ほどまでの士郎ならば、受け止めねばならなかつたであろう突き。しかし、武器が変わればこうも変わるものなのかな。  
それとも、士郎が真剣になつたからなのか。

士郎は一刀を巧みに振るい、全ての突きを逸らして、最小限の動きで薄皮一枚のところで避ける。

五  
！

۱۰۰

今まで攻めに転じていたクリスが、初めて防御に回る。

つて士郎から距離を取つた。

クリス自身も得意なのは突きによる攻撃である。

しかしそれを上めて二郎との距離が取りかか  
それほどまでに、追い詰められていたのだ。

「武器を選ばないと言つていたわりに、その剣に変えた途端動きが明らかに変わったぞ、シロウ」

「別に武器を選ばないといつのは嘘ではないさ。ただ、干将・莫耶<sup>コイツ</sup>は俺が一番使っている武器だからな。練度で言えば、薙刀の比ではないだろ？」

いつの間にか、士郎の口調が変わっている。  
どうやら、完全に思考が戦闘時のものに切り替わったらしい。

「・・・」

「・・・」

決闘が始まった時と同じ。

2人は見詰め合つたまま動かない。

否、クリスは動けない。

そんな状態を、今度は士郎が破つた。

「そろそろ授業の始まる時間だ。不本意だが、次で終わらせてもら  
う」

「いいだろ？。自分も、次の一撃で終わらせる」

士郎は両手をだらりと下げ、クリスはレイピアを顔の前に構える。  
先に動いたのは士郎だった。

「はあっ！」

「なあ！？」

クリスは驚いた。

なんと、士郎は双剣の「うちの一つをこちらに向かって投げてきたのだ。

それと同時に、士郎は一直線にクリスに向かつて走る。

「ぐうー！」

飛んできた干将を、クリスはレイピアで弾く。  
その間に懷にもぐりこんだ俺は、クリスの脇腹めがけて莫耶を振るう。

「甘いー！」

しかし、避けられないと判断したクリスが、莫耶を狙つて突きを出してきた。

ギイン

「ちつー！」

鋭く重い突きに、腕ごと莫耶は弾かれる。

莫耶を持った腕が上にあがり、無防備になつた胸へとクリスの突きが迫る。

しかし・・・

「背中ががら空きだ」

「ーーー」

士郎の忠告と同時に背後から聞こえる風切音。

振り向いたクリスは、驚くべき反射神経で体を捻りながら飛び退き、

飛んできた何かをかわす。

「なんだと！？」

驚くのも無理はない。

背後から飛んできたのは、士郎が最初に投擲し、クリスが弾いた干将だったのだ。

これぞ、干将・莫耶の特性。

干将・莫耶は夫婦剣。お互いが磁石のように引き合つ。

故に、この手に莫耶がある限り、干将は必ず戻つてくる。

戻ってきた干将を掴んだ士郎は、間髪入れずにクリスへ剣を振るつ。着地したばかりのクリスは避ける事が出来ない。

止む終えず、レイピアの腹で干将・莫耶を受け止める事になる。

「む？」

士郎はそれでレイピアを破壊できると踏んでいた。

ところが、レイピアは大きくしなりはしたが、折れることはなかつた。

クリスは、干将・莫耶をレイピアで受けるタイミングに合わせ自らの肘を曲げ、僅かに後ろに飛び事によつて衝撃を最小限に抑えたのだ。

再び士郎はクリスに接近する。

突きを溜める暇を与えない為だ。

ところが、クリスの口には笑みが浮かんでいる。

「次に接近してくる、この機会を待つていたぞ！」

「……（まあさいー）」

士郎の心眼には、クリスが全身の筋肉をバネの様にして、腕に力を伝えようとしてるのがわかつた。

「零距離・刺突！――」

放たれるのは、零距離とは思えないほどのパワーとスピードのある突き。

「うおおおおおおお――！」

士郎は大砲のような一撃を前に、避けるといつ選択肢を捨て、交差するように干将・莫耶を振り下ろした。

「ど、どうなったんだ？」

「大丈夫かしら、2人とも動かないわよ？」

静止する2人に、ギャラリーからは心配の声が出始める。

カラソツ

その時、校庭に響いた金属音。

その正体は、中ほどで真つ二つに折られた、クリスのレイピアだつた。

クリスが干将・莫耶を受け止めた時、既にレイピアの強度は限界を迎えていた。

その状態で零距離・刺突を放ち、更には心眼でクリスの攻撃を一瞬早く予測した士郎に干将・莫耶を振り下ろされ、レイピアは士郎に届くことなく破壊されてしまったのだ。

「さつきと立場が逆だな。で、どうすの？まだ続けるといつのなら、こちらも手は抜かないが？」

嫌味つぽく口に笑みを浮かべて言う土郎に、クリスは微笑で返す。

「いや。素手では自分はシロウには勝てない。この勝負、自分の負けだ」

卷之二

ギヤラリーの生徒達が、ざわざわとしだす。

勝者  
衛宮士郎！

じいさんの宣言で、ざわめきだつたものが、大歓声へと変わる。 むう。今まで、戦つて歓声を浴びる事なんてなかつたから妙な感じだ。

「ありがとうシロウ。今日はとても勉強になった。また、いつか自分と決闘をしてくれないだろうか?」

そう言つて手を差し伸べてくるクリスに、

「ああ、俺でよければ」

そう答えて、しっかりと握手する。

こうして、編入生 衛宮士郎 VS 転校生 クリストイアーネ・フリードリヒの戦いは幕を閉じた。

その頃、他の面々は・・・

「・・・やっぱり強いな、士郎は。いつか戦つてみたい」

闘気を溢れだしながら、不適に笑う百代。

「よつしゃー！士郎のおかげで大儲けだぜ！」

「ククク、ナイス士郎」

「ま、最初の試合で、クリスの実力を皆が見てたのが良かつたな」

最初に行われたワン子とクリスの決闘のおかげで、トトカルチョでは大多数がクリスに賭けていた。

そのおかげで、士郎に賭けたキャップ、京、大和の3人は大儲けだったのである。

「いや、強い女の子が多い川神学園だけど、士郎みたいに男の子が

頑張ってくれると、肩身が狭い思いをしなくてすむから助かるよな

「おこモローそれは、いつもモモ先輩や京、たまにワソ子にやられてる俺にケンカ売つてんのか？」

いつも通り仲のいい、モロとガクト。

「ちょっとーー? 僕達だけ説明酷くないーー?」

「ナラだぜー! れじやあ、俺様とモロがおホモ達みたいじゃねえかよー。」

やつぱり2人は仲がいい。

「「おこつーー」」

ギャラリーの中、刀を背に、馬のストラップを持つ少女。

「朝の鍛錬でも思いましたけど、やつぱり土郎さんは強いですねー」

「そだなー、まゆっち」

「しかも、あんなに目立てーーーお友達まで出来てますよ松風」

「まゆっちも、決闘とかした方がいんじゃね? さうすりや宿敵とかできんじゅね?」

などと、熱い少年漫画のような展開を夢見るまゆっちと松風。

そして、クリスの一撃で怪我をして保健室に向かったワソ子はどうと・・・

「ええ！？土郎とクリが決闘！？」

「ウン。 イイ試合だつたヨ。 見れなくて残念だつたネ、一子

「うわ～ん」

ルー先生から土郎とクリスの決闘内容を聞き、涙するのであった。

## 土郎VSクリス（後書き）

というわけで、土郎とクリスの戦いは、土郎の勝利という形で幕を閉じました。

干将・莫耶で土郎が使った技は、鶴翼三連の劣化版ですね。本来ならば、三対の干将・莫耶、6本の剣で行う技ですが、生徒達の前で投影を使うわけにもいかないので、こんな感じになりました。

次回は「正義の味方とやさしい少女」の方を更新する予定なので、しばらく間が空くと思います。

それではまた次回！！

## 京の怒り（前書き）

すいません。だいぶ更新が遅れました。

さて、皆さんはじ存知でしょうか？なんと、「真剣で私に恋しなさい！」がアニメ化するらしいですよ！しかも、マジこの制作も着々と進んでいる模様。

もしかすると、嬉しさのあまりテンションが上がり、更新速度が上がる……かも？

それでは本編をどうぞ。

## 京の怒り

クリスとの決闘の後、梅先生からの説明でクリスが島津寮へ住むことが告げられる。

島津寮に殆どのメンバーが暮らす風間ファミリーは、クリスの面倒を見ることになった。

そして放課後……

「ちょっとといいだろうか？」

キャップと大和の2人と雑談していた所へ、クリスがやってきた。

「どうしたんだ？」

「部屋が隣という事もあって、椎名殿に寮へ案内してもらおうと思つたのだが、部活があるからと断られてしまった」

残念そうに言うクリス。

士郎と大和は同時に思った。

「（……京、逃げやがったな）」「

「そりゃ「めん。アイツ根暗だけどいやつだから

すかさずフォローを入れるキャップ。流石だ。

でも、「根暗だけど」という台詞はいらないと思つた。

「でも、俺これからバイトだからな……ってな訳で、軍師大和」

「いや。俺も今日はヤドカリの餌買いに行かなきゃいけないから…  
…つてな訳で、ブラウニー士郎」

「誰がブラウニーだ！……まあいいけどわ」

まさか、回りまわって俺まで来るか。

一応俺も編入したばかりなんだけどなあ。

「というわけだから、俺が案内するよクリス」

「ありがとう」

柔らかに微笑むクリス。

その柔らかな笑みは、

ああ、本当にセイバーに似ているな。

その後、クリスにまず学校内を案内し、寮への帰り道川神院や商店街のほうもざつと案内する事にした。

「士郎は自分が来る数日前に編入してきたと聞いたのだが、ずいぶんと学校内やこの町に詳しいんだな」

「ああ、言つてなかつたか？俺はもともと川神院で世話になつてたんだ。世界を旅してた時だつて、たまにここに帰つてきてたしなあ」

地元なのだから、詳しいのはあたりまえだ。

何故学校内が詳しいのか。それは、つい昔の癖で建物の中に入るとトラップ等がないか、逃走経路はどうするか等、無意識に構造を解析してしまうからだ。

だから、実際に校内を隅々まで回るのは今日が始めてだつたりする。風間ファミリーの皆は俺の魔術のことを知ってるから、案内なんてしてくれなかつたもんな。

「川神院で世話になつてた？シロウの両親は川神院で働いているのか？」

「いや、小さい時に事故にあつてさ。俺、両親はいないんだ」

親の事を聞かれた時は、とりあえず事故といつ事にしている。事故というのは、あながち間違いでもないしな。

「……すまない」

すまなそつに頭を下げるクリス。

しまつた。

風間ファミリーの皆は複雑な事情とかあまり気にしない連中だから、ついいつもの調子で話しちゃつたけど、普通の反応はこりだよな。

「き、気にしなくていいぞ？事故のせいで記憶がないから、悲しいとかそういうことはないし……」

「うう～～

泣・か・せ・て・し・ま・つ・た。

(やばい…ど、どうすればいいんだ！？)

「わ、悪いクリス！泣かせるつもりはなかつたんだが

「いや、違うんだ。すまない。もし父様が死んでしまったらと想像したらいい」

「ぢづやらクリスは自分が俺のよひだつたら、と言ひ事を想像してしまつたらしい。

なんか悪い事をしたな。

「だ、大丈夫だつて。中将殿は強いし、マルギッテも傍にいるじゃないか!」

「グスツ……うん。そうだな」

必死の説得の甲斐あつてか、なんとかクリスは泣き止んでくれた。

「ありがとう。士郎は強いな」

「……そんな事はないさ。もし俺が強く見えるなら、それは、今まで出合つた多くの人達のおかげだ」

遠くを見つめる士郎の眼。

その横顔を、クリスはとても尊いものに感じた。そして、同時に寂しさを。

「や、それじゃあそろそろ寮へ帰るか」

「ああ、やうだな」

多馬の河原を寮へ向けて歩く2人。

先程の会話の内容が原因か、2人はお互に喋らない。

「……」

「……」

「氣まずい。

正直何を話せばいいのか思いつかない。

元々士郎は戦地を転々としていたため、同年代の人と話すことが少ない。

高校時代でさえ、友人と呼べる一般人は男子である一成くらいなのだ。

そんな士郎が、年頃の女の子に振れる話題などあるわけもなく、結果お互い無言で歩く事になってしまった。

ペペペペペペ

「ん？」

その時、士郎の携帯がなった。  
どうやらメールらしい。

クリスと寮の変わった一年生を連れて集会に来い！

b yみんなのキャップ

「……何考えてるんだ？」

届いたキャップからのメールには、クリスとまゆつちを連れて金曜集会に参加しろとのことだった。

金曜集会。それは、中学の時京が親の都合で引っ越しすることになり、

週末にいつも遊びに来たことから「金曜日はみんなで集まるわ」という理由で始まった集会だ。

今では九鬼財閥の所有している土地の警備といつ頃田で、廃ビル内を集会場所として使っている。

(何が目的かわからないが……まあ、キャップのことだけ考えがあるんだろう……たぶん)

「どうしたんだシロウ？」

立ち止まり携帯の画面を見ていた俺を不審に思ったのか、クリスが怪訝そうに話しかけてきた。

「クリス。一度寮へ戻った後、もう少し付き合ってもらいつてもいいか？」

「？ 自分は別にかまわないが？」

「悪いな。じゃあ、とりあえず寮へ行こう」

キャップからのメールに疑問を残しつつも、士郎はまゆつちを連れて行くために寮へ向かうのだった。

士郎にメールが届く数十分前。

秘密基地には、各々の用事を終えた、士郎を除く風間ファミリーのメンバーが集められていた。

「どうしたんだよキャップ？ 急に集合だなんて？ 宅配寿司のバイトはどうしたんだ？」

わざわざ召集をかけなくても今日は金曜日。自然と皆が秘密基地に集まる日だ。

それなのにわざわざ召集をかけたキャップの行動を疑問に思い、大和が問いかけた。

「ああ。今日は宅配件数が少ないから早めにあがつていいって言われた。もちろん、土産はちゃんともらってきた」

ドンッ とテーブルに寿司を置くキャップ。  
うん。バイトのことは分かつた。けど、なんで緊急召集をかけたのかは未だわからない。

「おほんっ！ 今日お前達を呼んだのは他でもない。  
バー加入についてだ」

新メン

「 「……えつ？」

さも当然のように言い放つキャップに、皆唖然だ。  
だるだるにしていた百代でわ、田をぱちくりとかせてくる。

「あれ？ 言つてなかつたつけ？」

「 言つてないよ…今聞いたよ…？」

キャップのおとぼけっぷりに、モロが鋭くツツ「みを入れた。

「じゃあ、今話す。よく聞けみんな

「

どうやらキャップは、転入生のクリスと島津寮に入った新入生の1年生が気になつてゐるらしい（もちろん、恋愛感情ではない）。それで、面白いことになりそうだから、2人を新メンバーに加えたいそうだ。

「……」

今のメンバーを大切に思つてゐる京は、当然不穏な雰囲気を醸し出す。

「つーわけで、一人ずつ意見を言つてくれ」

そんな京に気づいてか、キャップはみんなの意見を聞くことにした。こういう気配りができるところは、流石リーダーといったところだ。結果、言い出しつペのキャップ、そして、百代と岳人の3人は賛成。京とモロは反対。大和とワニ子は様子見という意見を出した。多数決では賛成派が多い為、話し合いの結果、とりあえず一度クリス達をここへ招くことになった。

「そうと決まれば善は急げだ！士郎にメールするぜー！」

「いやいやいやー！いくらなんでも早すぎだろつ！…」

「大和、風つてのは自由気まま、気まぐれなもんだ。てなわけで送信

止める大和の声も聞かず、キャップはメールを送信するのだった：

⋮。

「…………で、この棚には囲碁とか将棋が置いてあって、あつちはみんなで持ちよつた漫画とか」

「凄いな。なんでもあるんだなこゝは」

「わあ～、なんかいいですね、こゝもいつの」

現在、クリスとまゆつちは、モロやほかのメンバーから基地内を案内されている。

クリス達がモロの説明に夢中になつていて、大和から事情を聞いたので、大体の事情は理解した。まあ、呼んだ当の本人であるキャップが福引をやりに出かけたというのは納得いかないが……。

それはさておき、クリスとまゆつちを風間ファミリーに入れるという案は個人的には賛成だ。

2人ともまだ学園にきたばかりだし、仲間が増えるのは喜ばしいことだ。

ただ一つ。問題があるとすれば、それは……怠すぎる。

現在の風間ファミリーを氣に入っている京との間で問題が起きなければいいが……。

「うーん……で？」

「え？」

(ん?)

「こゝの場所は、どういう意味があるんだ？ 遊びたければ家でもい

いだろ「つへ」

クリスは心底わからないといった様子で尋ねる。  
……この状況は、不味いんじゃないか？

「わざわざこんな場所に集まる意味が分からぬぞ」

「クリス、その辺で……」

「少なくとも、建設的な行為ではない」

「やめておけ、クリス」

俺が止めようとしたのを無視して続けるクリスに、流石の大和も不味いと感じたのか、少し強めの口調で制する。

「率直な意見だ、直江大和」

自分の言葉を止められたのが気に入らなかつたのか、クリスも少し口調が強くなる。

チラリ と京に視線を向けると、拳が握られ、僅かに震えている。クリスの次の言葉によつては、京が動きかねない。

そう感じた士郎は、さりげなく京とクリスの間にすれ、いつでも動けるように意識を集中させた。

「こんな廃ビルは、もつと取り壊すべきだな」

「お前、死ねよ」

「……」

クリスの言葉と、京が動くのはほぼ同時だった。

飛び掛かるつとした京を、俺は間一髪のところで止める。

「ひー！ やっぱりいつなるのかよ……！」

危なかった。クリスと京の間にいなければ、たぶん止めるのが間に合わなかつただろう。

女の子が強いというのも考え方だな。

「よくも……よくも好き放題言つてくれたなあああああ……！」

俺が抑えてるにもかかわらず、京はクリスを睨み殺さんと言わんばかりの形相で睨みつけ、声を張り上げる。

「京！ やめろ！」

大和の言葉と同時に、モモ先輩も京の体を押さえる。正直助かった。今の京を無傷のまま抑えるのは俺には難しかつたから。

「分からぬだろ、お前には……この場所が！ この空間が！ どれだけ……どれだけ大切なのが……！」

「え……え？」

クリスは、普段冷静な京の豹変ぶりに驚いた。

意図して京の逆鱗に触れてしまつたわけではない。いや、むしろ無意識に、本心で言つてしまつたからこそ、それを京も理解しているからこそ、京はクリスを許すことができないのだ。

「だからこんな新参者を入れるの嫌だつたんだ！！ 壊すべき？ よくもそんな事この場所で言つてくれたな！ 何様だと思つてやがるー。」

「み、京。待て、話を……」

「さつさと帰れ！！！ お前なんか仲間でもな……」

「ダメだ、京！』

それは言つてはいけない。

確かに、京の気持ちはわかる。俺たちにとつて、かけがえのないこの場所を「壊した方がいい」なんて言われたんだ。俺だつて正直怒つてる。

だけど、「仲間じゃないそのいじわら」を言つてしまえば、もう一度とクリスと仲間になることはできない。

その決断をするには、まだ早すぎる。

「京！ 落ち着け！」

大和は京を落ち着かせる為に、力強く抱きしめる。

「大和……だつて、こいつ！ この場所を侮辱した！ 否定したんだ！！ ゆ、許せないよ……！」

「もつと強く抱いてやれ」

「うん。……京、もういいから」

「う……う……うううううううう

モモ先輩の言葉で大和が京をさらに強く抱きしめた瞬間、京は大粒の涙を流し泣きだした。

場は静まり返り、京のうめく声だけが響いている。

「な……何だ。何が気に障つた。自分は正しい」と言つたはずだが

「正しい?

この状況で、クリスはまだ自分が正しいと思つてゐるのか?

「クリス、やつぱりそれが正しいとまだ思うんだ

俺と同じ疑問を感じたのか、モロがクリスに問い合わせる。

「あ、ああ

肯定の言葉。

その一言で、今度はモロの何かが切れた。

「じゃあ、本物のよならだね

「え?」

「仲間にはなれなかつたね、残念。でも、学校ではまた普通に話そ  
うよー。気をつけて帰つてね~」

あからさまに不機嫌な雰囲気をだして、笑つてクリスに言つモロ。  
その笑顔が逆に怖い。

「え……あ、あう……え？　あ、あの」

突然の展開に、まゆっちは状況がつかめずオロオロしてくる。

「理由を言つてくれ！　納得できない！」

「「……」」

クリスは周りを見渡すが、だれも答えない。  
そこで、モモ先輩が一步前に出た。

「私が言つてやるか、クリ。お前つぞこぞ」

「え……」

「意味がないってのも、建設的じゃないってのも、全部お前の物差しだらうが。私たちは理屈じゃなく、好きでここに集まってるんだ。誰に描画されようが、やめる気はないぞ」

「血分は、ただ……」

「もうよせクリス。ここではお前が悪い」

「ワル……自分が、悪だと…？」

皆を敵に回し、縮こまっていたクリスだが、大和の「悪い」という言葉。「悪」という言葉に反応して、頭に血を登らせる。

「ああ。この空氣、分からぬいか？」

「悪いなどでは断じてない！！ 確かに自分の物差しはあるが、じぶんいがいも普通この意見のはずだ！ そうだろう、シロウー！」

興奮して顔を赤くしながらも、すぐる様な目で俺を見るクリス。まるで、自分が間違つていないと認めてもらいたいかのように。だけど

「クリス。今のはどう考えてもお前が悪い」

「違う！ 自分は悪いなどでは断じてない！ シロウ、なぜそんなことを言うんだ。自分はマルさんや父様から、シロウは正義を貫く男だと聞いているぞ！ それが何故……」

まったく、クリスも固い奴だな。  
何で「悪い」＝「悪」と捉えてしまつのか……。

「見損なつたぞシロウ。ふつ、よく考えればわかることだったな。日本人のくせに肌を焼き、髪を染めているよつたキャラキャラした奴が、正義を語るなど」

いや、それは偏見だろ？ 肌を焼いたり髪を染めたりしている人だつて、いい人はたくさんいる。  
と、まあ、それは置いておいてだ。

今まで気にしたことはなかつたけど、そんな風に言われたのは初めてだな。

確かに、俺の風貌は普通の人から見れば異質な……

「…」

「……おこ、クリ

部屋の温度が急激に下がる。いや、実際に下がったわけではない。正確には、殺氣にも似たモモ先輩の怒気がこの部屋を埋め尽くしているからだ。

「お前、士郎のことによく知りもしないで何ふざけたことをぬかしてやる」

モモ先輩はさつきより怒っている。

何故急に？

「よく知らない？ 自分はシロウのことを父様達から聞いてよく知っている。そして、自分の目で見た感想を言つただけだ」

「モモ先ぱ……」

「士郎……」

今にもクリスに殴り掛かるんじゃないかとこう雰囲気を出すモモ先輩を止めようとした所、ワン子にそれを阻止された。

「お姉さまは、士郎の為に怒ってるのよ。ううん、お姉さまだけじゃない、私たちも」

モモ先輩の怒気に紛れて気づかなかつたが、よく見れば他のみんなもモモ先輩ほどじゃないにしろ、明らかに怒っている。

「だから、止めないであげて」

む……。そんなこと言われたら止められないじゃないか。

「わかった。でも、危ないと思つたら力づくで止めるぞ

「うん」

「いいか、クリ。事情があつて詳しくは話せないけどな、士郎の肌と髪は好きであんな色になつたんじゃない。多くの人を救い続けた代償でああなつてしまつたんだ」

「え……？ それは、どういづ」

意味不明なことを言われ、クリスは疑問符を浮かべる。  
そのおかげで、クリスもひとまず冷静さを取り戻したようだ。

「それをお前はつ！！」

「トレース  
投影、オン  
開始」

モモ先輩が飛び出そつと足に力を入れた瞬間、俺は剣を投影。剣の檻でモモ先輩を囲む。

それでモモ先輩を止められるとは思つていない。だけど、冷静さを取り戻せるには十分だろう。

「士郎……ちつ、悪かつたよ」

予想通り冷静を取り戻したモモ先輩は、舌打ちしながらも拳を收めた。

それを見て、俺も投影した剣を破棄する。

「な、なんだ、今のは……？」

「え……あれ？」

初めて俺の投影を見たクリスとまゆつちは驚き、啞然としている。風間ファミリーの皆さん、まさかモモ先輩を止めるのに魔術を使うとは思ってなかつたのか驚いている。

皆が驚きで冷静さを取り戻してゐる今がチャンスだな。

「話が逸れてきてる。俺の事は一先ず置いておいて、クリス。お前はどうして自分が悪いのかわからない、そうだな？」

「あ、ああ」

「いいかクリス。人にはそれぞれ大切な物がある。それは、人であつたり、物であつたり、居場所であつたり。クリスにもあるだろう？」

「自分の大切な物……父様やマルさん、それに父様からもらつたぬいぐるみとかかな」

クリスは自分にとつて大切なものを次々と述べていく。

「それを侮辱されたらどう思つ」

「当然、許すことなどできないな」

「つまり、そういうことだよ」

「……？…………！」

俺の言葉に何か気づいたのか、クリスは はつ とした後、表情を暗くさせる。

「そりゃ……それだけ、大事な場所だったんだな」

そりゃ、クリスは数歩下がりふかぶかと頭を下げる。

「椎名京。皆。謝罪する。すまなかつた。……自分は、もう一度と今のような発言はしないと誓う。だから、ここにこさせてほしい」

頭を下げるクリスを見て、今までクリスを睨み続けていた京もようやく目力を緩めた。

溜息を吐きながらも、俺はオロオロしていたもう一人の新メンバーまゆっちの方へ向かう。

「びっくりさせて悪かつたな」

「いえ。いろいろと勉強になりました。……寮で士郎さんが語つてた“家族”という意味。わかつた気がします。風間ファミリーの皆さんは“家族”でここは“家”そんな感じでしょうか？」

「そうだな。そんな感じだ。そして、今日からクリスとまゆっちも“家族”だ

「……はいっ！」

「これでよしやく一段落だな。

まつたく、俺達を呼びだしたキャラップはこいつ帰つてへるのせり……。

その時、外から聞こえてきたバイクのエンジン音。

このエンジン音…………よしやく我らがキャラップのお圧ましか。  
まつたく遅いや。

## 京の怒り（後書き）

原作部分がだいぶはしょられました。

まあ、その冬馬とか2・Sメンバーは絡ませていきますが、現時点  
で原作通りに進めると、大和とクリスが衝突することになってしま  
うので、やむを得ず端折りました。できれば土郎とクリスを衝突さ  
せたいと考えていますので。  
それではまた次回！！

## クリスとの亀裂（前書き）

ようやく……ようやくバイトの方が落ち着いてきた。

仕事量は増えたが、週休一日の状態に戻った。これで勝つる、いや、書ける！

あ、それはそうとの間体調を崩し病院に行つた時の事なんですねどね。会計の人曰く「緑川光様、緑川光様。会計の準備ができましたのでお越しください」って言つたんですよ。そりやもう全力で周りを見渡しますよね？

結局トイレか何かに行つていたみたいで誰も会計へと向かいませんでしたが、キヨロキヨロしてたら隣のおばちゃんにもの凄く睨まれたので「フツ、なんだ気のせいいか」と言つて誤魔化しました（誤魔化せたのか！？）。

では、本編をどうぞ。

## クリスとの亀裂

「おーーーーすーーいやいや聞け聞けお前達！　俺の運たるや、まさに豪運と言つていい領域だぜ？　ガラガラ回しまくって、豪華景品GETだぜ！」

そこへ、場の空気を読まず、陽気なキャップがやつてきた。

「しかも、帰りにバイト先から余った寿司をもらってきた。皆、寿司を食いつつ俺の偉大さを祝ってくれ！　ま、ネタは卵ばかりだがな！」

そう言つてテーブルに置かれた皿は、見事に黄色。本当に卵だけだった。

「……って、あれ？　何だこの空氣？」

そこでよひやく、キャップは部屋の空氣がおかしいことに気付く。いや、遅すぎた。

「ずるいぞう、大和！　俺のいない間に、何青春っぽい氣まずい雰囲気になつてるんだよー！」

と、そんなことで動じるキャップではなかつた。流石というかなんというか……とりあえず、本氣で悔しがるキャップに、大和が先ほどの経緯を説明した。

「……ふーん。ってか、もう全部解決してんじゃん。クリスが謝つたらなら終わりじゃね？」

「まあ、な」

「ま、一回くへりこいづこうのは仕方ねえわな」

キャップはとても寛大だった。

だからこそ、俺達のリーダー足りてるんだろ? など。

「とりあえず皆。今ちょっと気まずい思いをした関係を修復する意味で、いかねーか?」

そう。キャップが当てたのは、2泊3日の箱根旅行団体招待券だったのだ。

事前に連休に予定を入れないようキャップに言っていた風間ファミリーのメンバーは当然のこと、転入＆新入してきたクリスとまゆっちにも予定はない。

こうして、新メンバーのクリスとまゆっちを含む俺達風間ファミリーは、連休を箱根で過ごすこととなつた。

「……あれ? この写真、皆さんの小さい頃ですか?」

場もだいぶ落ち着き、皆で卵寿司を食べていると、まゆっちが部屋に置いてあった写真を手に取り呟いた。

「おー。8人そろってるだう」

「皆、面影があるな」

写真に興味を持ったのか、クリスもまゆっちと一緒に写真を見始め

た。

「背の高い花ですねえ」

「ふふーん。その花、リュウゼツランって言つのでよ」

「犬が知つてゐるとは。よほど大事な話でもあるのか、この花には……」

特に花の名前に詳しいわけでもないワン子が白靈げに言つので、クリスは興味が沸いたらしい。

教えてくれと言わんばかりの田で、こちらを見ている。

「ああ、それはね……」

クリスの疑問に対し、大和が昔の事語りだす。  
皆で空き地で遊び始め、そこで竜舌蘭を見つけたこと。  
竜舌蘭を護る為、嵐の中空き地まで行ったこと。

そして、そこで

「そこので、初めて俺達は士郎と会つたんだ」

「そうそう、あの時は凄かつたよなー！ 剣がいっぱい振ってきて、木材を地面に縫い付けたんだぜ？」

あ、キヤップめ、余計なことを。

「そうだ、シロウー さつきの剣。あれはいつたいなんだつたんだ！？」

「あ、私も気になります」

くや。せっかく話が逸れていたというのに、キャップのせいでクリスとまゆっちが投影の事を気に始めたじゃないか。  
まあ、ファミリーに入るんだつたら、どうせいつかは説明する羽田になるんだろうけど……。

「はあ……じゃあ説明するけど、キヤップ。あまり迂闊に俺の魔術の事は言わないでくれ。一応魔術は隠匿するものとされてるから」

「悪い。気を付ける

俺はクリスとまゆっちに、魔術の事を説明した。

魔術に関する全てを説明するのも面倒なので、今回は俺の使える投影、変化、強化の3つのみ。

この世界へ移動した経緯も、大まかな部分を濁し説明した。

「本当に魔術なんものが……ー?」

「でもクリスさん。私達は、実際に士郎さんが何もないところから剣を出すのを見ていますから」

困惑しつつも、実際に俺の投影を見た為2人は何とか信じてくれたようだ。

「ま、俺の話は置いておいてだ。それで、俺達は50年後もまた皆でこの花と写真を撮る」と決めたんだ

「その空地、埋め立てられちまつたけどな

「でも、アタシ達でさつちつこの花の子供を移したのよねー。」  
ビルの下の草地にさ

そう。空き地が埋め立てられると知った俺達は、リュウゼツランの苗を掘り起こしたのだ。

しっかりと根が張つていて取るのが大変だったが、まだ小さいながらもリュウゼツランは無事に成長を続けている。

「あ、あのー もしようしければ……」

「ああ。次はまゆっちとクリスも一緒にな

まゆっちの言わんとしたことを察したキャップは、まゆっちが言一切る前に了承する。

とこっか、サクッとまゆっちをあだ名で呼んでいるキャップ。

「はーい、今から楽しみです!」

「…………ありがとう」

クリスも穏やかにほほ笑む。

うん、これでほんとに一件落着だな。

「ふう、外の空気を吸ってきてリフレッシュ……」

その時、いつの間にいなくなつたのか、ガクトが戻つてきた。  
ほんとにいつ出て行つたんだ?

「ガクトの為に、沢山残しておいたぜ」

「友達の余計な気遣いが泣けるぜ」

そんなガクトに、大和は笑顔で残った卵寿司を全て押し付けるのであつた。

こうして、一波乱あつた金曜集会は終わりを告げる。

……ちなみに、余つた寿司はワン子がおいしく頂きました。

秘密基地からの帰宅中。

「む？ 隠すまない。先に行つてくれ」

クリスが一人道をそれる。

「なんだ？」

「どうした？」

疑問に思い、クリスの行く先を見ると、小さな人ばかりができ何やら揉め事が起きてるようだつた。

なるほど。義を重んじるクリスには見逃せないわけだ。

「クリスは俺が見とくから、みんな先に行つてくれていいぞ」

「ん、じゃあ任せた。後でな」

「ああ」

俺もみんなと別れ、クリスの後を追う。

クリスがそこらの不良に負けるとは思えないが、ＫＹなクリスが介入することで場がさらに悪くなる可能性がある。それは防がねば。

「お前達、今そこに人からお金を奪つただろ？。返すんだ」

「ああ！？ 何だテメエは？」

「俺達は奪つたんじやねえよ、こいつに借りたんだよ。なあ？」

「……は、はい」

もめ事を起こしていたチンピリ、……もとい不良たちは、びつやらカツアゲをしていたらしい。

だが、カツアゲをされていた少年は、不良にビビりその事実を認めることができない。

「あくまで認めない氣か、ここの悪党め」

「悪党？ 俺達は友達から金を借りただけだぜ？ 言いがかりはよしてくれよ、正義の味方気取りの外人さん」

クリスの実力を知らない不良達は、小馬鹿にしたようにクリスを挑発する。

だが、それがクリスを怒らせた。特にクリスは、自分の行動を「正義の味方気取り」と言われるのが許せなかつた。

「お前達……！」

クリスの手刀が不良達へ伸びる。

その手刀が不良達の首をとらえようとした瞬間、

「そこまでだ、クリス」

士郎に腕を掴まれ、止められた。

「何故止めるんだ、シロウ！」

「つー？ お、おい。白い髪に黒い肌……こいつ、まさか

「ああ、間違いねエ……！」

手刀を止められたクリスは憤慨し、士郎の姿を見た不良達はあからさまに狼狽えた。

不良達には見覚えがある。確かに前にも似たようなことをしていて、俺が注意したはずだ。

……まあ、その後止むを得なくこちらも手を出したわけだが。

「事情は見てたから大体わかつて。お前達、金をその人に返せ。本当に金を借りたいほど困ってるなら、俺が貸してやるが？」

不良達が嘘をついているのが分かっている士郎は、軽口を叩いてはいるが、鋭い目つきで相手を睨む。

「……つくー？ 衛宮士郎相手じゃ分が悪い、帰るぞー！」

「ちつー！」

不良達は金を少年に投げ返し、その場を去つて行った。……。  
少年のを見送った後、俺とクリスも寮への帰路に着く。

「……シロウ。なぜ自分の邪魔をした」

時間も経ち多少冷静さを取り戻したようだが、不機嫌にクリスは言った。

「邪魔をしたつもりはないけど、手を出すのはよくない」

「そんなことはない！ アイツらはカツアゲをして、更には自分を侮辱した悪だぞ！ 悪は成敗しなくてはいけない」

「……確かに、悪いことをしたなら罪を償わなければならない。けど、それを力によつて行つのは違うんじゃないか？」

クリスの考え方自体は間違いじゃない。  
けれど、力で押さえつけ傷つければ、そこから負の連鎖は始まつてしまつ。

「なら言わせてもらうが、お前のやつたことは力ずくではないといふのか？ 不良達に睨みを利かせ下がらせた。方法はどうあれ、力でねじ伏せたようなものではないか」

「ああ、それ自体は否定しないし、俺が正しかつたところつもりはないよ。けど、過程はどうあれ結果は違う」

「結果……だと？」

クリスは理解ができず、疑問符を浮かべる。

「あのままクリスが暴力によつて鎮圧しても、彼らは確かに少年に金を返しそうって行つたと思う。けど、それではいつかあいつらは不

満が溜まつてやつ返しに来るだらう。

「それは、シロウのやり方でも……」

「いや、俺の場合は確かによくは思われないだらうが、怪我をさせたわけでもないからな。奴らが俺に因縁をつけた理由がない」「そこは黙つておこう。

「俺が風間フアミリーの一員なのは川神市では結構有名だし、最悪モモ先輩の名前を出せば無駄な争いは起きないぞ」

「それは、ずるくないか？ モモ先輩を利用してゐみたいで」

お堅いクリスの事だ、そつとひだりは思つてたけど……。

「無駄な争いが起きたことに比べれば、この程度のずるさは問題じやないか。それに、利用すると言つてゐけど、モモ先輩に了解は取つてあるし、良い方にすれば仲間を頼つてるんだ」

昔は士郎も自分だけの力で何とかしようとしていた。  
けれど、そんな士郎にキャップや仲間達は言ったのだ、

『利用するとかしないとか、難しい考え方すんな。仲間なんだから頼つて当然だろ？ もっと気楽に考えよつぜ』

と。

そのおかげで、俺は仲間達とは何も遠慮せず共にいることができる。

「詭弁だな

「やうかもな

すぐに理解してもらえるとは思わない。  
けど、いつかクリスにもわかつてほしい。

「俺は俺の信じる正義を田指すだけだ」

「……ふん、自分はお前が正義を田指しているとは思えないけどな

それからは、終始無言で寮まで帰る一人であった。

「ただいま」

「……ただいま」

「おひ。 おかえり」

大和に出来迎えられるが、クリスはスタスターと自分の部屋に行つてしまつた。

「……なんかあつたのか?」

「いや、ちよつとな

大和に事情を説明する。

「ああー……クリスが相手じゃしょうがない。俺は士郎の護るモノ

の為なら何でも使つていいと思つけどな

「む、間違つちゃいないが、なんかやな言い方だな」

「でもさ、小さい頃よく特撮ものとか見てて思つたんだけどさ。正義の味方がだから正々堂々と戦うのはいいけど、もうちょっとズルい手を使えばもっと被害が防げるんじゃないかと思うことがあった」

「まあ、それは確かに」

子供の頃ならいざ知らず、今の俺が特撮ヒーローの立場であつたら効率のいい方法を選ぶだろう。

大抵の特撮ものでは、人間大の怪人を倒した後にその怪人を巨大化させる能力もしくは方法を持つ怪人が現れ巨大化させ、最終的にロボットで倒すというのがセオリーだ。

だけど俺から言わせてもらえば、巨大化させられるのは分かつていいのだから、あらかじめそのことも視野に入れ、怪人を巨大化させに来た怪人の方を優先して撃退する。

そうすれば、それ以降敵は怪人を巨大化させることはできなくなり、その後の被害も減る。

「それに、本当に悪質な手は土郎は使わないだろ？」

「当然前だ。卑怯な手もあくまで手段として身に着けてはおくだろうが、実際に使うかと言わればできるだけ他の方法を考えるさ」

「だから俺は土郎が好きなんだよ」

大和は冗談を混ぜて言つ。

だったら俺も、冗談で返そ。

「ありがとう。京に殺されたくないから、お友達で」

「ちっ、フラれた。まあいいや、クリスの事は早めになんとかしつけよ」

「ん、頑張る。この連休の旅行中には何とかするわ。その時は力を貸してくれ軍師」

「了解、正義の味方」

お互い軽口をたたき部屋へ戻った。

翌日、やはりクリスの機嫌は悪かった。昨日の今日では無理もない。今クリスに話しかけても機嫌は治りそうもないでの、今日はおとなしく旅行の準備に徹するとしよう。

朝から半日かけて必要な物を買いそろえる。

長い間旅をしていたからそんなにからないとと思ったが、思いのほか時間を食ってしまった。

寮への帰り、河原を走るモモ先輩とワソ子を見つける。

「各地を転戦し名を広め見識を広め、何もない荒野をお姉様と走っていく。ロマンよね~」

「化粧つ氣のかけらもないな」

「いいじゃない。内面を磨く時期だと思えば。それに、人生経験高い方がいい女になるとと思つ」

どうやら卒業後の事を話しているらしい。

それにも、ワン子からあんな言葉が出よつとは。知らぬ間に成長したんだな……。

子供はいないうち、娘の成長を喜ぶ父親の心境が分かる気がする。

「おー、ワン子の口からそんな言葉が出るか。誰か気になる奴でもいるか?」

「ええ、いるわー!」

なん……だと!?

父さん許さんぞ!—!

「何つ……どこのどこのだ!?」

流石のモモ先輩もびっくりしてくる。  
気持ちはわかるが、モモ先輩。

「お姉様よー!—!」

「ー? つ、い、妹に告白された……」

「マジかよ!—?」

「姉と妹では我慢できなか?」

「ええ。次の段階に進みたいわね」

さらば、真剣かよつー!?

「禁断の果実か。食べてみるのもありかもしれん。受けは性に合いそうにないから、攻めでいいか?」

いやいや。そこは止めようよモモ先輩。姉として。鍛錬の邪魔はしないつもりだったが、このままワン子を百合の花が咲く乙女の花園へ行かせるわけにもいかないと思い、2人を止めようとした瞬間。

「アタシがなりたい関係はね……せいーー！」

突如ワン子の鋭い正拳がモモ先輩を襲う。だが、モモ先輩はワン子の拳を視認してから、驚異的な反射神経でガードした。

「強敵と書いて、とも。前に言ったわよね、アタシがお姉様のライバルになるつて。……アレ、本気だからね！　じゃ、先に帰つて川神院の人と組手してくる！」

自分の言葉に照れたのか、ワン子は言つだけ言って走つて行つた。モモ先輩は、一人河原に残される。ま、俺がいるけどね。

「本気、か……」

「む？　様子がおかしいな？」

「…………そろそろアレを言う時期が来たな……」

アレって一体なんだろ？

「ところで、美少女の会話を盗み聞きとはいって身分だな士郎

「気付いてたのか」

ばれてしまったのなら仕方ない（まあ、もともと隠れていたわけではないが）。

俺はモモ先輩に近づく。

「アレって一体なんだ？」モモ先輩

「お前には関係のない話だ」

「関係なくはないだろ？」モモ先輩もワン子も、俺の大切な仲間だ

おそらくは結構深刻な話だ。

だけど、いや、だからこそ力になれるのならなりたい。

「……悪かった。でもな、こればっかりは川神院とワン子の問題だ。  
いずれ……話せる時が来るまで待つてくれ」

「……分かった」

「じゃあな

「ああ」

河原を歩くモモ先輩の背中を見送る。

この時俺は、モモ先輩の言っていたアレであることをじて、  
思いもしなかつた……。

## クリスとの亀裂（後書き）

原作を知ってる方は、物足りなさがあるかもしません。が！原作通りに進めていくと、終わりが見えないんですよ！省けるところは省かないと！

とまあ、こんな感じでクリスと士郎を衝突させ、ワン子のアレがアレになるよう伏線を入れ、とりあえず今回の話は終了。次話はなるべく早く更新できるよう頑張ります！

とりあえず来週中には……！！

それでは、また次回…！

箱根旅行1日目 ～覗きは男の浪漫～（前書き）

眠いです。

## 箱根旅行1日目 ～覗きは男の浪漫～

パンパンパンパンパンパン

時刻は四時。田覚ましを止め、布団から出る。今日は仲間達との箱根旅行。家を出るまでに鍛錬と準備を終わらせなければ。

「……よし、こんな感じか」

手際よく畳はんの仕込みをする。

これだけ下ごしらえをしておけば、後は起きてきたまゆつちと京に任せて大丈夫だろう。

俺は日課の走り込みの為、河原を田指す。

「おはよーー！」

「おは、おはよウソ子！」

今日も新聞配達をしていたワン子と出合へ。

「今日は楽しみね」

「やうだな。遅刻するなよ？」

「大丈夫よ！ 昨日のうちに準備してあるから」

「ん、なら安心だな」

ワン子は生活面ではしっかりしてるから、心配は杞憂だな。  
ま、モモ先輩はどうか知らんけど。

「じゃ、後でな」

「んー、じゃーねー」

新聞を抱え、3つのタイヤを引き走つていくワン子。  
あれだけ頑張ってるんだ。きっとワン子は川神院の師範代になると  
いう夢を叶えることができるだろう。

「……頑張れよ、ワン子」

川神から箱根湯本までは電車で1時間30分。

川神駅から“特急踊り漢”に乗れば一本だ。

風間ファミリー全員、10人で騒がしいながらも無事箱根湯本に到着。

本来なら、ここからバスで山の上にある旅館まで行く予定だったの  
だが……。

「アタシは山の中を走って旅館まで行きまーす

1時間30分も電車で大人しくしてたのが我慢できなかつたのか、  
ワン子が山を走つて旅館まで行くと言いました。

つーか、何でわざわざ公道じゃなくて山道を行こうとするかな。

「今日のノルマは私達十分こなしたろ?」

モモ先輩がそう言つとこによ、朝俺と別れた後、しつかり鍛錬をしてきたという事だらう。

「まだまだ。駆けて駆けて駆けまくるのよ! 勝負よクリ、ピッちが先に旅館までたどり着けるか」

「いいだらう。自分もノルマはこなしたが、そこまで言つなら相手にならう」

ワン子の挑発に乗り、クリスまで山道を走ろうとする始末……なんでさ。

そうこうしているうちにバスが来る。

「荷物は持つていつていやる。ほらお前ら、バスに乗り込めー」

ワン子とクリスの荷物を持つてモモ先輩がバスに乗り、皆もその後に続く。

ワン子は言わずもがな、クリスもどこか抜けているところがある。心配だ。俺は……

「悪い大和、荷物頼む」

「了解。これ旅館までの地図、お前も大変だな

こうなることも予想していたのか、大和は俺に地図を渡し、バスへと乗り込んでいった。

「はあ……強化、開始」

さて、山を駆ける武士娘と騎士娘を追つとしますか。  
体に強化の魔術をかけ、ほぼ獸道と言つても過言ではない道を駆け  
抜ける。

走り続ける」と5分ほど、よしやく一人の後姿をとらえる。

「……どれだけ早いペースで走ってるんだよ」

強化してこの状態で、追いつくまでに5分もかかるとは。  
俺はせらにスピードを上げ、2人に並ぶように走る。

「あ、土郎も来たのね！ やっぱり持つべきものは修行仲間だわー！」

「む……シロウも来たのか」

俺の登場で喜ぶワン子と、一昨日ではない元気、多少の西脇  
らしさを見せるクリス。  
ま、しようがないか。

「一応な。道に迷われても困るし」

「平気よー。そこまで馬鹿じゃないわー！」

意氣揚々と言つて先頭に飛び出すワン子。

「わうその時点では違うからー。やつちじやないからー！」

「フッ、やはり所詮は犬だな。自分につこう！」

ワン子とは違う方向へ行こうとするクリス。自信満々に行くのはいいんだけど……。

「いや、お前も間違ってるからなクリス」

「むむむ……」

口を一文字にしてこちらを睨むクリス。俺は悪くないだろ。

「とりあえず俺が先に走るから、2人はついてきてくれ。結構本気でとばすから、2人の勝負にも影響はないだろ?」

「なんか、アタシたちが士郎より遅いって言われてるみたいだけど……まあいいわ! 勝負再開よクリ!」

「いいだろう。自分も異論はない」

ワン子は多少文句を言いたそうではあるが了承。

クリスもシロウが自分の馬に合わせて学園まで走り続け、決闘でも自分が敗北したことでの実力は認めているので了承した。

「そうだ、シロウ。さっきの事だが、自分は道を間違えたわけではない。あえて遠回りをしようと思つたんだ」

「ああ、さっき道間違えたことにしてたのか。  
頬を膨らますクリスが面白くて、俺はついつい笑つてしまつ。

「むー……本当だぞ」

「わかつた。それじゃあ行くぞ」

「ええ！」

「むー、ああ」

それから走ること一時間。ようやく旅館が見えてくる。  
旅館の前には、大和が待ってくれていた。

俺は両手の干将・莫耶を消し減速。大和の前で止まる。

「遅かつたな」

「ああ、意外に險しかったからな」

「2人は？」

「もう来るだろ」

振り返り2人の姿を確認する。

「そらああああ！ ラストスパートオオオツーーー！」

「絶対に負けん！！！」

白熱した様子で走る2人。まったく減速する気配はない。  
ちょっと待て。このままだと俺達にぶつからないか？

「大和……」

「 だが策はある。」

おお、流石は軍師。この状況を打破する策があるとは。

「悪いな士郎。この策が使えるのは俺だけだ」

「え？」

言葉と同時に大和の姿が視界から消える。

同時に体にはワン子とクリスが突っ込んできた衝撃が走る。  
吹き飛びながら俺が見たのは、京に抱えられている大和の姿だった。  
ブルータスお前もか……

「じゃねえ……」

体を空中で反転。態勢と整えて着地する。

「同時とはやるわね、クリ！」

「お前もな、犬」

お互い称えあう2人だが。

「まずは」めんなさいだろおが！」

スパーク と、小気味良い音を立てて俺の投影したハリセンが2人の頭を打ちぬく。

「何を……ー？」

「あわわわわー!?

鷹の様な鋭い目つきで睨む俺にクリスはたじろぎ、ワン子は震える。まつたく。競争心はいいことだが、もつと周りを見て行動してもらいたい。

「まあまあ、士郎落ち着いて」

「てゆーか、士郎だけなんでそんな草塗れ?」

大和と京は俺をなだめる為、仲裁に入る。

まあ、俺も本気で怒っているわけではないからもういいや。

「む、それは……俺が先頭を走ってたからだ。ほら、もういいからワン子もクリスも風呂でも行つてこい。大和と京しかここにいないつてことは、どうせ今自由行動なんだろ?」

「正解」

「はい、じゃ2人とも汗かいたからお風呂行こつね

「はい」

「あ、いや、自分は……」

「いいから(ズルズル)」

抵抗するも、ワン子共々クリスは京に引きずられていった。うむうむ。京とクリスも仲直りしたようで何より。

「……なんだよ？」

「からりをにやにや笑いながら見ていた大和に問いかける。

「いや、士郎はカツコつけだなと思つてな」

「は？」

「先頭を走つてきたから草塗れつてウソだろ？ お前ここに来た時、干将・莫耶持つてたじやん。大方2人の為に枝やら草やら斬り進んで道を造つてたんだろ？」

まさか、草塗れの体と干将・莫耶を持つてただけで見抜かれるとは思わなかつた。

流石の洞察力。伊達にせこい手を使つているわけではないな。

「まあな。でも真剣勝負をしてる2人が知つたら怒るだろ？ このことは黙つてくれ」

「了解。それよりお前も風呂入つてこいよ。待つてるから、あがつたらゲンさん達の土産選ぼうぜ」

「ああ。じゃ、行くつてくれる」

風呂に入つてさつぱりした俺は、大和と共に川神の皆の土産を買い漁る。

その後、皆が帰つてきたので夕食を取り、再び今度はみんなで風呂へ。

俺今日土産買つて風呂入つただけじやん！？

「ふういい湯だね」

「ああ、偶にはこういつのもいいな」

モロの感想に同意する大和。  
ま、2度目だけど皆と入るとまた違う感じがするからいいか。

「見ろ貴様ら！俺の筋肉美！！」

「少しば隠してよー グロいんだよガクトのはー！」

惜しげもなく肉体を晒し、あまつさえポーズまでとるガクトにモロ  
は突っ込まずにはいられない。

確かによく鍛えられた体だとは思う。けど、俺も男だ。そんなもの  
見てもなんも嬉しくない。

「土郎にちなんで、伝説の武器で言つといひのエクスカリバーだな、  
俺様のジュニアは！」

「俺にちなんでつて何さ！？ つーか、『約束された勝利の剣』な  
めんな！ お前のは破山剣だろ。一撃の威力はでかいが、使用でき  
るのは一度きり。ま、お前の場合はその一度すら使えるかわからな  
いけどな」

「んだと土郎テーマ。刀剣オタクが俺の知らない剣の名前出しあが  
つて。じゃあ、他の奴らはどうなんだよ？」

「そうだな……キヤップは切れ味が鋭く衰えない剣『絶世の名剣』。  
大和のは一撃で狙い穿つ魔の槍『刺し穿つ死棘の槍』。モロは…  
暗殺された時、坂本竜馬が抜かなかつたとされる刀『陸奥守吉行』  
『カイ・ボルグ』  
『ムツノカミヨシユキ』  
『テュランダル』

かな?」

つて、何で俺は伝説の武器に例えてチコ談義してるんだ?

「デュランダルか。く、カツコいいぜ! ! !」

「クー・フーリンの持つ魔槍か、悪くない

「陸奥守吉行つて……ねえ、抜かなかつた刀=鞘に収まつてゐつて事で、間接的に僕の包のこと示唆してゐるの! ? ねえ! ?」

3者3様ではあるが、喜んで? くれたんならまあいいか。

「そー言つ士郎はどうなんだよ?」

「俺か?」

そう聞かれるとどう答えたらしいものか?

つーか、今さらながら自分の息子を伝説の武器に例えるとか……うわ、恥ずかし! ?

「俺は……『<sup>カリバーン</sup>勝利すべき黄金の剣』かな?」

「カリバーンとは、やつぱ士郎はカツコつけだな。カリバーンは選ばれし王しか抜けない剣。つまり、自分の好きな女にしか使わないので、抜けないってか?」

「いやいやいや、大和下品。その表現は下品だから」

大和は勝利すべき黄金の剣の知識もあるのか。普通はエクスカリバ<sup>カリバーン</sup>

ーとカリバーーは混同しがちで、知つてゐる人は少ないんだが。  
にしても、モロの言う通り下品だ。だから言いたくなかったのに……  
…つたく。

「もういいだろ？　この話は終わりだ」

「やうだな、男共の局部の話なんてしてもつまらねえ。もつと健全な話をしようぜ。つーわけで、俺様は明日覗きをしたいぞー。」

頬を緩ませそんなことをのたまつガクト。

何故いきなりそんな話に？いやま、確かに男性器の話をしてるようは健全だけどもさ。

「そんなんではしゃぐのはお子様だぜ……なんて言つるのは素人だ！  
覗きたいなら覗け！」

「お前のその柔軟な考え方、俺様好きだぜ」

大和も乗り気なようだ。

まあ、俺も男だ。吝かではない。

「覗くつて言つても、姉さん達じゃないだろ？」

「無理無理。モモ先輩に察知されて終わる。それよりも、俺様調べて分かつたのよ。山の方にも旅館があつて、頑張ればその女湯覗けるかもしれん」

この旅館よりも低い位置の旅館……確かに山を駆けてくる途中に見かけたな。確かに、地形的にもあそこなら……。

「ネットで調べたらその旅館、明日から女子高生のラクロスチームが泊りにいくみたい」

さつきまで「機嫌斜めだったモロまで入ってきた」というかネットでつて、そんな情報どうやって調べた？

「ちなみに僕は参加しないから、頑張つて行つてきてね～」

「ちつ～！」の白状者め。だからムツツリつて言われるんだよ

「言つてるのは主にガクトでしょーが！～！」

そんな2人を横に大和は手を顎に当て、思案する。キヤップはおそらく参加しないだろうから、現状では大和とガクトのみ。

「土郎、お前はどうする？ ガクトだけじゃ成功率は50%……俺の策があつても精々65%がいいとこだ。だけど、お前がいれば成功率はもつと上がる」

「……」

俺は湯船から上がり、出口へと向かう。そして、2人に背を向けた状態で立ち止まる。

後ろからは、ゴクリと唾をのむ音。

「ところで大和、一つ確認していいかな？」

「……なんだ？」

「ああ、成功率を上げるのはいいが  
まつても構わんのだろう？」

別に、確実に覗いてし

いつもよりも芝居がかつた口調。一見すれば、馬鹿な会話に見える  
だろう。

しかし、大和とガクトは違つた。

「もちろんだ！」

「絶対に天国バラダイスへとたどり着こうぜー。」

鍛え上げられたその屈強な背中と、力強い言葉に。

「では、期待に応えるとしよう！」

一騎当千の力を得た気分になつた。

こうして、邪念たっぷりの旅行<sup>1</sup>田畠は幕を閉じた。



## 箱根旅行1日目～覗きは男の浪漫～（後書き）

今回の話はチ「です（おい、じらー）。冗談です、いや、冗談でもないですけど。今回は基本ギャグでした。ま、シリアル部分はルートが決まってからになるんじゃないですかね？」

とりあえず、次回の更新はちょっと遅くなる可能性があります。詳細は活動報告で明日にでも報告したいと思います。

それではまた次回！！

## 箱根旅行2日目 ～釣りつ！？ 軍人だらけの覗き大会～！ 裏切りもあるよ

お待たせしました、やつと更新です！

……ほんともつと早く更新したいんですけどね～。

忙しくって忙しくって。

ま、なるべく早く更新できるよつ頑張ります！

## 箱根旅行2日目 ～釣りつ！？ 軍人だけの観き大会～！ 裏切りもあるよ

旅行二日目。

空は快晴。爽やかな天氣だ。

女性陣が着替えている間、男性陣は釣りの手続きをして竿やバケツ等を借りてくる。

「男衆お待たせー。さあ、行きまっしょい！」

元気のいいワソ子の声。

その後に続き、ぞろぞろと女性陣がやって来た。

「ナイスタイミング。ちょうど釣竿とか借り終えたところだ」

「本当だ、立派な竿だね。触つていい？」

「この、俺が手に持つてる釣竿なら触つていい」

「チツ、大和のいけず」

いつも通り、京と大和の夫婦漫才も絶好調だ。

「夫婦とはわかってるね士郎。特別にこの天帝ハバネロカイザードリンクをあげよう」

「いらねえよー！」

つーか、また人の心読みやがったな。

恐るべし恋する乙女。あ、いや、恋する乙女じゃなくて、京曰く「愛を知る乙女」だったか？

「一応確認しておけば、釣るのって魚？ 女？」

「女って何ぞ！？ 魚だよ！」

女を釣るつて、それもはや女の発想じやないよねモモ先輩？  
でも、実際それができるからこの人は恐ろしい。

「はいはい。遊ぶ前に土郎がツツコみ疲れちゃうからそろそろ行こ  
う」

大和のおかげで何とかその場は收まり、ようやく川へと出発できた。

そして、河原へ到着。

皆思い思いの場所で釣りを始める。

まあ、モモ先輩とワン子、そして京の3人は格闘修行をした森の中へ行つてしまつたが……。

「悪いなまゆつち」

「い、いえいえ。お、お任せくださいー！」

「……ん？」

そろそろ俺も釣りを始めようかと思つてゐると、まゆつちが微妙に震えながら虫を針に着けようとしていた。なぜか自分の釣竿ではなく、クリスの釣竿に。

クリスは にこにこ してゐるが、まゆつちの震え様……どう考へても虫が苦手なのに無理してゐるよなあ。

「 投影<sup>トレース</sup>、開始<sup>オン</sup>。クリス、まゆつち、生きてる虫は針に着けずらいだろ？ よければこれ使つてくれ」

士郎が差し出したのは、数種類のルアー（もちろん士郎の投影品）。

「ああ…… ありがと」

「あ、ありがと」わざわざ…」

それを見たクリスは少し遠慮がちに、まゆつちはほつとした様に受け取る。

クリスの反応……まあ、だいぶ落ち着いてきたか。でも、まだまゆつちなさがある。

早く仲直りしないとなあ。

「釣れてるか？」 愛しい仲間達よ

と、しばらくしてモモ先輩が戻ってきた。

「あれ？ ワン子ともえもえ京たんは？」

「いない時だけ京をいじつてやるとか、サドだな大和」

「まつたくだ、このサド軍師」

ガクトの言葉に俺も頷いて同意する。

「あの一人は組み手に入った。後は好きにやらせるぞ」

「京がどんどん素手で強くなつていく」

……確かに。

大和の言う通り、京は素手でもかなり強い。  
その理由が大和を護る為、というのがまあ残念といえば残念だが、  
修行をしている京は真剣そのもの。

呆れを通り越して、もはや感嘆すら覚える。

「ははは、無理矢理襲われる覚悟はしておけ。そして、ボロボロになつて泣いてる大和を、私がより激しく襲うとかどうだ？……なんかソソられるな？」

「返り討ちにして姉さんを泣かせてやるよ」

やめておけばいいのに、大和は言うだけ言ってその場から全力で逃げ出した。

逃げるくらいなら言つなよ。

「んーそういう負けず嫌いなところ好きだぞ。30秒待つてやる！  
逃げる逃げるー！」

「ま、大和もモモ先輩も楽しんでやつてるみたいだしいか……ん  
？」

その時、俺達の周囲の林の中から複数の人の気配を感じた。

見れば、全力で逃げていた大和も立ち止り、大人しくモモ先輩にまつっている。

「土郎ー！ 場所ー！ あと、どれくらいだー？」

モモ先輩も気づいたらしく、大声で俺に聞いてきた。

おそらく周りに隠れてるやつらの場所と人数だろうけど、そんな大声出したら意味ないだろ。

ま、といいつつ既に場所と人数は確認済みである。迷彩服を着てはいるが、魔力で強化したこの目はしっかりとその姿を捉えている。

「川の向こう岸に分散して18人、こっち側の森に12人。ワン子と京が修行してる方におそらく1人……あと、上空2？ 先からヘリが一機来てるな」

「土郎、お前ワン子と京の方へ行け。私は川の向こう側の奴らを狩る。こっち側のはクリとまゆまゆで充分だろ」

「了解 トレース 投影 オン 開始」

言つや否や、モモ先輩は川の向こうへ文字通り飛んで行つた。俺は投影したレイピアと刀を釣りをしてるクリスとまゆっちは投げる。

「む？」

「ーー」

クリスは ? を浮かべ地面に刺さったレイピアを見ているが、流石まゆっちは周囲の気配に気づいていたのか、刀を受け取り即座に

周囲を警戒し始めた。

「任せた！」

「お任せをー！」

「む？ 何だいったい？」

返事をするまゆつちと、未だ状況がつかめないアホの子クリスを後に、俺は森へと急ぐ。

一方その頃、森の中で組み手をしていた一子と京の下に、突如長身赤髪に片目に眼帯をした軍人が現れ、組み手に乱入してきた。

「京……」の外国人！ 相当鍛錬を積んでるー！」

「うん。強い……展開の速さに感つてられないね。迷つたらやられる」

一子も京も気を引き締め臨む。一子は天真爛漫に、京は冷静に鋭く。しかし、赤髪の軍人はその全てをあえて紙一重で回避し、力量の差を見せつける。

「中々やりますが……やはり、所詮野ウサギレベル。さあ、反撃されなさい！」

軍人は軽く飛び、必殺の蹴りを繰り出す。

「それはさすがに食らわない」

必殺の一撃を何とか避け、一子と京は軍人から距離を取った。

「京、ここからは真剣マジで行くわよ！」

「ん。本氣だす」

「そりだ！ 可能性を捨てちやいけない」

怯むことなく向かってくる一子達に、軍人も嬉々として応える。

「川神流・蛇屠り！」

一子は体制を低くし、相手の足を刈り取るかの様な一撃を放つ。

「おっと危ない、」のまま踏み潰して……

足元への一撃を跳ねて回避した軍人は、そのまま空中からしゃがみ状態の一子に蹴りをくらわせようとするが、

「鳥落としー！」

その刹那、しゃがんだ“タメ”を利用した一子のサマー・ソルトキックが炸裂する。

「対空！？ あの体勢から馬鹿なつ……があー…？」

蹴るというよりも、斬ると形容するに相応しい鋭い蹴りが、軍人の体を蹴り飛ばし、

「次は私！」

京が着地の瞬間を狙つて襲い掛かる。

「チイ！」

接近しようとした京を軍人は突きで迎え撃つが、京は弧を描くように軍人の腕を弾き上げ、

「！ ひせせ！」

綺麗な背負い投げが決まる。

だが、その一撃が軍人を本気にさせてしまつた。

「... Hasen (野ウサギ達め)」

軍人は静かに立ち上がり、鋭い目つきで一子と京を捉える。

「」ああ（狩つてやる）」

二十一

軍人の雰囲気が変わったのに気付いた2人は、同時に攻撃を仕掛け  
る……しかし。

「「」の手応え……木？」

「トンファーカ！」

どこから出したのか、軍人はトンファーを巧みに操り2人の攻撃を止めたどころか京に狙いを定め、ガードごと吹き飛ばした。

「つ……！」

「京！」

「……まずは1人」

京の動きを止めた軍人は、狙いを一子へと変える。

「Hasen Jaagd—！」

「くつ……ーーー」「」のトンファーの乱撃、隙が無……」

「トンファーキック！—！」

「しまつーー？」

トンファーばかりに気を取られ、軍人の蹴りに反応が遅れた。今までで一番鋭い蹴りが、一子の無防備な脇腹を襲う。

次に来る痛みを想像しギュッと目を閉じた一子だが、一向に蹴りはやってこない。

「……？」

そつと目を開けてみるとそこには 頼りになる仲間の背中があつた。

士郎は森を駆ける中、多少の疑問を抱いていた。

何故、これほどの人数に俺達風間ファミリーが狙われているのか。今までも、モモ先輩が狙われることはあった。（もちろん決闘という形式だし、モモ先輩は全て返り討ちにしていた）

だが、俺達全員を囮むようなやり方は初めてだ。

それともう一つ。奴らの来ていた迷彩服と、先ほど飛んでいたヘリには見覚えがある。

あれは確か、ドイツ軍の……

「……見つけた！」

そこまで考えたところで、森の中にワン子と京の姿を見つける。それと同時に、赤い髪に眼帯をつけた軍人に京が吹き飛ばされた。

「なつ！？ なんでアイツがあんなこと…」

考へている暇はない。

京がやられ、今度はワン子に攻撃が集中している。

「<sup>トレース</sup>  
<sup>オフ</sup>強化、開始！」

士郎は自分の体に負荷が掛かるのも構わず、大量の魔力を身体に流し急速。

腕や頬を木の枝で傷つけながらも走り続け、ワン子へと迫る軍人の蹴りの間に滑り込む。

「ぐつ！」

ミシリ と、骨の軋む嫌な音がした。

「なつ！？ お前は！？」

何とかワン子を護ることは成功したようだ。

俺の登場に驚く軍人を一睨みしてから、顔だけ後ろに向ける。

「無事かワン子？」

「し、士郎！？ ってあわわわ、士郎なんか怖い顔よ」

む、助けに来たのに怖がるとは失敬な。  
まあ、確かに怒っているのは事実だからしじうがない。

「勝負の途中で悪いが、ここからは譲つてもらう。ここははちよ  
とした知り合いなんだ」

「わ、わかった。京と少し離れた場所で見てるわ

ダメージを負った京を抱え、ワン子は距離を取る。  
それを確認してから、俺は構えているマルギッテに向き直った。

「ヒミヤですか。勝負の邪魔をするのは感心しません、下がりなさ  
い」

「真剣勝負なら邪魔はしないが、なら何故30人も軍の人間を連れてきた」

「それは……」

「それは私が説明しよう」

会話の途中で入ってきた男。

その男は、ある程度予想していた通り、ドイツ軍中将フランク・フリードリヒだつた。

「おーい無事かー？ ワン子に京」

そこへ、ちょうどモモ先輩と大和もやって來た。

どうでもいいが、何故無事の確認に俺の名前がない？

「いや、お前は頑丈だし大丈夫だろ？ てゆーかワン子と京に怪我させたら私がお前をボコボコにする」

「なんですかー！？」

「……あー、話を続けてもいいだろうか？」

「あ、すいませ「父様！」ん？ ク里斯」

「おおクリス、我が娘。今日も美しい……」

モモ先輩達やクリスの登場で話は脱線し、数十分後にキャップ達も合流してからよつやく話を再開することができた。

どうやら中将殿は、クリスから俺達風間ファミリーと旅行に行くと

いうメールを受け、心配で様子を見に来たとのことだ。

俺は子供がいないから分からないが、娘が旅行に行くだけで30人の兵と少尉まで連れてくるのは、親バカとしか思えない。当のクーリスは喜んでるし……。

しかも、マルギッテも2-Sに転入させるやつだ。そんなことでドイツ軍は大丈夫なのだろうか？

「では、そろそろ帰るとしようか

「おい。森の中にいたお前の部下30人、私とまゆまゆで軽く撫でていた。ちゃんと回収しどけよ

「何だと。私の誇る精銳部隊を？ マルギッテ、直ぐに確認を

モモ先輩の言葉にて、中将殿は慌ててマルギッテに確認をさせる。にしてもモモ先輩。よくドイツ軍の中将相手にそこまで偉そうに話せるな。

俺はいつも敬語なのに……キレた時以外は。

「……連絡不能。制圧されますね」

「そりゃ……本来なら、部下をやられて引き下がるわけにはいかんが、今回はこちらもマルギッテが襲いかかったようだ。互いに遺恨なしじょつ

遺恨なしだと？

ワン子と京に軽傷とはいえ怪我をさせておいて？

俺の仲間達を軍人で囮んでおいて？

「ま、こちらもバカנס中だしいいか

モモ先輩は気にしていないようだが、『冗談じゃない。』

「では、帰るとじょい」

「待て」

帰らうとする中将殿を、俺は止める。

「何だね、エミヤ?..」

「今回の事は、モモ先輩もワン子達もあまり気にしてないようだから、俺は堪えよ。だけど、忘れるなフランク・フリードリヒ。次に奇襲のような真似をしたら、俺の仲間を傷つけたらその時はそれなりの報いを受けてもららう」

空気が凍る。

普段の俺とのあまりの違い様に、風間ファミリーの面々は息をのみ、俺の実力を知る中将殿とマルギッテは僅かに汗を搔く。しかし、そんな空氣も一人のＫＹによつて打ち消された。

「ひらシロウ! 父様を呼び捨てにするとまどいこいつ事だ! 偉そうに!」

クリスは怒っているが、こればかりは譲るわけにはいかない。

「いや、いいんだクリス。私が悪かったようだ。すまなかつたねエミヤ、そしてサムライガールズよ」

「謝罪します。すいませんでした」

中将殿は頭を下げ、マルギッテもそれに倣つた。

「では、今度こそ帰るとしよう。ヒリヤ、君のその相手の立場に怯むことなく、自らの正義を貫く姿を私は尊敬するよ。できれば、君の正義とはぶつかりたくないものだ」

「俺も、仲間の親と戦うのは御免です」

「ありがとう」と笑つて中将殿は上機嫌で帰つて行つた。

その後、気を取り直して釣り再開。

修行をしていた京とワン子も釣りに加わり、キャップは釣つた魚を川下の釣り人に売りに行つた。

そして、クリスは……

「……（キック）」

先ほどの一件のせいで、俺はずつと睨まれっぱなし。  
仲直りどころか、さらに仲が悪くなってしまった。

そんな状況を察してか、河原でバーベキュー（食材は元から用意していたものと、キャップが川下の人達に魚を売る代わりに物々交換してきたものを使用）をしている最中、キャップが盛大に切り出した。

「お前ら、楽しい旅行中に喧嘩なんかしてんじゃねーよ。お互いまつてるもんがあるなら、勝負でもしてスッキリさせりゃいいじゃねーか」

「お、それいいな。何をやるかは、平等に私とキャップで考えてやる。まあ、準備もあるし決闘は明日だな」

つてな感じで、キャップとモモ先輩の提案で、俺とクリスは決闘をすることになってしまった。

「はあ……」解

「わかりました」

まあ、いい考えも浮かばなかつたし、難しく考えずにはぶつかり合つことも必要か。

ちょっと心配なことはあるが、一度の決闘ぐらいなら耐えられるだろう。これも川神魂だ。

明日に決闘を控えた、2日目の夜。

「フツフツフツ。俺様出現、右良し左良し」

「安心しろ。周囲に人はいない」

旅館の一室。そこに、ガクト 大和 そして俺は集まっていた。  
あの計画を実行するために。

「覗きポイントは分かってるんだな?」

「1日目に調べ済みだぜ、俺様つてば」

ガクトと大和はやる気満々である。

「……」

「どうした士郎、脇腹なんて押さえて？ 心なしか顔色も悪いぞ？」

「いや、何でもない。大丈夫だ」

心配する大和に手を振つて答える。

そうだ、大丈夫だ。こんなのいつもの事じやないか。

「そうか？ なら兵は神速を尊ぶ。早速行こう」

「では冒険に出発だ！ 財宝を求めて！」

俺達は大いなる一歩を踏み出す。アヴァロン男の理想郷に向かつて。  
だが、その一歩はあまりにも過去な一歩だった。

「くくく。キイタゾキイタゾー」

川神百代が現れた！

「大変だ大和に士郎！ いきなりラスボスだ！ 一番いい装備を頼  
む！」

ガクトは怯んだ！

「これはまずい！ 気配殺してたな姉さん！」

大和は逃げ出した……しかし、逃げ切れなかつた！

「マジかよ！？ 命を懸けてメ ンテ使つても、ダメージを『』える  
どこのか無傷で立つてそつな相手だぞ！？」

士郎は混乱した！

「私も行こう」

「……はい？」

いきなりの発言に、俺達3人はアホみたいな声を出してしまつた。  
モモ先輩はなんて言つた？ 「私も行こう」？

それはあれですか？ よくある、世界の半分のあげるから仲間になれ的な感じの逆バージョンですか？

「私もねーちゃん達の裸を見る」

川神百代が仲間になりたそにこちらを見ている。

「ラスボスが仲間になりたいって言つてるぞ？」

「もし本当なら凄い戦力だぞ？」

「ふむ……」

もう一度モモ先輩の方を見る。……その目は輝いていた。  
川神百代を仲間にしますか？

はい  
いいえ

テテテテツテツテツテー

川神百代が仲間になつた！

「で、どうだ？ ビビード覗ける？」

「頼もしい味方がついたぜー！ うしだー！」

俺達は暗い山の中を進む。  
しばらく進むと、明かりと共に夜空へと立ち昇る湯気が見えてきて、  
女性の声が聞こえてきた。

「ポイント到着。ターゲットはラクロス部女子学生」

「ふりふりのピーチやメロンが並ぶ八百屋を堪能だ」

俺と大和は顔を合わせる。おぞらしく呟つて居ることは同じだらう。

( ( ) こり、頭おかしいんじゃないか？ ) )

「わあ、この茂みを抜けるとヒルドリダが……」

ガクトが茂みへ入ろうとした瞬間、

「え……？」

首筋に冷たい感触。

「残念だけど、そこまでだガクト」

そう。ガクトの首筋に剣を当て動きを止めたのは、何を隠そうこの俺、衛富士郎だ。  
もちろん、もう片方の手でモモ先輩の方にも剣を向け牽制している。

「土郎、テメハ……どうじうつもりだよ」

「どうじうつもり？ 長年の付き合いわからぬがガクト。俺は衛富士郎だぞ？ 覗きを阻止することはあっても、覗きをすることはない」

全てはガクトを止める為、一緒に覗くフリをしていたのだ。

「大和！ 何とかしてくれ！」

ガクトは大和に策を求めるが……

「……はい、ええ。すぐお願ひします。つと、悪いなガクト士郎が止める為についてきたのは分かつてたからな、俺は土郎側に着かせてもらつた」

「なつ！？」

そう。大和は俺の意図に気づき、早めに協力を申し出ていたのだ。

「モモ先輩！ モモ先輩は俺様の味方だよな？」

「あつたりまえだ！ 士郎、弟…… よくも邪魔をしてくれたな……  
！！ これは、6人ほどの人間がこつちにくる！？ 大和、お前か  
！」

「悪いね、姉さん」

さつき大和が電話をしていた所。それはこの旅館だ。

たのだ。

「ちう、もう覗く暇はないな。なら、面倒が起る前に！」

# 一瞬の油断。

ガクトの3人は、5月の冷たい川の下流へと投げ捨てられた。

しまつた～～～！？

「マジか~~~~~！？」

こうして、旅行2日目は冷たく幕を閉じた。



箱根旅行2日目 ～釣りつ！？ 軍人だらけの覗き大会！！ 裏切りもあるよ

はい、前回のノリノリ士郎君とは一変、やつぱり士郎は士郎なのでした。

騙されただろう？……え？ そんなことない？ ああそうですか。にしても、クリスと士郎の関係がさらに悪化したね大変だー……。何にしても、次回の決闘で2人の仲は改善されるでしょう！

それではまた次回！！

## 万物、悉く切り刻め（前書き）

忙しすぎて中々更新ができないものですねー。  
今年の仕事の休みは後2回のみか……。  
今年中にもう一度更新できるだらうか？

更新できるかわからないので先に書かせておきます。

読んで下さっている方々、良いお年を！

## 万物、悉く切り刻め

旅行三田田。

旅館の朝食はバイキング形式で、女子メンバーはすでに食事を始めた。

「にしても、男子メンバーの皆さんはまだ寝てるんですかね？」

いつまでたっても現れない士郎達に、まゆつちは心配そうに言った。

「どうせ、キャップやガクト辺りが起きないんだろう。ちゃんと士郎達が起こしてくれるわ」

「私、ちょっと様子を見てきますね」

百代は大して気にした風ではないが、まゆつちはやつぱり心配だったのか、自分の食事を終えてから様子を見に席を立った。

その頃、男子の部屋では……

「はい、旅館の人へ救急セット借りてきたよ。ついでに氷ももらつ

てきた」

百代の予想とは違い、全員が起きて忙しなく動いていた。ただ一人、士郎を除いて。

「悪いなモロ……痛てて」

「ほら士郎動くなつて。今応急処置するから……ガクト、モロがもらつてきた氷をもう少し小さく碎いてくれ」

「任せろ、オラア！」

大和の指示に従い、己の握力で氷を碎くガクト。

武士娘たちの存在で隠れがちだが、ガクトのパワーは半端ないのである。

その力は、握力計の針が振り切るほどだ。

「とりあえず、士郎は氷で脇腹冷やしとけよ」

「ああ」

何故士郎がこんなことになつてているのか。

それは昨日、ワン子を庇いマルギッテの蹴りを受けたのが原因だ。無茶な強化で加速した為、士郎は防御が間に合わず無防備な脇腹で攻撃を受けてしまった。

おそらく、それで骨に輝が入つていたのだろう。それなのに、昨夜川に投げられた時に大和とガクトを庇うように川に落下し、更に悪化してしまった。

「よし、氷でだいぶ腫れも引いたな。湿布を張つて……大和、包帯

取ってくれ

キャップは妙に手慣れた手つきで、士郎に包帯を巻いていく。

「にしても凄いなキャップ。いつ怪我の処置の仕方なんて覚えたんだ？」

「前に出前のバイトで行つたえーと、じ、じ、じん……なんとか堂とかいう病院の先生と仲良くなつてよ。冒険家を目指してるって言つたら、「応急処置ぐらい出来ないと危ない」って教えてくれたんだよ。そういうやあの先生、自分は坂本竜馬と友達だとか言つてたな。その話真実味があつて面白かったし」

坂本竜馬と友達？ なんか変な先生だけ……おそらく相当腕の立つ医師なのだろう。

しっかりと固定されるおかげで、痛みもかなり和らいだ。この分なら、無茶な動きでもしない限り大丈夫……な筈。

「にしても、本当にそんな傷でクリスと決闘するつもりか？ 何なら口をすりすりよう俺が策を弄してもいいけど？」

大和は心配そうに言つてくれるが……それはできない。

「いや、一度決めたことだ。それに、昨日キャップが言つた通りいつまでも喧嘩しているわけにはいかないからな。策を弄するなら、クリスが俺に遠慮せず戦えるように誘導してくれ」

「……わかった」

「かーつー！ なんかいいなそういうの。燃える展開だぜ！」

「“男”だな士郎。俺様そういうの好きだぜ」

「うん。本当は止めた方がいいのかもしないけど、僕も応援するよ頑張って！」

長年の付き合いあってか、監禁するようなことは言わなかつた。寧ろ応援してくれていて。

後は、もう一人にも口止めしておくか。

「と、言うわけだ。まゆっちも手は出さないでくれよ

「はあうつー？ も、氣づかれてましたか

入り口で隠れていたもう一人の人物。まゆっちに声をかけると、驚いた様子でおずおずと出てきた。

まあ、気づいたのはホントについたきなんだけどな。

俺が怪我をしたままクリスと決闘すると言つた瞬間、まゆっちは動搖したのか気配が僅かに漏れた。

それがなければ気付かなかつたかもしれない。

「で、ですが怪我をなされてるのでしたら無茶はしない方が……」

「分かつてる無茶はしないわ。けど、聞いてたと思つたのままでつてわけにもいかない。本当にマズイ時は止めるから、それまでは怪我の事は黙つてくれ

「で、でも……」

「頼む」

「……」

優しいまゆっちの事だ、俺を止めよといするのは分かつていて。だが、俺は大和の様に上手く相手を言いくるめることなんかできない。俺にできるのは真剣に頼むことだけだ。

「わ、わかりました。でも、無理だと思つたら絶対にやめてくださいね」

俺の真剣さが通じたのか、まゆっちは真剣な顔で了承してくれた。

「ああ、ありがとう」

その後、何事もなかつたかのように朝食を済ませ昨日釣りをした河原へと移動した。

現在午前九時。俺とクリスは河原で対峙している。

「これより、クリス対土郎のタイムマンを行づば」

キャップの言葉に、俺とクリスは同時に頷く。

「ジャッジ兼司会進行は私とキャップだ。四露死苦」

ヤンキーっぽくふるまつモモ先輩は放つておいつ。

「怪我をしてると聞いたが？」

「問題ない。激しく動くとちよつと痛むだけだ。一日中戦い続けたりでもしない限り大丈夫だ」

「そうか」

クリスは心配そうに聞いてきたが、大和からも説明が入っていた為か割とすんなり引いた。

助かつたよ大和。戦いに遺恨は残したくないからな。

決闘方法はキャップとモモ先輩が“川神戦役”の縮小版をすることに決めた。

“川神戦役”とはくじを引き出た種目で勝敗を決め、先に5勝した方が勝ちとなる。

くじの内容は武力が必要なものから知力が必要なものなど様々なジャンルのモノが入れられているので、あまりにもくじ運が悪くない限り、公平に勝負ができる。

本来は出た種目に対し強い奴が出る団体戦だが、今回はタイマン勝負。個人の総合力が試される。

じゃんけんの結果、俺が勝ったので先にくじを引かせてもらう」とになつた。

引いた紙をモモ先輩に渡す。

「おっ！ 士郎、お前面白いのを引いたな」

「？」

「内容は……じゃーん！ Chain Death Match！」

「……はあー？」

チェーンデスマッチってあれか？ 鎖で互いを繋いだ状態で戦うあのチェーンデスマッチか？

「ふふつ、Chain Death Matchか。腕が鳴るな」  
クリスはやる気満々といった感じだ。  
やだ、何この娘。こわい。

「へへ」

何かモモ先輩は嬉々として地面に円を描き、鎖の準備を始めている。

「モモ先輩」

「ん、なんだ？」

「こ」の勝負は棄権する

「「はあー!?」「

いきなりのギブアップ宣言に、モモ先輩とクリスは同時に反応した。  
大和たち男メンバーは「やつぱりな」といった感じだ。

「見損なったぞシロウ！ 勝てない勝負と分かつた途端棄権するなんて！」

「いや、勝てないと分かつててあえて勝負するのは馬鹿だろう。一度きりの勝負で負けられない理由があるならともかく、五本先取制なら勝ち田のない勝負は即座に切り捨てるべきだ」

ガチンコの肉弾戦なら俺が勝てないのは目に見えている。

耐久力にはそれなりに自信があるが、怪我した今の状態でクリスの

攻撃を耐えきれる自信はない。

もし耐えられたとしても、相手が悪党でもなければ、殴るにたる理由がない女の子を殴るなんて俺にはできない。

「それでもやりたいってんならいいけど、俺は何もしないぞ。無抵抗の相手をリンチするのは騎士道に反するんじゃないのか？」

「むむむ……いいだろ？、今回だけは見逃してやる。だが、もしまだ戦わずして負けを認めるようなことがあれば、自分はシロウを許さないぞ！」

「…………了解」

やれやれ。今回は何とかなったが、次は棄権させてくれそういうにな。そんなことをすれば仲直りビービーなくなる。これは、そういうくじが出ないよう祈るしかなせそうだ。  
俺、運悪いんだけどな……。

「気を取り直して、まあ引けクリス！」の俺が作ったくじを…

「ああ、わかった」

キヤップの持つくじ箱に手を入れるクリス。にしてみこの2人、テンションが真逆だな。

「引いたぞキヤップ。読み上げてくれ」

「よつしゃー！ 第一回戦は……料理対決！」

よかつた料理対決か。それなら傷を心配することもないし、棄権する理由もないな。

でも、材料はどうするんだ？

「ちなみに材料は今日も今日とて、川下で釣りしてたおっちゃん達にもらつてきた」

並べられる野菜や肉類と釣つたばかりであろう魚。確かにこれだけ材料があればそれなりの物が作れるだろ？

「ちなみに審査をするのはこの3人だ。まずは偏食代表島津ガクト

「好きな食べ物は肉、飲み物は肉汁です、よろしく！」

いや、体に悪すぎんだろう。

「続いて食事はバランス第一。川神一子

「バランスのとれた食事は力の源。おいしくてバランスのいい料理を期待するわ」

うん。ワン子は健康的だ。

「最後は普通代表師岡卓也」

「普通代表って何！？ もうちょっとマシなのがあったでしょ！？」

普通代表とは哀れな……。でも、モロだけ好みを聞けなかつたのは痛いかな。

クリスの料理の腕がどのくらいかは分からぬけど、それぞれの好

みがわかつてれば料理も決めやすいんだが……。

「んじゃ、制限時間は30分、作つていい料理は一品のみ。料理対決はじめ!」

キャップの掛け声と同時に士郎とクリスは料理をはじめる。2人とも食材を選び持ち場へ戻る。ちなみに用意されているのは食器類と調理器具のみ。

必然的に地面にまな板を置いて食材を斬らなければならないわけだが……。

「トレイス投影、オン開始」

士郎は投影でテーブルを造り、流れるような動作で料理を進めていつた。

「おおい！ あればズルくないのか！？」

「そんなことないだろ?」

講義をするクリスを大和が止める。

「士郎は自分の能力を生かしただけだ。もしあれがズルいって言つんなら、例えば次のくじでレイピアでの戦闘とかいうお題が出た場合お前がずるいことになつちまつぞ?」

「む、むむむ……た、確かにそつ、か?」

クリスがそんなやり取りをしている間に、士郎の下準備は終了。後は飯盒で米が炊けるのを待つ。

…………それから數十分。

「「出来た」」

俺とクリスの料理が同時に完成。審査をしてもらつ為、審査員の前へと並べられた。（もちろん審査員が座つてゐるイスも、料理を載せたテーブル、食器類に至るまで士郎の投影品だ）

「それじゃあまずは士郎の料理からこするか。やつぱりしめは美少女の手料理がいいからな」

何やらガクトが失礼なことを言いながら、蓋をされた俺の料理を開ける。

それに倣い、ワン子とモロも蓋を開けた。

「おおーっと！ 士郎の料理は炒飯。無難に炒飯だー！」

うるさいぞモモ先輩。別に無難だつていいじゃないか。一品しか作れず審査員の好みに対応するには無難なものの方がいい。まあ、一工夫はしてあるけど……。

「美味めー！ ハの滴る肉汁が何ともいえねエー！」

「何言つてるのよガクト。野菜も豊富であつたりして美味しいじゃない！」

「うん！ 濃すぎず薄すぎず、絶妙な味加減！ 量もちょうどいいし美味しいよー！」

3人ともに好評のようだ。

ただ、同じ料理なのに「どうして」というも感想が違うのか？

「おつと、士郎の料理は好評の様だが何故三者三様の味の感想なのか。どうこうことだもう一人の審判のモモ先輩？」

「うん。これは私も食べてみないと分からなになつ（ひゅん）」

吉つが早いが、モモ先輩はそれぞれの皿から一口ずつ炒飯を食べていった。

「早つ！？ で、モモ先輩どうだつたんだよ？」

「うん。美味しかつた」

「味の感想じゃねー！ バツキヤロウー！」

いやいやいや。落ち着けよキャップ。

なんか口調がバイト先の店長みたいになつてゐるぞ？

「もつといいや。じゃー解説のまゆつち、説明を頼む」

「ふえつ！？ わ、わわわわ私が解説ですかー？」

「大丈夫だまゆつち。まゆつちならやれるつて。自分が信じられないんなら、まゆつちを信じるオラを信じる」

「わ、わかりました松風。黛由紀江参りますー！」

急な振りに慌てるまゆつちだが、腹話術……もとい、付喪神の松風が喋つてゐるという事は意外に余裕があるのか？

「えとえど、おそれく士郎さんが作った炒飯は全て一子さんが今食べている炒飯と同じものだつた。しかし士郎さんはその後に肉だけを炒め盛り付け、炒めた時に出た肉汁をモロさんに少量、ガクトさんのに残り全てをかけたのだと思われます。その為、味の濃さから油っぽさまで三者三様の味になつたのではないかといかかでしょうか？」

「正解、さすがだなまゆっち。結構ばれないように作つたつもりだつたけど、見破られるとは思わなかつた。でも工夫はもう一つあつてさ、実は量もそれぞれ違う量で出してるんだ。次にクリスの料理を食べなきやいけないからな。それぞれ満腹にならず、かといつて足りなくもない量になる様に」

ま、これはよく知る仲間同士だからこそできる話だけど、「運も実力の内」だからな。

「おい。そろそろ自分の料理も食べてほしいのだが……」

「おひと忘れてた」

おい、司会進行。

「んじや、次はクリスの料理だ」

キヤップの合図でガクト、ワン子、モロの3人は再び自分の前に並べられた皿の蓋を開ける。

「　　」

だが、その瞬間3人は凍りついた。

「ふふつ、どうやら自分の料理に声も出ないようだ。料理ははじめ  
てだつたが、意外に簡単だつたなあ」

「「「士郎の勝ちで」」

「なんでだああああああ！」

笑顔から一転、3人のジャッジでクリスは仰天する。  
なんで？ そりやそうだろう。何故ならクリスの料理は  
ガクトの前の皿。

油揚げの中に牛、豚、鳥の肉がぎっしり詰め込まれている……生で？  
ワン子の皿。

油揚げの中に様々な野菜がぎっしり詰め込まれている……生で？  
モロの皿。

油揚げの中に米が入っている……生で！？

「一応聞くけど……クリスの作った料理は？」

「おいなつさんだ」

「「「ふざけんな！……」」

静かな河原に風間ファミリー全員の声が木霊した……。

二回戦、料理対決は当然の如く士郎が勝利。  
続く三回戦目、士郎が引いたお題とは

「大事な物なら護つてみせろ！ 撃墜対決！！」

「撃墜対決？」

撃墜対決。それは旅館に置いてあつた古いインベーダーゲームを見てキヤップとモモ先輩が考えたらしい。

モモ先輩が次々と投げてくるそこら辺の石を撃墜する勝負。そして「大事な物なら護つてみせろ」の言葉通り、俺とクリスの後ろには人質もとい、ゲームでいえば残機ともいうべき存在（ファミリーの中からランダムで一人）が一人立つていて、モモ先輩の投げる石を落とせなければ自分の後ろにいる仲間に石が当たるというシステム。当然人質はその場を離れてはいけない。

残機は1なので、当然一度でも仲間に石が当たってしまえばその時点で負けとなる。飛んでくるのは石なので、今回の勝負は武器の仕様が可。

「クリス、武器は？」

「大丈夫だ。今日は部屋からちやんとレイピアを持つてきた」

部屋から持つてきただつことは、この旅行に持つてきてたのかよ……。

まあ、まゆつちは常に刀を携帯してるから何も言わんけどさ。

「あ、ちなみに土郎。魔術を使うのはいいけど、伝説の武器を使うのは禁止な」

「了解。（宝具の仕様は禁止か……）」

「じゃあ、私が石を集めてきたら始めるから準備しどけ（ひゅん）……ただいま」

「はええ！ 準備も何もねえよー！」

そんなこんなで、「大事な物なら護つてみせろ！」**撃墜対決！開始。**

ちなみに、俺が護るのはガクト。クリスが護るのはワン子になつた。  
……別に不公平だなんて思つてないぞ。

「行くぞ2人とも！」そらそらそらあー！」

「せいせいせいせえええええいーーー！」

卷之三

降り注ぐ石飛礫。

クリスは全てをレイピアで突き落とし、俺は黒鍵を投影して撃ち落とす。

「（結構な数と速さなのに全て突きで落とすか……）これは長期戦になるか？」

士郎は無数の石飛礫を一度に両手で投げられる限界量である6本の黒鍵をうまく使って撃ち落としているが、クリスは一本のレイピアで突き落としている。そのことに、士郎は純粹に感心していた。

「けど、長期戦になつたら不味い……かな」

さつきから黒鍵を投げる度に脇腹に軽い痛みが走る。  
キヤツプの処置で気にならなかつたが、結構酷い怪我だったようだ。

「2人ともやるなー。そろそろレベルを上げるぞ」

「「レベル?」」

俺とクリスが疑問符を浮かべるとほぼ同時に、モモ先輩の投げてくれる石の大きさが一回り大きくなる。

「なつー！」

「むー！」

それを何とか迎撃する2人。  
だが、先ほどよりもキツイ。

「（大きさが一回り違うだけで、ここまで変わるか）」

それから数十分。

俺もクリスも未だに石飛礫を……いや最早モモ先輩の投げているモノは石などではなく、岩と呼ぶのが相応しい大きさのものになっていた。

その飛んでくる岩を、俺もクリスも全て迎撃している。

しかし、そもそも限界が近い。

石の大きさが変わる度、擊墜し落ちる石の位置が近くなっている。  
今では俺の足元に迫るまでに。

「いたつ、いたつ！ 痛いわよクリ！ ちゃんと全部防いでよー！」

「黙つていろ犬！ 迎撃するのが精一杯で、砕けた岩の破片まで気を使つてる余裕はない！」

「……」

ワン子を見ると、重傷といつよつな傷はないが所々が赤くなっている。

今のサイズの岩ならまだいいが、これ以上大きくなるようなら怪我をする可能性がある。

「ほら、またレベルアップだ！ このサイズの岩防げるものなら防いでみる！」

モモ先輩は、更に巨大なありえない大きさの岩を片手で持ち上げる。テンションが上がりすぎて、モモ先輩はおそらくワン子とガクトの事を忘れているし、危なすぎて他のメンバーも近づけない。俺は複数武器を投影すれば岩を破壊し、砕けた破片からもガクト一人なら護りきる自身がある。

だけど、レイピア一本のクリスでは……。

「……」

「ふつ……」

俺がワン子の方を見てからガクトに目を向けると、ガクトは不敵に笑ってポーズをとった。

「安心しろよ士郎。破片の石ころ如きでどうにかなる俺様の肉体じやねえ！」

「お見通しつてわけか。……悪い」

ああ。ほんとお前はガクト

「へつ、気にすんなよ正義の味方」

頼りになる。

迫る巨大な岩。まずは両手の黒鍵6本を投げる。当然のことだが、大岩は黒鍵が突き刺さってもビクともしない。当然だ、6本の黒鍵は楔なのだから。

「  
トレス  
投影、  
オン  
開始」

呪文と共に現れるのは、一振りの刀。  
ルール上宝具ではないが、侮るなれ。

この刀は代々大切なモノを護る為に振るわれ続けた守護の象徴。

「万物、悉く切り刻め

その名は。

「  
地獄蝶々！――！」

気合一閃。巨大な岩は二つに割れる。  
だが、まだ終わりではない――！

「はあああああああああ――！」

本来の俺なら無理だが、俺が投影したのは刀だけではない。その刀の所有者の技術、経験までも投影し、己に憑依させている。  
そして、今回投影した人物は今から約2年前にこの刀を所有していた人。とある学園の風紀と生徒の身を護り続けた『鉄の風紀委員』

“鉄乙女”。

その剛剣は岩を切り裂き、黒鍵による楔もあり巨大な岩を粉碎した。

「ぐつ……投影、開始」

岩を粉碎した後、俺は地獄蝶々を手放しすぐさま次の投影へ。投影したのは黒塗りの弓と無数の棘が特徴的な歪な黒い矢。クリスはレイピアで岩を碎きはしたが、レイピアは折れ岩の残骸も大きさが大きい。あれでは、クリスもワン子も巻き込まれる。

「駆ける、緋の獵犬』 赤原獵犬『！」

走る赤い閃光。赤き獵犬はあり得ない速度で、ありえない軌跡を描き飛来する岩の破片を打ち碎いた。

「くつ……！？」

士郎はその場にうずくまる。自分の技量を越えた動きをしたため、完全に骨が折れてしまったのだ。

そんな士郎に、無情にも地獄蝶々で碎いた岩の破片が降り注ぐ。士郎もここまで酷いダメージを受けると思ってなかつたのか、回避行動が遅れ間に合わない。

その時

「（ぼそつ）」

「！！」

一陣の風が吹き、飛来する岩の破片はさらに細かく分かれた。

「今日は……」

「そりそらー 次行くぞー！」

つて、アンタはまだ続けるつもりか！？

その後、勝負を続行しようとしたモモ先輩を大和が止める。  
勝敗に関しては、仕方ないとはいえ宝具を使った俺の反則負け……  
となるはずだったのだが、クリスが異を唱えた為、この勝負はドロ  
ーとなつた。

「……」

現状は一勝一敗一分け。

引き分けの状態の今、次の勝負の勝敗で勢いが決まる。

「ねえ大和……士郎、キツそうじゃない？」

「だな……珍しく額に汗かいてるし、いつもより表情が硬い」

モロと大和は士郎の異変に気づいていた。  
いや、2人だけではなく、口に出してはいないがキャップとガクト  
も真剣な表情で士郎を見つめている。

「士郎、なんかおかしくない？」

「ああ。 セツモも変だと思つたが…… 士郎ちょっと怪我見てみる」

「いや。 大丈夫だ…… っ！」

京やモモ先輩。 女性陣に気づかればじめても強がる士郎。  
そんな姿を見て、

「…………」

由紀江はつっこみで動いた。

「も、もひだめです。 松風、私は行きます！」

「行けまゆっち！ まゆっちなら出来る！ 止まれば倒れる自転車  
がまゆっちが選んだ生き方だ。坂道を上るんだ！ ペダルをこげー  
！」

「ど、どひしたのいきなりまゆっち！」

由紀江の豹変に驚く一子だが、由紀江はそんなことは気にならなか  
つた。

言わないでくれと頼まれた。けれど、自分に優しく声をかけてくれ  
た先輩が、友達が苦しんでいるのだ。  
ここは引くべきではないと。

「あのっー。 士郎さんの怪我は本当は軽いものではなかったんです  
！ 本当は骨に輝が入っているほど重症で、それでもクリスさんと  
の間に遺恨を残したくないからと無理して戦っていたんですねー！」

静かな河原に清廉な声が響き渡る。

それは、初めてできた共の為に……。

## 万物、悉く切り刻め（後書き）

はい、出てきましたね地獄蝶々。知ってる方はいるんでしょうか？地獄蝶々を知らない方は、この更新日のすぐ後に発売される「つよきす」のリメイク買えばいいと思いますよ。では、更新できた場合はまた会いましょう。出来なければ、年明けに再開しましょう。

それではまた次回！！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7404/>

---

正義の味方と武士娘

2011年12月21日14時51分発行